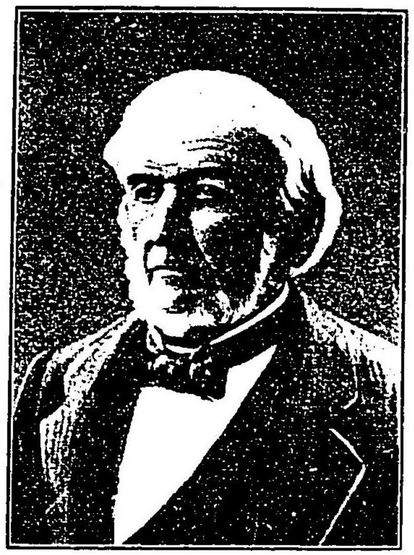
78-98
大日本文明協會刊行叢書
才46編

近世泰西英傑傳

第三卷

明治
44. 9. 27
購求

スィクスア
（國　英）



シートスドッラグ
（國　英）

シーレバンェチ
（國　英）

ーマーロク
（國　英）

ンゾーカ
（國英）

ゾーロ・ルシセ
（國英）

ルネーバ
（國英）

ーレーモ・ンロゴ
（國英）

タッベムガ
（國　佛）

ヒッカルデ
（國　佛）

ーソンマレク
（國　佛）

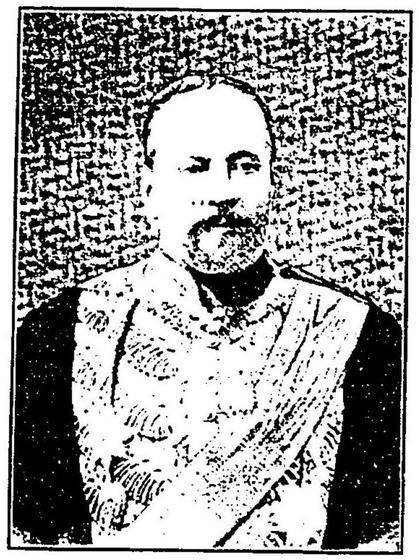
ウィルヘルム二世
（獨逸）

ヒンデンブルク
（獨逸）

ルーデンドルフ
（獨逸）

フコヤチルゴ
（國　露）

アレキサンデルニ世
（國　露）



ウ　ッ　ィ　テ
（國　露）

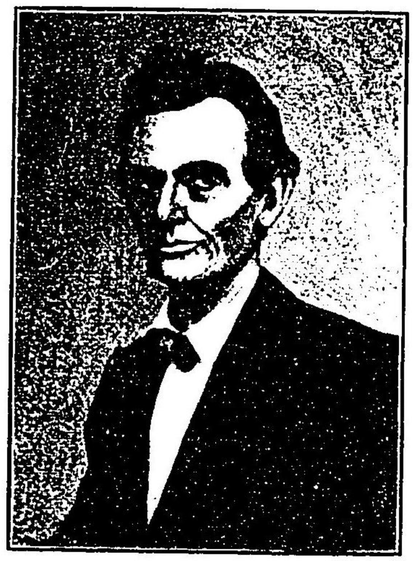
フェフスノドエピポ
（國　露）

ニ ガ ッ マ
（伊太利）

ル ー ヅ カ
（伊太利）

ト ー ス ッ コ
（伊太利）

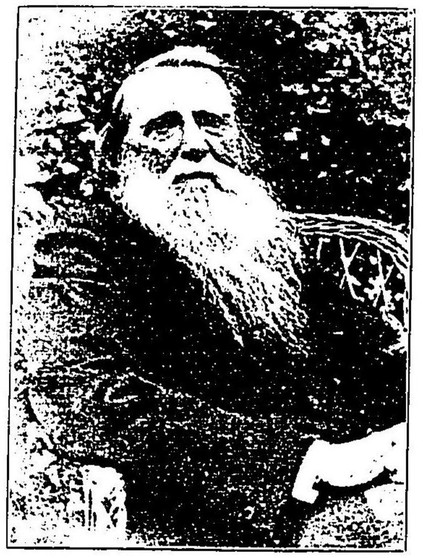
トルエヴズール
（國　米）



ンーカンリ
（國　米）

ンアイラブ
（國　米）

トフタ
（國　米）



ン　キ　ス　ラ
（批評家）

ヌ　ー　ア
（批評家）

ウダルノ・スクマ
（批評家）

例言

第十九世紀の前半期より現今に至る泰西諸國の文化は、何れの方面に於ても驚くべき程の進歩をなせり。而して政治上の發達は特に其著明なるものなりとす。前世紀の初半期に至るまで、列國政治の原則は西洋も東洋と餘り異る所なく、國家は君主若くは貴族の爲めの國家と思はれたり。政府は人民の爲めの政府、又人民に由る政府なり」といふ如き理想は、蓋し列國政治家の未だ思ひ及ばざりし所なり。適〻普國のフレデリック大王の如きは「王は國家の第一の臣僕なり」との自覺を有したれども、人民が一國の政治に參與し、內治外交一に輿論によりて左右せらるゝに至らんとは、其豫想せざりし所なり。

斯くの如く一般人民の政治思想發達したるは、第十九世紀及び第二十世紀の一大特徵なり。而して一般人民の政治思想發達したると同時に、列國政治家の人格及び彼等が用ふる政略の上に著明なる變化を見るに至りしことは爭ふべからざる事實なりとす。前世紀の代表的政治家たるビスマーク、カヴール、及びグラッド

ストーン、又現今世界の大政治家を以て目せらるゝ米國前大統領ルーズヴェルト、獨逸皇帝ウィルレム二世を始めとし、列國の政治家は概して昔時の政治家に見るべからざる道德的品格を具備せり。現代の政治家は概して名節を重んじ、偉大なる公共的精神を發揮せる點に於て、往昔の政治家に優ること萬々なりと言ふべし。

本邦立憲政體日猶淺く、形式あつて實質未だ備はらず、而して一般人民の政治思想の幼稚なること亦甚しとす。政治家の目的單に一身の利害に關し、唯高位高官に昇るを以て能事となさば、現今亦其人に乏しからざるべし。されど現代政治家の任務は正に一般の國民を啓發し、人民の爲めに政治を行ふのみならず、人民と共に政治を行ふに在るを知らば、本邦現代の政治家中之に適應すべき才能と品性とを備ふる者殆ど稀なりとす。本邦の過去に於ては偉大なる政治家少しとせず。後世又畏るべき人傑輩出することあらん。唯目下は過渡の時代にして、制度も人物も共に偉大と稱するに足るものなし。

本卷收むる所の英傑は列國有數の政治家にして、其事業の方法及び成功の秘訣は大に本邦人の龜鑑とするものあり。內は立憲政治の効果を現はし、外は第二十世紀式の新外交を發揮せんこと、これ實に本邦政治家の任務なり。而して世界の英傑は時の古今、國の東西を論ぜず、互に相呼應し、互に相喚起するの傾向あり。本卷若し新時代の要求に應ずべき新人物を誘引する上に於て多少の刺激ともなり參考ともなることあらば、本會の滿足何物か之に過ぐるものあらんや。

因に記す、本卷は文學士大類伸君及び同煙山專太郎君の編纂に係り、兩君は之が爲めに多大の勞力を費されたり。本會は爲に兩君に向つて感謝の意を表す

明治四十四年八月二十四日

大日本文明協會編輯局識

目次

第一　英國政治家

其一　大宰相

第一章　グラッドストーン……一―五七

一　少年時代のグラッドストーン……一―八

二　公人としての準備時代……八―一七

三　保守黨より自由黨への變遷時代……一七―三〇

四　大藏大臣としての活動時代……三〇―三六

五　宰相としての國政改革時代……三六―四七

六　個人としてのグラッドストーン……四七―五七

第二章　アスクィス……五八―一二六

一　赫々たる閲歴……五八―六四

二　織物商の次男……六四—六七
三　全校のキャプテン……六八—七〇
四　オックスフォードの登龍門……七〇—七五
五　辯護士界の花役者……七五—八一
六　議員としての活動振……八一—八六
七　異數の拔擢—臺閣に列す……八六—九一
八　反對黨の驍將……九一—九五
九　大藏大臣—首相となる……九五—九九
一〇　社會主義的財濟政策……九九—一一三
一一　上院改革問題……一一三—一二六

其二　帝國主義者

第三章　セシル・ローズ附クリューゲル……一二七—一七一
一　ローズの家系并に幼時……一二八—一三二
二　南阿の形勢……一三二—一三八
三　クリューゲルの經歷……一三八—一四三

四　ローズの功業　其一……一四三—一五一
五　ローズの功業　其二……一五一—一五九
六　ローズの功業　其三……一五九—一六五
七　ローズの功業　其四……一六五—一六九
八　英雄の死……一六九—一七一
第四章　チェムバレーン……一七二—二〇五
一　家庭と幼時……一七二—一七四
二　螺旋製造業……一七四—一七六
三　尖頭螺旋の特許……一七六—一七八
四　彼が市政に致せる功績……一七八—一八三
五　代議士としてのチェムバレーン……一八三—一八六
六　通商局長官……一八六—一八八
七　グ氏との分離……一八九—一九四
八　統一黨の植民大臣……一九四—一九七
九　南阿戰爭……一九八—二〇三

一〇　關稅改革と退職……二〇三―二〇五

其三　植民地總督

第五章　クローマー卿……二〇六―二四四

一　少壯時代のクローマー……二〇六―二〇八
二　クローマー當時の埃及……二〇八―二一一
三　巨額の國債募集……二一一―二一六
四　印度に於けるクローマー……二一七―二二四
五　アレキサンドリア砲擊せらる……二二四―二二七
六　新埃及再建者……二二七―二三一
七　ゴルドン將軍の死……二三一―二三六
八　埃及の鎮定……二三六―二四一
九　卿の支配下に於ける埃及……二四一―二四四

第六章　カーゾン……二四五―二八二

一　カーゾン卿の少年時代……二四五―二四八
二　政界に於けるカーゾン卿……二四八―二四九

三　印度總督としてのカーゾン卿……二四九―二七〇
四　カーゾン卿の辭退……二七〇―二七四
五　上院に於けるカーゾン卿……二七四―二八〇
六　學界に於けるカーゾン卿……二八一―二八二

其四　國民黨政治家

第七章　パーネル……二八三―三一九

一　パーネル家と彼の少年時代……二八三―二八七
二　彼の政治的生涯―其死……二八七―三〇四
三　政治家としてのパーネル―其人物……三〇四―三一九

其五　文人政治家

第八章　ジョン・モーレー……三二〇―三五三

一　モーレーの生立ちと政界……三二〇―三二三
二　代議院に於ける及び愛蘭尚書としてのモーレー……三二三―三三四
三　自由主義に基づけるモーレーの活躍……三三五―三四〇
四　印度大臣としてのモーレー……三四〇―三五〇

五　辯論家文學家としてのモーレー……三五〇—三五三

第二　佛國政治家

第九章　ガムベッタ……三五四—三九四
一　ガムベッタの少壯時代……三五六—三六四
二　普佛戰爭に於けるガムベッタの活動……三六四—三七九
三　ガムベッタと共和黨　彼の晩年……三七九—三八九
四　彼の人物、辯舌、主義……三八九—三九四
第十章　クレマンソー……三九五—四三三
一　在野のクレマンソー……三九五—三九七
二　政治家としてのクレマンソー……三九七—四一六
五　宰相としてのクレマンソー……四一六—四二三
四　クレマンソー内閣の沒落……四二三—四三三
第十一章　デルカッセ……四三四—四七七
一　ガムベッタの門下……四三四—四三六
二　「レピュブリック・フランセー」の記者……四三六—四四〇

三　代議士　植民大臣　外務大臣……四四〇—四四一
四　ファショダ事件……四四一—四四六
五　一八九九年に於ける彼の宣言……四四六—四六一
六　彼の對伊政策……四六一—四六四
七　英國接近の政策……四六五—四六七
八　彼の退職……四六七—四七〇
九　クレマンソー内閣を倒す……四七〇—四七三
一〇　海軍大臣となる……四七三—四七七

第三　獨逸政治家

第十二章　獨逸皇帝ウィルレム二世……四七八—五〇八
一　ウィルレム二世の幼時及び卽位……四七八—四八一
二　皇帝とビスマーク……四八一—四八七
三　皇帝と新宰相……四八七—四九二
四　社會黨の鎭壓……四九三—四九五
五　植民地の增加……四九五—五〇二

六　獨逸皇帝の近狀……五〇二―五〇八

第十三章　ビスマーク……五〇九―五八四

一　その生長……五〇九―五一三
二　國會時代……五一三―五二一
三　外交官時代……五二一―五三七
四　國會に於ける衝突時代―附丁抹戰爭及び普墺戰爭……五三八―五五一
五　獨逸北部聯邦の建設……五五一―五五七
六　普佛戰爭……五五七―五六六
七　戰後の外交問題……五六六―五七三
八　羅馬教會と社會主義……五七三―五七六
九　彼の晩年と逸事……五七六―五八四

第十四章　ビューロー……五八五―六二五

一　父業を繼ぐ……五八五―五八六
二　羅馬、巴里、彼得堡及びブカレスト……五八六―五八八
三　大使となり、外務大臣となり、大宰相となる……五八八―五九一

四　一八九八年彼が外相としての宣言……五九一―五九五
五　彼の海軍擴張論……五九五―五九九
六　彼の平和會議論……五九九―六〇七
七　彼と北清事件……六〇七―六一一
八　日露戰爭に於ける獨逸の態度……六一一―六一三
九　大宰相を辭す……六一四―六一七
一〇　彼の交友……六一七―六一九
一一　外交家としてのビューロー公を論ず……六一九―六二五

第四　伊國政治家

第十五章　マッヂニー……六二六―六五二

一　ナポレオンと伊太利……六二八―六二九
二　ナポレオン帝國滅亡後の伊太利……六二九―六三〇
三　炭燒黨……六三〇―六三一
四　マッヂニー……六三二―六三六
五　マッヂニーと青年伊太利黨……六三六―六三九

六　マッヂニーと青年歐羅巴黨……六四〇—六四二
七　マッヂニー再び伊太利に入る……六四三—六四五
八　マッヂニー羅馬共和國の統領となる……六四五—六四八
九　建國の三傑……六四八—六五〇
一〇　マッヂニーの晩年……六五〇—六五二

第十六章　カヴール……六五三—六八五
一　カヴールの家系と其生立……六五三—六五八
二　青年時代に於けるカヴール……六五八—六六三
三　閑居時代のカヴール……六六三—六六七
四　活動時代のカヴール……六六七—六七六
五　統一運動とカヴール……六七六—六八二
六　晩年に於けるカヴール……六八二—六八五

第五　露國政治家

第十七章　アレキサンデル二世……六八六—七二七
一　太子時代のアレキサンデル……六八七—六九〇

二　即位當時の露國の國情……六九〇—六九三
三　農奴解放……六九三—六九九
四　地方自治制の採用並に司法上の改革……六九九—七〇五
五　波蘭の叛亂……七〇五—七〇八
六　反動政策の萌芽……七〇八—七一〇
七　アレキサンデルの對外政策……七一〇—七一四
八　虛無主義……七一四—七一九
九　アレキサンデル陛下の弑虐……七一九—七二四
一〇　彼の人物……七二四—七二七

第十八章　ゴルチャコフ公……七二八—七六八
一　彼の生立　クリミヤ戰役以前に於ける彼の經歷……七二八—七三一
二　クリミヤ戰役當時に於ける活動……七三一—七三七
三　一八五六年より一八七〇年までのゴルチャコフ……七三七—七四二
四　倫敦會議……七四二—七四七
五　ゴルチャコフ對ビスマーク……七四七—七五一

六 巴爾幹問題 露土戰爭 伯林會議……七五一—七六八

第十九章 ポビエドノスツェフ……七六九—八一八

一 露國の解決……七六九—七七六
二 彼の人物……七七六—七七九
三 彼の信仰論……七七九—七八九
四 諸家の宗教論を破す……七八九—七九三
五 絶對の主治者と絶對の被治者……七九四—七九六
六 彼の學問論……七九六—八〇〇
七 教育觀……八〇〇—八〇四
八 厭世主義論……八〇四—八一五
九 社會主義論……八一五—八一八

第二十章 ウィッテ……八一九—八五二

一 技師出身……八一九—八二〇
二 彼の經濟政策……八二〇—八二五
三 ウィッテ藏相治下に於ける露國の經濟的發展……八二五—八二七

四 彼の開國主義、立憲主義……八二七—八三四
五 日露戰前に於ける露國財濟とウィッテ……八三四—八三九
六 對日本外交とウィッテ……八三九—八四三
七 ポーツマズに於けるウィッテ……八四三—八四八
八 露國最初の內閣總理大臣……八四八—八五二

第六 匈牙利政治家

第二十一章 コッスート……八五三—九〇一

一 時勢……八五三—八五六
二 コッスートの生立及び其記者時代……八五六—八六三
三 議會に於けるコッスート……八六三—八六九
四 時局の切迫……八六九—八七六
五 戰亂の破裂……八七六—八三二
六 戰亂の經過……八三二—八九四
七 流浪のコッスート……八九四—八九九
八 コッスートの事業……八九九—九〇一

第七　米國政治家

第二十二章　リンカーン……九〇二—九五八

一　風雅何處に生る……九〇二—九〇六

二　可憐の舟子……九〇六—九〇八

三　正直なる店主……九〇八—九一二

四　義俠の辯護士……九一二—九一四

五　非凡の州會議員……九一五—九一七

六　初めて中央議會に出づ……九一七—九一九

七　主義の政治家……九一九—九二四

八　上院議員……九二四—九二八

九　大統領の選擧競爭……九二九—九三一

一〇　大統領となる……九三一—九三五

一一　大統領卽位式の大演説……九三六—九四四

一二　南北戰爭……九四四—九四七

一三　再び大統領となる……九四七—九四九

一四　戰局收まる……九五〇—九五四

一五　其性行逸事……九五四—九五八

第二十三章　ルーズヴェルト……九五九—一〇〇〇

一　ルーズヴェルト家　彼の青年時代……九五九—九六四

二　州議員……九六四—九六七

三　田園生活……九六七—九六九

四　奮鬪生活……九六九—九七五

五　義勇兵團騎隊……九七六—九七九

六　龍攘虎擊……九七九—九八八

七　大統領ルーズヴェルト……九八八—九九五

八　慈眼愛嬌　書齋の人……九九五—一〇〇〇

第二十四章　ブライアン……一〇〇一—一〇一三

一　第一回マッキンレー對大統領候補……一〇〇一—一〇一〇

二　第二回大頭領マッキンレー對大統領候補……一〇一〇—一〇一二

三　聖路易大會大統領候補落選……一〇一二—一〇一四

四　海外旅行……一〇一四—一〇一六

五 タフト對大統領候補……一〇一六—一〇二三
第二十五章 タフト……一〇二四—一〇六三
一 兩親の感化……一〇二四—一〇二五
二 雜誌記者……一〇二五—一〇二七
三 檢事總長……一〇二七—一〇二八
四 巡回裁判所判事……一〇二八—一〇三〇
五 比律賓總督……一〇三〇—一〇三七
六 ルーズヴェルト內閣陸軍卿……一〇三七—一〇三八
七 パナマ運河……一〇三八—一〇四一
八 キューバ政府指導……一〇四一—一〇四二
九 日本來遊 移民相互的禁止……一〇四二—一〇四五
一〇 タフト白堊館に入る……一〇四五—一〇四六
一一 關稅改正……一〇四六—一〇四七
一二 對清政策……一〇四七—一〇五〇
一三 タフトの地位……一〇五〇—一〇五四
一四 中米政策……一〇五四—一〇五五

一五 民主黨議員の勝利……一〇五五—一〇五六
一六 對日態度……一〇五七—一〇五八
一七 仲裁々判提議……一〇五八—一〇五九
一八 清國借款成立……一〇五九—一〇六〇
一九 家庭……一〇六〇—一〇六二
二〇 運動……一〇六二—一〇六三

第二卷 補遺

第八編 建築家

第三十一章 エッフェル……一〇五五—一〇七三
一 十九世紀の建築……一〇六五—一〇六九
二 小傳……一〇六九—一〇七一
三 エッフェル塔……一〇七一—一〇七三

第九編 批評家

第三十二章　ラスキン……一〇七五—一一四二
一　彼の父祖……一〇七五—一〇七八
二　少年詩人……一〇七八—一〇八四
三　初戀の失望……一〇八四—一〇八五
四　オックスフォード大學の生活……一〇八五—一〇八七
八　彼の大發展……一〇八七—一一〇一
六　不幸なる結婚……一一〇二—一一〇六
七　彼の講演……一一〇六—一一一二
八　社會改革家としてのラスキン……一一一二—一一二〇
九　セント・ジョージ商社……一一二〇—一一二五
一〇　オックスフォード大學教授……一一二五—一一三一
一一　再四の失戀……一一三一—一一三四
一二　晩年の雜作……一一三四—一一三六
一三　死……一一三六—一一三九
一四　ユーモリストとしてのラスキン……一一三九—一一四二
第三十三章　テーヌ……一一四三—一一六七

一　少年期……一一四三—一一四八
二　その青年期……一一四八—一一五三
三　失意時代……一一五三—一一五八
四　其晩年　其哲學……一一五八—一一六七
第三十四章　ブランデス……一一六八—一一九九
一　小傳……一一六八—一一八二
二　著作……一一八三—一一九九
第三十五章　マクス・ノルダウ……一二〇〇—一二二八
一　小傳……一二〇〇—一二〇三
三　ノルダウの藝術觀……一二〇三—一二二四
三　ダオニストとしてのノルダウ……一二二四—一二二八

目次

終

近世泰西英傑傳　第三卷

政治家篇

第一　英國政治家

其一　大宰相

第一章　グラッドストーン

一　少年時代のグラッドストーン

一八〇九年はアングロ・サクソン民族の中より三大人物の生れ出でたる故を以て、十九世紀の人文史上に一種の興味を與へたり。アブラハム・リンカーンの生れたるも此年なり。チャールス・グルウィンの生れたるも此年なり。而して我グラッドスト

ーン(William Ewart Gradstone)が、英國リヴァプール市ロドニー街なる豪商の子として、初めて天日の光を見たりしも、實に此年十二月二十九日なりき。グラッドストーンの祖先は蘇格蘭のグレッドステーン地方に出づ。グレッドスラーン(Gieidstane)は鷲の巖を意味す。以て此地の荒寥を察すべく、又以てグラッドストーンが祖先の簡樸剛健なる生活狀態を想ふべし。後數代を重ねて田園は漸く失はれ、家名は一轉してグラッドストーンとなり、遂に大英民族の世界に誇とする不朽の偉名となりぬ。グラッドストーンの姓を有する最後の人は、鷲巖地方より移りて、附近の一小都會に住み、麥麹販賣を業としたり。其孫トーマスはレースに於て小麥商を營み居りしが、長子ジョンをリヴァプールに遣して穀商を營ましめたり。ジョンは即ち我ウィリアム・エワート・グラッドストーンの嚴父なり。彼のリヴァプールに赴くや、其品性の健實と、其精力の絶倫と、其才幹の機敏とを以て、間もなく紳商社會の認識を得、或る商店の番頭より忽ち頭角を挺んで、此商業都府に於ける實業的大名の一人となり、從男爵の名譽を得、國會議員に擧げられ、俊邁なる實業家として、非凡なる政治家として、地方の尊敬を博したりしが、八十七歳の高齢を以て、一八五一年に他界の

人となりぬ。史家往々グラッドストーン父子の關係を評して、老ピールの大ピールに於けるが如しと云ふ。蓋し英國近世史上一對の好美觀と目すべき者なり。

ジョン・グラッドストーンは純粹なる低部蘇格蘭人にして、性質剛健、加ふるに事業の才あり。其配偶アンは高部蘇格蘭に生れ、門地甚だ卑しからず、傳記史家或は以て古英國の王統に出づとすら稱する所なるが、詩的感情に富み、敬虔の念淺からざる婦人なりき。其間に六人の子ありて、ウィリアム・エワートは第四子、父の友人なるリヴァプールの一紳商に依つて其名を與へられしが、少年ウィリアムは美しき家庭の中にありて、特に母の慈愛を受けたり。其一人の兄ロバートソンは、才幹雄辯共に能くウィリアム・グラッドストーンに似て、「荒刻みにしたる虞翁なり」とまで評せられたるが、斯くも俊秀なる兄弟の生れしは、恐らく父母の遺傳と敎育と與つて力ありしならん。グラッドストーンの一家は父なるジョンを中心とする小き學園の觀ありて、父子兄弟の間苟くも事を曖昧にせず、絶えず大小の問題を持ち出して討論考究を怠らざりしと。國會議場に於ける未來の大雄辯家は、斯くの如き家庭の搖籠の中に人となりしなり。且つジョンは當年の保守黨首領カンニングの熱心

なる崇拜家にして、ウィリアムの頭腦は、夙にその感化を蒙りたりき。彼が保守黨の一議員として、其政治的生活を始むるに至りし徑路は、既に家庭の中に存したりしなり。

ウィリアム・エワート・グラッドストーンは暫くリヴァプール近きシーフォースの教會學校に於て其最初の教育を受け、十三歳にしてエートン中學に入りぬ。爾來六年間、秀才の府たる此學校にありて、彼は精苦勉勵、日課として希臘羅甸の古典を學び、課外に數學を修めたり。彼の古典に於ける、學究的の意義を以てすれば特に稱すべきものはなかりしならん。彼の古文は常に生硬を免れざりしと云ふ。而も古典の精神實質に至つては、若きグラッドストーンの學力決して人後に落つる者にあらず。教室の中に於てヴァージル、ホーマー、若くは希臘語聖書中の難句に遭ひ、他生徒の容易に手を附くる能はざる事あれば、少年ウィリアムは當時の同窓少年たりしアーサー・ハーヴェー卿と共に、常に教師の指名を受け、之が解釋の任に當りしと云ふ。彼が高貴なる一生を通じて、希臘羅馬の賢哲詩人と親むの情は、全くこの間に養はれたりしなり。且つエートン時代の彼は誠實謹直にして、規律を重んずる

好學生なりき。有名なる自然科學者サー・ロデリック・マーチソン曰く、グラッドストーンは嘗つてエートンに行きたる者の中、最も品佳く愛らしき少年なりきと。ビショップ・ハミルトンも亦曰く、予は元來全く怠惰なる少年なりしが、グラッドストーンを知りたるに依りて、幸にも惡事より免れ得たりと。以て彼が品性の輝き既にエートン時代に顯はれしを知るべし。當時同窓の友にして、後年世に顯はれしもの少からず、就中最も親しかりしはアーサー・ハラムなりき。詩人テニスン卿はハラムの爲めに「イン・メモリアム」の一篇を書き、以て其品性と天才を不朽に傳へたり。少年ウィリアムは亦その愛慕者の一人なりき。彼は又ブットボールを能くし、クリッケットに巧に、好んで短艇を乘り廻したりしが、其最も快適とする所は同好を語らうてウィンゾル附近の名勝を跋渉するにありき。學生仲間に於ける彼は不思議にも別に不人望と云ふにはあらねど、人氣を集めしにもあらず、唯相知る朋友同志の間に愛敬を博したるのみ。其漸く才幹を發揮し始めたるは、エートン・ソサイティーに於ける討論家として、及びエートン・ミセラニー誌の寄稿家編輯者としてなりき。彼は一八二七年の冬クリスマスを機として此地を去り、暫く家庭教師に就き

ぬ。

翌年グラッドストーンはオックスフォード大學なるクライスト・チャーチ・カレッヂに入りぬ。當時此校にありし者にして名を英國の社會に現はしゝもの其人に乏しとせず。マンニングはウェストミンスターの大僧正として、シドニー・ハーヴァートはグ氏と親密なる政界の大立物として、又雄辯家ロバート・ローエの如き、財政家ジョージ・レーウィスの如き、共に此處にありき。グラッドストーンがケンブリッヂに行かずしてオックスフォードを選びたるは、最もその宜しきを得たりしものなり。蓋しオックスフォードの學風と言ひ、土地柄と言ひ、彼の性格を大成せしむるに最も好適なりしが故なり。彼は此處にありて研學甚だ努め、毎朝四時間は日課を學び、後出でゝ野外に遊び、午後は講義を聽き、集會に行き、夜は專ら讀書を事としたり。彼は又毫も酒を口にせず、節制の氣風を自から同窓の間に及ぼして、大に後進を益したり。當時オックスフォード大學にはカレッヂ全體に通ずる聯合討論會ありしが、グラッドストーンは入校第二學期目に會員の一人となり、後其幹事となり、又遂に會長に擧げられたり。此討論會たるや、素と一個の修辯會たるに過ぎざるも、時の大宰相は

必ず此會に注意して、他日の閣僚を此處に發見せんとすとさへ評判せらる。青年グラッドストーンが早くも頭角を此會に現はして、會長の地位に擧げられたるは、其幸運の先驅とも見るべきなり。元クライスト・チャーチ・カレッヂは、如何なる因緣に依るやを知らざるも、自から英國大宰相の養成所たる觀なきにあらず。リヴァプール卿、ジョージ・カンニング、ロバート・ピール、ダーベー卿、サリスベリー卿、ローズベリー卿、皆悉くクライスト・チャーチに出づ。此討論會に於けるグラッドストーンの處女演說が、後ビショップ・チャールス・ウォルヅウォースをして「此人必ず大英國の宰相たるの日あらんと感得せしめたり」と言はしめしは、恐らく空談にあらざりしならん。此演說に於てグラッドストーンは天主敎徒の自由を擁護し、猶太敎徒の特權擴張を排斥し、奴隷制度の漸進的廢止を主張したるが、これ明かにオックスフォード大學の保守黨趣味を代表するものにして、同時に過去を敬ひ、傳說を愛し、國家の古き制度に對しては飽くまで尊崇の念を絕たず、而も猶現在及び將來の避くべからざる時勢に對しては、充分寬洪なる精神を開かんとするグラッドストーン本來の性癖を現示するものなりき。彼は又此討論會を以て滿足せず、オックスフォード論文倶樂

部なるものを創立して、同好の秀才を會し、互に論文を朗讀し思想を交換するを以て大なる歡樂としたり。學生間にては此會合を呼んでウェッグ(Weg)と言ひたるが、これウィリアム・エワート・グラッドストーンなる名の頭字を取つて綽名となせるなり。グラッドストーンは討論文章のみならず、野外遊戯に於てもオックスフォード大學の運動家中に好位置を占めたりき。以て彼が行く所として可ならざる所なき天稟の才能を見るべし。彼のオックスフォードを去りしは一八三二年の春なり。聯合討論會長の地位は、彼が親密の同窓生にして、後に一代の名僧となりたるヘンリー・エドワード・マンニングの繼承する所となりぬ。

二　公人としての準備時代

グラッドストーンのオックスフォード大學にあるや、好んで聖書を學び神學を修めたりしが、當時カーディナル・ニューマンの宗教運動は猶未だ起るに及ばざりしも、若きグラッドストーンの清醇なる心は、何時しか國教會の聖職に向ひぬ。而も嚴父のジョン・グラッドストーンは愛兒の才能に見る所あり、斷じて僧籍に入るを許さず、飽くまで政治舞臺に立つべきを慫慂して止まざりしかば、若きグラッドストーンは意を翻して之に從ひ、オックスフォード大學を出づるや、直ちに南歐伊太利に遊び、專ら美術と語學を修む。偶然にも此旅行は彼をして後年長く伊太利を愛し、その進歩を援くるの動機を與へたりしが、淹留僅に六個月にして、彼が公生涯に打つて出づべき機會は電光の如く來りぬ。當時英國の貴族社會は新興の改革運動を惧れ、保守黨の主張を代表すべき有爲の人材を求むるに急なりしが、ニューカッスル公爵も其一人なりき。恰も好し公爵の一子リンカーン卿はグラッドストーンと學窓を同うして、オックスフォードの討論會に於ける彼が非凡の辯才を豫て歎服し居たりしかば、書を公爵に裁し、「人あり、今やイスラエルの中に起れり」とてウィリアム・エワート・グラッドストーンを熱心に推奬したれば、老公爵は大に歡んで伊太利より彼を迎へたるなり。一八三二年十二月三日、國會は解散せられ、彼は直ちに候補者としてニューアークに現はれ出で、乃ち宣言して曰く、予は何黨何人の意見にも掣肘せらるゝ事なきも、多少の利益を名として、恐るべき害惡を世に瀰漫せんとする方今の惡風潮に對して、飽くまで反抗せざるを得ずと。斯くして彼はオックスフォー

ドの討論會に於ける紀念すべき演說と同樣の保守的政見を以て、選擧區民に訴へたりしが、書中又曰く、爲政者の職分に對する、本來宗敎的なるを要す。立法機關も亦一個人と同じく、飽くまで最高眞理に忠實ならざるべからず。貧民と勞働者には充分の注意を拂ひ、奴隷は漸次解散すべきも、先づ之をして獨立市民たらしむる準備をなすべしと、以て當年に於ける青年候補者の宗敎的情操と人道的精神と及び保守的思想とを想望するに足らん。グラッドストーンの政治意見は進步發達の絕間なき連鎖をなせり。保守黨代議士として現はれたる彼は、終に自由黨の偉大なる首領として、約半世紀の間、改革運動の總司令官となりぬ。彼が宗敎的情操と人道的精神とは、終始一貫、唯其熱を加へ、其强さを增し、其大を致したる點に於てのみ前後の比較をなし得べし。グラッドストーンは斯くの如くして始めて公生涯の初陣に現はれ、ニューアークの選擧區は喜んで彼を議院に送りぬ。新國會は一八三三年一月二十日を以て召集せられ、二十五歲の青年政治家は、其雄偉なる體格、端嚴柔和なる容貌、明星の如く輝ける眼を以て、始めてパーリメントの議席に就きぬ。

英國當時の上下兩院は、幾多の明星を以て飾られたり。ウォータローの老雄ウェリントン將軍は上院にありて保守黨の牛耳を執り、勤王の熱誠を以て頑固に改革の氣運に抗したり。之に對して多藝多才の自由黨首領ブローハム卿あり、保守黨中の進步主義者リンドハースト卿あり、相並んで上院の花形役者たり。英國政治の本舞臺たる下院にはサー・ロバート・ピールあり、經世の才と雄辯の力を以て、殆ど一代を贖しうせんとす。之と比肩すべきものは愛蘭の人豪ダニール・オーコンネルのみなりしが、グラッドストーンは後親しく此二人と交を結ぶに至りぬ。又快辯劍の如く鋭きジョン・ラッセル卿、漸く頭角を顯はし始めたりしバーマーストン卿、文學の才を以て一代に聞えしマコーレー、グロート、バルワーの如き俊才、皆共に下院の名星なりき。時の宰相はメルボルン卿にして、籍を上院に置き、下院に於ける自由黨首領は大藏大臣アルソープ卿なり。而してグラッドストーンの議院に入りし頃は、彼が半生の政敵たるべきヂスレリーは猶未だ議院に現はれざりき。この新國會に於て、植民大臣スタンレーは英領植民地に於ける奴隷使用廢止決議案を提出したりしが、前の植民次官ホルウィック卿は、緩慢に過ぐる嫌ありとて此案を

非難し辯論の間に引證として、西印度のデメララ地方なるジョン・グラッドストーンの田園に於ける奴隷の死亡率の高度なる事を述べたり。茲に於てかニューアーク選出の青年議員は終に默して止む能はず、起つて直ちに之を辯駁し、死亡率の高かりしは酷遇の爲めにあらず、老齢の爲めのみ、奴隷制度は全廢すべきも、猶相應の準備と適當の賠償を要す、予は實に正義人道宗教上の問題として此議案に大なる興味を感ずと述べぬ。處女演説は如何なる感動を議場に與へたるか。英國の議院は常に青年政治家の言論に對して敬意を拂ふ美習あり。此時此際に於けるグラッドストーンの辯駁演説が、同情を以て迎へられたるは事實なるも、別に深大なる印象を與ふる程にはあらざりしならん。翌日英王ウィリアム四世が書面を厳相アルソープ卿に送りて、若きニューアークの議員が示せる才能の甚だ有望なるを喜ばれたりと言ふは、恐らく虚説にもあらざらんが、當時院外にありてグラッドストーンの評判を耳にし、且つ彼と會談を試みたるヂスレリーが妹に送れる書翰の中に彼を評して、「此青年には將來ありとも覺えず」と言へる一個診話を參照すれば、兎も角もグラッドストーンの處女演説は、彼の先輩ロバート・ピールの其れ

の如き成功を博せざりしと同時に、雄辯家にして且つ戯曲家たりしシェリダン、若くは後年の政敵ヂスレリーの其れの如き大失敗にも陷らざりしなり。蓋し彼は成功せんが爲めに演説したるにあらず、偶然の必要彼をして演説せしむべく餘儀なくせしめたるものなればなり。

最初の國會閉ぢて後、グラッドストーンは辯護士たらんとして法律研究を始めたりしが、須臾にして之を抛ち、時恰もメルボルン内閣の後を受けて宰相の地位に上りしピールの拔擢に依り、大蔵省參與官となりぬ。これ一個の閑職に過ぎざりしも、間もなくアバーデン卿の下に植民次官となり、植民省に關する一切の説明を下院に試むる役目を帶びたり。彼が頭腦の明敏と辯舌の快達との漸く下院に認められしは、當に此時以後なりき。而も官人生活は長からず、愛蘭教會の財産問題にてピール内閣の總辭職となり、彼は閑散の地に歸りぬ。その間彼は專ら讀書を事とし、時々音樂の集會に出で、又社交的倶樂部に臨み、安息日には必ずセント・ゼームス寺院若くはオール・センツ・チャペルに出席したり。ホーマー、ダンテは此頃既に彼が特愛の伴侶なりしが、二十二卷に餘る聖オーガスチンの著書を通讀せ

るも當時なりき。斯かる間にウィリアム第四世崩じて、ヴィクトリア女皇の新治世に入り、國會は明かに召集せらるゝ事となりたれば、グラッドストーンは再びニューアークの選擧區に歸り、難なく再選の榮を得たり。時の宰相はメルボルン卿なりしが、聲望甚だ重からず、天下皆ロバート・ピールを仰慕したれば、其取つて代るの日は衆人の期して俟てる所なりき。活動の時代は斯くて眼頭に開かれぬ。

閑散時代の出來事として記念すべき者の一つは、「國家と宗教の關係」(The State in its Relation with the Religion)と題する名著の刊行なり。此書は近代の思想發達史に顯著の影響ある者にはあらざれど、マコーレー卿が其有名なる論文中に之を批評したるの故を以て、當時大に讀書界の興味を惹き、盛なる論評の題目となりたり。且つ虞翁傳中此書を逸すべからざるは、その彼が政治意見の發達史を語る紀念的著作なると、彼が本領以外神學者として論文家としての本能を證明したる精神的產物たるとに依れり。更に此時代に於けるグラッドストーンが生涯の大なる出來事は、カザリン・グリン嬢との結婚是なり。グラッドストーンは讀書と著述の爲め終に眼疾を憂へ、一八三八年の冬を羅馬に送りたりしが、此異鄕に於て端な

くも舊知グリン夫人の一家と會し、交驩の機會を得、其長女カザリンとの間に婚約成りて、翌年七月二十五日、英國に歸つて後、華燭の典をハワーデン城に擧ぐ。結婚は實に幸福を極めたる者なりき。カザリンの良人に對する注意の行屆ける、內助の遺漏なきは、英國婦人中にも罕に見るの好典型なりき。華燭の典を擧げしハワーデンは、後グラッドストーンの生涯に最も美しき背景を與へたる彼が特愛の居城となりしが、カザリンの兄にしてグリン家の嗣たるサー・ステフェン・グリンの長逝するに及び、グラッドストーン夫妻の所有に歸したるなり。

一八四一年に及びメルボルン內閣は愈〻破綻を生じ、財政上の缺陷を濟はんとして、稅法整理を試みしが、機會を捉ふるに俊敏なるピールは、直ちに政府不信任案を議會に提出し、一票の差を以て政府を敗り得たり。而も一票の多數は明かに與論を代表し、嚮て行はれたる總選擧の結果は非政府黨の票數九十の多きを加ふるに至りぬ。新議會召集せられて討論三夜に亙りし後、政府は全く議場に敗れて、ピール內閣即ち成り、グラッドストーンは商務次官に任ぜられ、造幣局長を兼ぬ。爾來議院に於ける彼の論題は著しき變化を示し、好んで國家の義務、敎會の財產、宗

教育の必要、猶太人の特權を論じたりし彼は、此頃より一轉して關稅改正、器械の輸出、鐵道監理、小麥稅等の事務的問題に接觸し始めたり。一八四二年の關稅率改革は新內閣の事業中最も重大なる者なりしが、グラッドストーンは凡そ百二十種の物品に對して減稅の方針を取り、議會に於て之が說明の任に當りたり。此說明を聽ける人は、彼が大英國民の商業事情に精通して、殆ど洩らす所なき周到の知識と、之を細說詳論して興趣の盡くるなからんとする天稟の才とを歎美せざらんとするも能はざりき。翌年商務大臣リボン卿の職を去るや、彼は直ちに其後を襲うて內閣員となりぬ。時に彼年三十五歲。世の人彼が財政的手腕と雄辯の故を以て、彼を呼ぶに「小形のピール」てふ綽名を以てせしが、小形のピールは間もなく、ピール其人よりも偉大なりとして讃稱せられんとす。運命は彼の前に絕えず順風を齎らし來りたり。而も一八四五年に及んで、彼は一見極めて奇妙なる理由の下に、商務大臣の椅子を拋ち了んぬ。此年の議會に宰相ピールは、愛蘭に非宗派的の學校を興し、且つ天主教徒の高等教育機關たるメーヌースの學校に特權を增與するの法案を提出したりしが、グラッドストーンは之に對して胸中忽ち困惑を感じ、此計畫には贊成なるも、提案者たる位地に立つは良心の肯んせざる所なりとて、親友の忠告をも顧みず、斷然ピール內閣を去りぬ。此行動は經世家的常識に照して、理解し難き妄動と見られ、折角日の出の人物も、爲めに或は浮ぶ瀨なきの窮境に陷らんと危ぶまれしが、彼は極めて平心にして晏如たりき。而して辭職以前第二次の關稅改正案を起草し終り、再び書齋の人となりて、教會史と古文學の研究に耽りぬ。

三　保守黨より自由黨への變遷時代

池中の龍は幾何もなくして再び登天の機會を得たり。グラッドストーンが內閣を去りたる其年の冬、愛蘭は馬鈴薯不作の爲め一大飢饉に遭遇したり。コブデン及びブライトを中心とする穀物條例廢止運動は、其結果として非常の氣勢を加へ、宰相ピールも止むなく穀物の自由輸入を承認せんとするに至りぬ。蓋し豫て保護貿易論の信者なりしピールも、思想の變化と眼前の急務に促されて、之を躊躇し得ざりしなり。內閣は爲めに動搖を生じ、瓦解の止むなきに至りたるも、反對黨

の首領ジョン・ラッセル卿亦最早穀物條例に執着するの意なく、此際内閣の引受を肯んせざりしかば、ビールは再び宰相として新方針の協同者を求め、植民大臣スタンレーに代ふるにグラッドストーンを以てしたり。グラッドストーンはビールと同じく當時漸く自由貿易主義の賛成者となりつゝありしなり。新内閣の成立するや、議會は一旦解散せられしも、グラッドストーンはニューアークの選擧區より再び代議士たる能はず、遺憾にも下院に於ける自由貿易主義の論戰に參加するの機會を失ひたりき。これニューアークの選擧區は、本來保護主義の先天的主張者たるニューカッスル公爵の勢力範圍にして、グラッドストーンは從來其庇護を蒙りたる緣故あるが爲めに、新政見を此選擧區に强ふるを敢てせざりしなり。故に彼は專ら閣内にありて宰相ビールを助け、新方針の勝利に努力したり。努力は空しからず、一八四六年六月二十八日、穀物條例廢止案は、幸に上院を通過したりしが、恰も之と同日に政府は愛蘭强制案の故を以て下院に破れ、ジョン・ラッセル卿新たに内閣を組織したり。斯くしてグラッドストーンは再び閑散の生活に入りしが、恰も佳し翌年春オックスフォード大學選擧區の一代議士其職を辭せしかば、グラッドストーンは

之が後繼者に擬せられ、非常の喜悅と感謝を以て、此名譽なる推薦を受けぬ。之より以後三四年間は、彼が政見の發展時代にして、從來の議論と全く面目を異にするやの觀を示し、徐々として進化の一路を歩みぬ。

グラッドストーンの在野時代に於て史家の感興を惹く者の一つは、ドン・パシフィコ事件の顚末なるべし。ドン・パシフィコは葡萄牙系統の猶太人にして、ジブラルタルに生れたるの故を以て英國の臣民となりしが、一八四七年希臘のアゼンスに住みて、暴徒の爲めに其家を毀たれ、三萬磅の賠償を希臘政府に請求して聽かれず、之を倫敦なる外務省に訴へしに、時の外務大臣パーマーストン卿は威力を以て希臘の船舶を捉へ、爲めに佛露の激怒を招いて、一時歐洲の風雲を亂飛せしむるに至りたり。上院は痛くパーマーストン卿を難じ、彈劾の決議案を通過したる程なるも、これ素よりラッセル内閣を動かすに足るべくもあらざりしが、下院に於ては獨立自由派の奇傑ローバックの動議を機會に、大討論の幕を開きぬ。ビールが此日の雄辯は、不幸にも其最後の辯解演說として長く後人の追懷を惹き、パーマーストンの辯解演說は、彼が生涯に於ける無比の成功として、大に傳記の光彩を添

へたる程ありて、懸河の妙辯五時間の長きに亙れりと云ふ。グラッドストーンの之に對する論難も、亦修辭に於て精神に於て、偉大なる傑作の一つなりき。パーマーストンは主として大英民族の國民的自負心に訴へて、議場の感情を煽揚したるが、グラッドストーンは專ら大國民の德義心に訴へて、强者の自制と寛恕とがアングロ・サクソンの名譽なるを說きぬ。投票の結果はパーマーストンの信任を維持し得たるも、英國民は正義仁愛の政策を天下に施すの職分ありてふグラッドストーンの豫言者的獅子吼は、長く後代を感動せしむべき雄辯として傳へられぬ。

ドン・パシフィコ事件の大討論は、更に痛ましき出來事を聯想するに至らしめぬ。討論の終りしは拂曉の午前四時なりしが、此日ビールは夜來の疲勞を慰せんとて、グリーン・パークの柵に沿ひ、馬を憲法丘上に走らしめしが、突然彼は鞍上より振落され、不幸にも馬蹄の蹴破する所となり、終に落命の非運に逢ひぬ。享年六十三歲。哀傷の聲は國內に溢れたり。翌七月三日下院に於てグラッドストーンは追悼の辭を述べたるが、剴切の雄辯人をして感動措かざらしめぬ。斯くしてグラッドストーンは兎も角も保守黨系の首領たる親密の先輩を失ひ、一層自由となりたれば、

彼が政界に於ける行動は、益〻注意の焦點となりしが、穀物條例廢止案以來、保守黨の中心を遠かり居たる所謂ピール派の一團體は、茲に至つて少く解體し、或者は舊巢に歸り、或者は新棲を求めんとす、グラッドストーンの新面目も之より漸く喚發し始めぬ。

一八五〇年冬、グラッドストーンは一家を携へて、南歐ネープルスに行く、蓋し彼が幼兒の健康を養ひ、且つは暫く安息を樂まんが爲めなり。而も銳敏なる彼が人道的精神は、彼をして休息する能はざらしめたり。當年のネープルスはフェルデナンド王の專制治下にありて、絕えざる革命運動の舞臺なりしが、時恰も國會議員の半數は二萬の市民と共に政治的犯罪の故を以て牢獄に投ぜられ、極めて悲慘の境遇にありしかばグラッドストーンは備さに之を精査して、一八五一年四月二日、書を倫敦なる親友アバーデン卿に送り、法律を蹂躪して良民を虐遇するフェルデナンド王の妄狀を文明列國民に訴へたり。外相パーマーストン亦グラッドストーンの公開狀を列國政府に送りたれば、フェルデナンド王非難の聲全歐に揚り、囮て監獄の改良も行はれたりしが、後十年ならずして革命運動は成功し、伊太利統一

の事業終に成りぬ。世上或は他國の政治に容喙したりとの故を以て、グラッドストーンの行動を誹譏するもあれど、人道的政治家としての彼が功績は、公平誠實なる觀察者の等しく認めて歎美する所、ガリバルジーの如きも彼を目して伊人利統一の先驅者と言ひぬ。彼自身も亦死に至るまで、伊太利の愛慕者、同情者なりき。

ジョン・ラッセルの自由黨內閣は、約六個年の生命を保ちしが、その間にグラッドストーンが下院に於ける討論指導者たるの地位は、漸々明瞭の度を加へ來りぬ。特に舊教僧侶の稱號問題に於て然りとす。當時漸く熾盛となりしカーディナル・ニューマンの牛津運動（オックスフォード・ムーヴメント）なる者は、本來知識階級の間に異常の感化を及ぼせしも、一般公衆とは交渉甚だ少なかりき。而も其聲甚だ大なりしかば、羅馬法皇は誤つて之を英國民全體に亙る舊教的覺醒なりとし、全英國を羅馬教會の範圍內に取り入れんとしたり。此見解に基づきて、爾來英國に於ける天主教僧侶は、直ちに寺院所在地の名を採りて其稱號に冠する事となり、有名なる高僧ワイズマンの如きは、即ちウェストミンスター寺院を管するの故を以て、嘸てアーチビショップ・ウェストミンスターの稱號を戴きぬ。而も斯くの如き稱號を戴きたるの一事は、新教徒多き英國の

社會に、反感を與へしこと著しく、暴徒諸處に起りて舊教寺院を燒かんとさへしたれば、宰相ジョン・ラッセルは民心鎭撫策として、舊教僧侶が英國の地名を稱號に用ふるを嚴禁するの法令を布かんとせり。グラッドストーンはこれ明に國民の社會的自由を奪ふ者なりとて激烈に反對し、議會に於ける當時の名流コブデンの如きブライトの如きグラハムの如きロエバックの如き、亦悉く彼に左袒したり。議會の多數は眼前の騷擾に驚きて兎も角も此案を通過せしめしが、騷擾は爲めに收まりしと同時に、法律は毫も勵行せられず全然空文に終りたりき。元來此法案は特に重大の問題にはあらざりしも、唯之に依つて下院の討論に於けるグラッドストーンの指導的地位を明確堅固ならしめし點を以て、注意を値するものなりき。

ラッセル內閣は其後幾度か頓挫を重ねしが、遂に外相パーマーストンの不謹愼なる言論の爲めに、忽ち瓦解の餘儀なきに至り、當時亡父の後を襲うてダーベー侯となりしスタンレー卿新に保守黨內閣組織の任に當り、ヂスレリー擧げられて其大藏大臣となりぬ。彼は始めて內閣の一員となり、始めて豫算案を編成する任務に當りたるなり。議會は頓て解散せられ、グラッドストーンは再びオックスフォード

より出づ。總選擧の結果は、大勢の變化なく保守黨の多數を示したれば、ヂスレリーは始めて自己獨得の方針に則れる新豫算案を議會に提供せり、而してこゝに端なくもグラッドストーンと最初の衝突を演出するに至りたり。

一八五二年以後二十四年間の英國議會史は、グラッドストーンとヂスレリーとが龍虎相搏つの壯觀に依つて、不朽の精彩を放ちたり。此年十二月ヂスレリーが渾身の才力を灑げる豫算案、始めて議場に現はれ出でぬ。其眼目とする所は、農業上の利益を保護する爲め、麥麹の稅を減じ、之が代價として住家稅を增加するにありしが、討論の開始せらるゝや、辯難紛々深更に及んで猶止まず、ヂスレリーが演說を終へたるは正に拂曉二時なりき。彼が當夜の演說は傑作中の傑作と稱せられ、機智湧くが如く、情熱燃ゆるが如く、銳氣殆ど當るべからず、縱橫の辣辯迸りて、果ては痛罵を極め、冷嘲を擅にし、何人も之に向ては最早一言をも酬い得ざらんと感歎せしめたる程なりき。ヂスレリーは明に自己の成功を認め喝采の中に悠然席に復しぬ。而して其一刹那、グラッドストーンは宛ら猛獅の躍るが如く、直ちに演壇の人となれり。彼は當夜何等の準備をも有せざりき、而もヂスレリーの傍若

無人なる態度は、痛くも彼を激昂せしめ、「是實に禮儀と作法を逸したる妄言暴論なり。議院は直ちに審判を加へざるべからず」との警語を冒頭として、沈痛雄渾、迅雷豪雨の如き妙辯を揮ひ、ヂスレリーの一言一句を悉く粉碎し盡し、新豫算案をして殆ど完膚なからしめたり。議場は宛ら魅せられたるごとく、曩にヂスレリーの演說を絕妙なりとして賞讃したる人も、グラッドストーンの辨駁を以てより偉大なりと感歎せざるを得ざりき。議場は忽ち二派に分かれ、採決の結果政府黨は十九票の差を以て一敗地に塗れ、ダーベー內閣は直ちに潰倒したり。斯くして下院に於けるグラッドストーンは、愈〻明確に保守黨反對の地位に立ち、同時に爾來一八七六年ヂスレリーがビーコンスフィールドの爵位を得て籍を上院に列するに至るまで、四半世紀の長きに亙る兩雄對戰の幕は開きぬ。由來兩雄の抗爭はフォックスとピットとの對戰の如く、氣質、品性、地位、政見、總てに於ての衝突鬪爭なりき。彼等は生れながらにして敵味方たる運命を有せりと謂ふも、或は誣言にあらざらん歟。趣味と言ひ、性質と言ひ、演說の遣口と言ひ、兩者は全く相異りたり。グラッドストーンに缺點ありとせば、そは何事にも餘りに眞面目過ぐるにあり。ヂスレリー

の缺點は、之と正反對にて、何事にも眞面目ならざるにあり。ヂスレリーの討論の妙所は、主として揶揄、嘲弄、惡罵にあり、彼は奇想縱横、巧みに形容の詞を綴りて、論敵を嘲り聽衆を笑はしめたり。說明の才に至りては彼の甚だ不得意とする所にして、事件の描寫、政策の叙述の如き、特に人をして倦ましめざるを得ざりき。グラッドストーンの辯舌は之と正反對なり。其得意とする所は說明の巧妙にして人を魅せむとするにあり。通常の財政家をして述べしめば、乾燥無味蠟を嚙むが如き豫算の說明も、一度彼の口頭に上れば宛ら詩歌小說の如く、人をして愉快に解得し了らしむ、これ實にグラッドストーンの特技とも稱すべし。肉聲に於ても兩雄互に同じからず、ヂスレリーの聲は深沈にして何となく妙味あり、低調なるも力に富み、議場の隅々までも能く徹底す、唯變化に乏しきを以て音樂的の興趣少なしとなすのみ。グラッドストーンの聲は稍〻高調にして爽かに且つ透き通り、變化自在、一語一句に感動を起すの妙味を備ふ。日常の容子に於ても兩雄相異り、グラッドストーンは頗る會話好きにて、何人にも能く語り、又何人にも能く聞かんとす。ヂスレリーは平常多くを言はず、親友の間にありてすら、時としては凄味を帶ぶる程

默然たる事あり。グラッドストーンは殆ど衣服に頓着せざる人なり。ヂスレリーは絕えず新流行を趁ひ、老年に及んでも一見青年の觀ありたり。グラッドストーンは長き公生活の間屢〻政見の變化を見たるも、其變化は皆胸中に自ら生長し來りたる確信の結果に外ならず、ヂスレリーは本來政治的確信なる者を有したるや否すらも評家往々之を疑問とす。グラッドストーンは始め保守黨（トーリー）として政界に現はれ、漸く自由急進派の人となれり。ヂスレリーは之と正反對に、始めオーコンネルの感化の下に急進派中の一人たり、而して後保守黨に入りぬ。世人の多くはグラッドストーンを以て眞面目なる保守派の變じて眞面目なる急進派となりしことを信ず。然れども何人もヂスレリーが本來眞面目なる急進派なりしや、將又眞面目なる保守黨なるやを留意せんとも思はざるなり。ヂスレリーの保守黨と變じたるは、此處に功名の餘地あるを觀破せる結果なりとは單なる政敵の惡口のみにはあらず。蓋し當年の自由黨にはパーマーストンあり、ジョン・ラッセルあり、コブテンあり、ブライトあり、而してグラッドストーンありたるが、保守黨の中には一人の俊傑の大になすあらんとする者なく、多くは氣品ある田舍紳士のみなれば、ヂ

スレリーは宛ら鷄群の一鶴、超然として濶歩するを得たりしなり。グラッドストーンとヂスレリーとの對照は、猶他の多くの方面に於て興味頗る深し。彼等は教育に於ても既に大に異れり。其身を起したる門地に於ても既に大に異れり。又普通の文化に對する趣味好尚に於ても既に大に異れり。各〻相異れる性格才能を以て、二十四年間大問題の起る毎に、火花を議院に散らすの論敵たりしは、實に天下の珍とするに足る。而して兩雄各〻特異の長所短所あるに拘らず、公人として共通の美所と稱すべきは、二人ながら公私の生涯に於て、一の指點を被るべき醜聞を生せざりし事なり。兩雄は絶えず戰へり。されど其戰ひは常に快活にして華麗なる大丈夫の公戰たるを失はず。英國議院史上、永遠に感興の泉たるべき戲曲的一大偉觀をなしぬ。

政敵たりしグラッドストーンとヂスレリーの比較は確に感興深しと雖、政友たりしグラッドストーンとブライトとの對照も亦妙味淺しと謂ふべからず。二人の友情は強かりしも、其行動と素養とは全く相異るものありたり。ブライトは所謂高等教育を受けたる人にあらず。彼の受けたる教育は全く事務的商業的なり。彼は

佛蘭西語を讀み、且つ能く話し、又少しく羅甸語を解したるも、希臘語に至つては全く門外漢なりき。されど彼は好んで書を讀み、苟くも英語の傳へ得る總ての高貴なる思想に親しむを怠らざる人なりき。特に其愛讀措かざるは聖書とダンテの詩篇なりき。演說家としての彼は簡潔、雄健、沈痛なる言語と句法と格調を有し、或時は劍を揮つて斬るが如く、或時は矢を番へて射るが如く、何れにしても聽衆の心胸に徹せしめずんば措かざりき。肉聲の美に就てはグラッドストーンに優る所あるも或は劣らざりしならん、討論は頗る不得意なりしも、演說は時としてグラッドストーン以上の高潮に達したる事もなきにあらず。二人に共通なる格性と謂ふべきは、正義の存する所、公衆の狀態を改善する希望の存する所、必ず之を貫徹せずんば止まざらんとするの熱情是なり。彼等は共に相信じ、互に相鼓舞する所ありたり。ブライトの事業は多く議院の外に於てし、グラッドストーンの事業は多く議院の中に於てす。ブライトはアングロ・サクソン民族特有なる諧謔の才を有したり。而してこれグラッドストーンに缺くる所、ブライトの此才能に對しては ヂスレリーと雖、畏憚せざるを得ず、彼は容易に鋒尖をブライトに向けざりき。こ

れブライトの反擊力極めて强烈なるを知りたればなり。ブライトは內治問題に關して、殆ど終始グラッドストーンと行動を共にしたるも、其外交方針に對しては甚だしく冷淡なりき。蓋しネープルス事件の如きすら、外國民の政治に就きて何等かの干與を試むるは、英國政治家の本領にあらずと彼は信じ居たればなり。

四　大藏大臣としての活動時代

一八五二年の冬、グラッドストーン對ヂスレリーの論戰終りて直ちにダーベー內閣の破滅となるや、宰相アバーデンの下にピール派と自由黨との聯立內閣成り、グラッドストーンは始めて大藏大臣の要路に立ちたり、時に年四十四歲。彼が最初の豫算案は、翌年四月十八日を以て議會に提出せられしが、これグラッドストーンが其後屢〻編成したる豫算の根本方針を最も善く代表する者にして、其主眼は大多數人の生活を容易に且つ廉價ならしむるにあり。從つて一般に減稅の方針を取り、普通の營業、運輸、郵便、日常品に對する課稅を減じ、其缺陷を補ふが爲めに、遺產相續稅を起し、酒精稅及び所得稅に適度の增加を試みたり。此豫算案は大に朝

野の賞讃を博し、グラッドストーンの名は、英邁卓絕なる財政家として亦動かすべからずなりぬ。而も最良なる財政の効果は、最惡なる外交方針に依つて殆ど奪ひ去られんとす。一八五四年三月二十七日英露の交渉破裂して、所謂罪惡戰（クライム・ワー）と稱せられたるクリミヤ戰爭は開かれたり。此戰爭はセヴァストポールの曉將トットレーベンの名をなさしめたると、カブールをして伊太利統一の機會を得せしめたるのみにて、殆ど何物をも英國に與へず、軍隊の困苦亦名狀すべからざる者ありしかば、政府は攻擊の焦點となり、下院に於ける議員ロエバックの動議が、忽ち導火線となりて內閣の一角崩れ、採決の結果は贊否の差百五十七票の大多數を反對投票に制せられて、アバーデン內閣は敗滅し終りぬ。保守黨首領ダーベー卿其後を受けんとして成らず、自由黨領袖パーマーストン即ち新に內閣の組織を試み、ロエバックの動議を採用せざる約束の下に、ピール系統の名士ゼームス・グラハム、シドニー・ハーバートを招きグラッドストーン亦入つて再び藏相の椅子に就きしが、之を純然たる自由黨首領の下に閣僚となりし彼が最初の徑路となす。而もパーマーストンは約に背いてロエバックの動議に從ひ、英軍の狀態に關する特別審査

委員を設けんとしたれば、在職僅に三週間、彼は其同志の閣僚と共に蹶然パーマーストン内閣を去りぬ。其後政界の形勢グラッドストーンに快からざる者多く、議院に暫らく彼の姿を見ざりしが、離婚法案の出づるに及び、彼は猛然として現はれ出で、政府案の支持者たる法律専門家リチャード・ベットヘルを對手に、辯難論爭を重ねたりしが、當時彼の言論を聽ける人は、結婚法の歴史的法理的研究に半生を傾けたるにあらずんば、グラッドストーンの如き精緻の議論はなし得ざるべしと感歎を禁じ得ざりしと云ふ。

一八五八年ダーベー卿の保守黨内閣はパーマーストンの後を襲ひしが、小説家にして且つ討論に名を成したる時の植民大臣リットンは、グラッドストーンを慫慂して地中海中の英國保護國たるアイオニアン七島の特派大使たらしむ。蓋し此七島は英國の保護を離れて、希臘本國に合併せんとの熱望を抱き苦情已まざりしが爲めなり。グラッドストーンが既に自由黨と提携しながら、保守黨内閣の任命を受けたるは、一見奇なるが如しと雖、事外交に關し、且つ此紛糾を處理せんには、特に寛洪の人物を要するが故に、リットン之を推奬し、グラッドストーン之を歡諾し

たるなり。伊太利語に精通せるグラッドストーンは、この使命を果すべく又多大の便宜を有し、後英國皇室と親縁ある丁抹皇子の希臘王たるに及んで、七島は其管轄下に入り、難局は平和に治りたり。グラッドストーンはこの使命の爲めに保守黨の侵略主義者より多少の攻擊を受けたるも、これ却つて弱者に對する同情に富み、正義に依つて紛糾を解くの彼が精神と手腕とを證明する一の機會となりぬ。彼がアイオニアン島より歸るや、ダーベー内閣は政論紛爭の渦中にあり、議會はやがて解散せられ、彼は再びオックスフォードより出でぬ。新議會に不信任案の現はれし時、彼は其理由を認めざりしが爲めに、之に雷同するを肯てせざりしも、政府黨は少數にて内閣は覆り、パーマーストン又再び内閣を組織せり。グラッドストーン入つて之が藏相の要位に當りしが、反對者は爲めに惡聲を放つて豹變の名を被らしめしも、以て彼の人格を傷くるに足らざりき。當年の英國は内治外交共に多難の時にあり、ナポレオン三世のロムバーデー征服は人心を痛く危惧せしめ、支那戰爭亦目前の災禍たり、同盟罷工は諸方の都市に起りぬ。グラッドストーンは之より漸く諸般の改革事業に渾身の力を發揮せんとし、先づ一八六〇年の豫算

案を以て財政整理を行ひたり。此豫算案には二つの重大なる要項を含みしが、其一つはコブデンが當時巴里に使してナポレオン三世と協定したる英佛通商條約の承認にして、之が爲めに英國民は廉價なる佛國製の葡萄酒を飲み、多量の工業品を佛國人に買はしむるに至れり。他の一つは紙稅の廢止にして、專ら敎育上の目的に出でたるものなるが、紙價を廉にするは新聞紙其他の出版物を容易にし、爲めに不健全なる思想を普及せしむるの危險あるのみならず、王室の尊嚴をすら冒瀆するの嫌ありとて、保守黨は盛に反對したるも、グラッドストーンは非常の勇氣を以て上下兩院と戰ひ、前者は此年の議會に、後者は翌年に至つて法律となすを得たり。玆に至りてマコーレー卿の所謂堅實不撓なりし保守黨議員が、一變して英國平民政治の首領たる地位に登れりと云ふ事實は益〻明瞭となりぬ。

バーマーストン內閣に於けるグラッドストーンの地位は、恰も星座の中心なるやの觀ありたり。而も宰相その人は全くグラッドストーンと趣味思想を異にし、革新的施設に對する何等の同情なく、寧ろ彼の熱心に向つて冷水を灑ぐの觀なきにしもあらざりき。閣內の彼が同情者協力者は、その先輩たるジョン・ラッセル卿なり。

バーマーストン內閣は一八六五年まで持續したりしが、此間グラッドストーンは議會に於て重要なる二大問題を論議したり。其一つは勞働階級の五十分の四十九までを除外する當時の選擧法を改革すること、他の一つは愛蘭の國敎會を廢止すること是なり。革新の希望は漸然燃え始めぬ。されど冷淡なる宰相の下にありて藏相の地位にあるグラッドストーンは、未だ戰旗を高揚するの機會に遭逢し得ざりしなり。而も此革新思想は痛くもオックスフォード選擧區の感情を害し、一八六五年の選擧に、彼はオックスフォード大學を去りて南部ランカッシャーの代議士となるの止むを得ざるに至りぬ。時運は轉回す。總選擧の結果自由黨は多數を占めて、バーマーストン內閣の再生を見たるも、此年十一月、老宰相は不歸の客となりて、ジョン・ラッセル卿その後を襲ひ、グラッドストーンは依然大藏大臣として、下院の自由黨首領たり。久しく機會を待ちし選擧權擴張案は、乃ち議會の討論に上りぬ。

グラッドストーンが提出理由の說明演說は、美妙を極めたる者の一つなりき。プライトも、デスレリーも、敵として又味方として、平生に超えたる雄辯を振ひたりき、而も俊秀なる「倫敦タイムス」の論文家にして、且つ非凡なる議場の討論家たるロ

バート・ローエの反對演說は最も深大の感動を起し、此法案は不充分にして且つ不都合なりとの攻擊の下に脆くも否決せられ、ラッセル內閣は瓦解し了りぬ。而もダーベー內閣の成るや、狡慧なる大藏大臣ヂスレリーは前年の態度を飜して、新に選擧權擴張案を提出し、自由黨の革新熱心家をして所謂鼻を明かしむるの怪手段に出でたり。人其心術を陋としたるも、兎も角グラッドストーンが希望の一つは、斯くて保守黨政府の手を通じて成就せしむるを得たり。此後一年ならずして政界は新なる局面を開き、グラッドストーンとヂスレリーとの對抗は愈〻本舞臺に演出せられんとす。

五　宰相としての國政改革時代

ジョン・ラッセル卿は一八六七年のクリスマスを機として、その公生涯より退きしかば、グラッドストーンは議院の內外に於ける自由黨の眞首領となりぬ。後數週ならずして時の保守黨內閣首相ダーベー卿も、その職をヂスレリーに讓りて退隱生活に入りしかば、之よりグラッドストーンとヂスレリーとは、各〻一黨の首領として

龍虎相見ゆるに至りたり。當時政權はヂスレリーの手に在りしと雖、議院に於ては自由黨多數を占めたれば、グラッドストーン內閣の成立は、唯時間の問題となりぬ。茲に於てかグラッドストーンは多年政界の難關たる愛蘭問題の解決に向つて決死步武を進め、先づ愛蘭敎會の爲めに租稅を徵收せざる方針の一法案を下院に提出し、爲めに議會は解散となりて、直ちに總選擧行はれ、グラッドストーンはランカシャイヤーに破れたるも、グリーンウィッチに當選し、自由黨の勢力亦頓に揚りぬ。明敏なるヂスレリーは大勢を明知するや否や、一八六八年十二月二日、議會を開くに及ばずして直ちに政府を去り、英國の政治史に一新例を開きたるが、翌三日、グラッドストーンは初めて大宰相の地位に登り、多くの明星を臺閣の上に集めたり。時に年既に六十歲。銳氣靑春を凌ぐと雖、頭髮雪の如く白からんとす。之より以後グラッドストーンと書かずして虞翁と書くも亦不當にあらざらむか。新政府の治績多きが中にも、愛蘭に於ける國敎會の廢止を以て其隨一と謂はざるべからず。愛蘭の三大禍根と呼ばるゝ其一つは、之に依つて斷滅し得たり。第二の禍根は土地問題なりしが、虞翁は試驗的の一法案を案じて、兎も角も成立せしめ、且つ

之が根本的解決の方針として、土地に施したる改良の結果は小作人の所有に歸すべしと云ふ新主義を宣揚するに努め、愛蘭人に希望の光を與へたり。其他大學の宗教試驗を廢し、無記名投票の制度を確立し、金錢を以て軍職を賣買する陋習を禁じ、改革に次ぐに改革を以てして、大に民心を新ならしめたるが、當時猶未だ渾沌たりし普通教育制度を確立せし如きも、特筆すべき事功たらずんばあらず。而も愛蘭の第三禍根たる學校問題に手を觸るゝに及んで、虞翁の計畫は愛蘭黨にも新教徒にも喜ばれず、三票の差を以て政府案は議場に破れたれば、虞翁の第一次內閣は茲に終局を告げんとせしに、反對黨の首領ヂスレリーは內閣の引受を肯んぜず、虞翁は止むなくも勇氣を鼓して潰亂せむとする味方を糾合し、暫らく內閣を支へたりしが、惡口家のヂスレリーが冷評したるが如く、殆どこれ熱火を噴き盡したる休火山たるを免れずして、虞翁は最早權力を維持するにあらず、唯地位を維持するに止まりしかば、民望漸く政府を去りて殆ど收拾すべからず。アラバマ事件起るに及び、虞翁は益〻不人望の中心となりしかば、一八七四年二月五日、斷然國會を解散して信任を天下に問ひたるに、保守黨は四十六票だけの多

數を議會に占むるに至れり。虞翁は即ちヂスレリーの先例を趁うて議院を開かざる以前に政府を去りぬ。時に虞翁は六十六歲なりしが、宰相としての六年間、勤勉の餘り疲勞を覺えしならむ、此年三月十二日、彼は公生涯より退隱すべしとの宣言を發して、痛く全國の自由黨員を驚かしめぬ。

一八七五年の春、虞翁は公式に自由黨首領の地位を退き、身を閑地に置けり。自由黨は多士濟々と雖、此大頭顱を失ひて忽ち燈火の滅盡したるが如く、バーチントン侯其後を襲ひたるも、氣勢甚だ揚らざりき。虞翁は閑地にありとは言へ、宗教界當年の大立物ニューマン及びマンニングを對手に論爭倦む所を知らざりき。而も政界に於ける虞翁の使命は此に終るべくもあらずして、天外の喇叭は忽然虞翁を起しぬ。一八七五年のブルガリア事件、之に伴ふ土耳古問題、ヂスレリーの外交政策是なり。此年の秋、ブルガリアの基督教徒は土耳古人の爲めに慘憺たる虐遇を蒙り、死屍累々として道路目を掩ふに至る。倫敦「デーリー・ニュース」の通信員之を本國に報告し、英人の憤慨甚しかりしが、宰相ヂスレリーは冷然としてこれを嘲笑し、「デーリー・ニュース」の記事は珈琲店の無駄話に過ぎず、東洋人は由來斯くの如

き行動を深く意に介するものにあらず、彼等は同族中の罪人を取扱ふにすら之よりも殘酷なる方法に出づと放言して、宰相其人亦全く意に介せざる如くなりしかば、虞翁は憤然として起ち上り、獨得の熱情を傾けて國論の喚起に奔走、努力し、幾多空前の大集會を催して、土耳古政府と保守黨内閣とに、迅雷の如き打擊を加へたり。良心の鋭き英國人は等しく起つて同感を表し、チェルシーの哲人カーライルすらもセント・ゼームス寺院の大會に出席して、土耳古人を歐洲より追ひ拂へと怒號するに至りたり。名義上土耳古王の管轄たるを脱せざりしも、ブルガリアが遂に獨立の自治州となりしは全く虞翁の運動に依る。爾來數年、虞翁は絶えずヂスレリーの外交方針を攻擊して、文書に演說に國會の議場に其聲を高めて止まざりしかば、一度退隱を宣したるも、不知不識事實上の自由黨首領は畢竟虞翁に外ならずと内外をして認識せしむるに至りぬ。一八八〇年、總選擧の當に行はれんとするや、虞翁の活動は益〻旺盛を極め、其全力を擧げてエディンバラ地方に於ける保守黨の根據を衝き、所謂ミッドロシアン・カンペンと稱する空前の選擧運動を演出したりしが、全國爲めに響應して、保守黨は未曾有の大敗北を來し、新議

會に於ては自由黨よりも少きこと百二十名の多きに及ぶに至りぬ。當時既にビーコンスフィールド卿たりしヂスレリーの内閣は素より持續すべくもあらず、即ち虞翁の第二次内閣成り、ジョン・ブライト、ジョセフ・チャムバレーン、チャールス・デルク等の名流其閣員たり。

新内閣は名士揃にして而も空前の大多數を議會に占めたれば、萬事好運なるべしと思ひきや、忽ち二大難問の爲めに政府は困惑し、國民は失望するに至りたり。難問の一つは愛蘭の土地問題にして、虞翁が兼て提唱したる小作人の勞力を賠償する法案は、幸に下院を通過したるも、立ろに上院の拒絶する所となり、愛蘭人は失望の餘り、諸處に動亂を起したれば、閣僚は終に虞翁をして强制案を立てしむるに至り、彼は宛ら上院と愛蘭人との板挾みとなりて而も他に名策の施すべき者なかりき。愛蘭人の間にては最早英國議院を頼むの何等効力なきを悟り、新に自治制運動を開始し、一代の人豪パーネル之が首領となり、「議院にして此說を聽かずんば、又何物をも聽かしめず」と揚言しつゝ議會の一角に蟠踞吼哮するの大活劇を演出したり。識見高邁なる虞翁は早くも勢の止むべからざるを察し、當

時既に自治案に就きて考慮する所ありしも、猶心中の秘奥に存し、特殊の親友の外には之を謀らざりき。而も閣僚は愛蘭の騒擾止むなきを怒り、虞翁の好まざるを強ひて、バーネル、デロン、セックストン等の首領株一人も洩らさず、牢獄の中に拘禁したり。虞翁一旦之を敢てしたるも長く此態度を續くるを欲せず、バーネル等を出獄せしめんとして爲めに愛蘭事務大臣フォスターの辭職を招き、尋いでフォエニックス公園に於ける愛蘭總督カーヴェンデッシュの横死を見るに及んで、國論益〻喧しかりしが、この暗殺に就ては愛蘭國民黨もこれを以て汚辱と感じたりしかば、騒擾は次第に一轉機を劃せんとしたり。時恰も埃及にアラビー・パシャの亂起り、遠征軍派遣の問題に就いてブライトは遂に閣外に逸し去り、バーツームに於けるゴルドン憤死の報一度倫敦に傳はるや、天下を擧げて虞翁の緩慢を責め、「ゴルドンを殺したるはグラッドストーンなり」とまで激語を發する者あるに至る、或はゴルドンの訃音傳はりし夜、虞翁は倫敦の劇場にありたりなど誣ふる者あり。素より道路の惡聲に過ぎざるも、虞翁が一生涯の中、眠らんと欲して眠ること能はざりしは、唯ゴルドン將軍の訃音に接したる後三夜の間のみなりきと云ふ。以て如何

に其心緒を勞したるかを知るべし。後南阿にボアの一揆起りし時も、虞翁は飽くまで平和の方針を取り、ウード將軍をしてトランスヴァール國大統領クルーゲルと平和條約を結ばしめしが、これ亦侵略的政治家の激怒を買ふに至れり。後一八八五年の春、豫算案の議事に破れて、虞翁内閣倒れ、一八八一年、ビーコンスフィールド卿逝いて以來、保守黨首領たりしサリスベリー侯其後を襲はんとせしが、總選擧の結果は保守黨に利あらず、虞翁は三度宰相の位に就きぬ。斯くて第二次内閣は不幸逆運の觀ありしが、内治上の功績見るなきにあらず、選擧權を更に擴張したるも其主なる一つなり。

第三次内閣の成りしは一八八六年二月一日なり、虞翁は聽て愛蘭自治案を議會に提出すべく決心したり。これ一般の人に向つては餘に突然の感を與へ、彼の閣僚にすらも新聞たるを失はざりき。虞翁の胸中にては成熟すること久しかりしも、之をジョン・モーレーに謀りしのみ。ジョセフ・チャンバレーンの如きは何等協議を受けざりしとて不平滿々なりき。守舊的思想を有するデヴォンシャイヤー公の如きは素より之を喜ぶべくもあらず、チャンバレーンと提携して自由黨の中心以外に脱

出し、新に統一黨の旗幟を揚げぬ。蓋し彼等の自治案に反對したる理由は、愛蘭人が其代議士を大英國の議院に送らざるに至らば、大英國の統一を害する危險ありと云ふなり。これ確に第一回自治案の顯著なる缺點なりき。英國在住の愛蘭人も、此理由の下に反對するに至れり。斯くして案は三十票の差を以て議會に破れたりしが、虞翁は女皇を强ひて直ちに議會を解散せしめたるも、自治案の精神は未だ國内に徹底せず、總選擧の結果は反對黨をして百票の多きを占めしむべくなりぬ。サリスベリー内閣次で立ちしが、虞翁は之より畢生の力を揮つて、愛蘭の自治を高く天下に唱へ、努力奮鬪約六年の長きに及べり。八十の老境にありて精勵斯くの如し。其熱心誰かは敬歎せざらん、至誠は終に貫徹す。一八九二年の總選擧は自治案の贊成者四十票の差を超ゆるに至りしかば、虞翁は英國政治史上空前の出來事たる四度目の大宰相となるや否や、新自治案を提出して、下院は難なく通過したり。法案は直ちに上院に移され、一八九三年九月八日の討論に於て脆くも否決し去られたり。これ實に虞翁が半生の熱血を灑ぎ盡したる最後の政治的事業なりき。健鬪多年、而して今は上院の一擊に碎かる。虞翁の遺憾想ふべきな

り。「我事畢んぬ」の感は、電光の如くに老偉人の靈魂を動し、終に翌年三月一日の下院に於ける訣別演說となりぬ。彼は一八九五年の解散まで議席を下院に有したるも、決して再び下院に現はれざりき。訣別演說の後二日、八十六歳にして漸く六十年に餘る公生涯よりハワーデン城中に退隱しぬ。

公生涯を辭して間もなく、虞翁はビアリッツに行き、リヴィラに行き、佛國の政治家と語り、西班牙の官人と語り、ハワーデンに歸つては、親友を招き、村治に與り、或は園内の樹木を伐り、或は寺院に出席して悠遊自適たりしが、その絶えざる伴侶は宗教文學の書にして、一日十時間も書齋に籠つて亦餘念なき事もありき。ホレースの詩篇を譯し、バトラーに關する論文を書き、シェリダン論を公にし、羅馬教會と英國國教の接近を論じたるも其頃の事なりき。退隱後公事に干與したるは、ウェールス大學の名譽表彰式に列したると、又ウェールス内親王の丁抹王に嫁く結婚式に列したると、アルメニア問題の集會、及びヴィクトリア女皇即位五十年の賀會のありし時リヴァプールに赴きたると、ハワーデンの花の集りに清美なる詩的演說を試みたる等なりき。一八九七年の夏以後は一種の神經痛を起して健康頓に衰へ、

リヴィラに行き、ボルマウスに遊びたるも、全治の見込なく、遂にハワーデンの愛棲に歸りぬ。虞翁が最後にリヴァプールを訪ひし時の演說の中に曰く、此處は予が誕生の地にして初めて天の光を見たりし所、而して神若し許し給はゞ、ハワーデンこそは予が最後の光を見、最後の呼吸を引かんと欲する地なれと。この愛棲に歸りて後、虞翁の健康は一進一退、痛く全國民を憂へしめしが、公衆と新聞通信員とは絶えず群をなしてハワーデン城の門前にあり。病狀の揭示に一喜一憂し、見舞の書翰電信は國の內外より蝟集したり。伊太利は爲めに國會を開いて老偉人の健康を祈り、希臘國民を代表する僧院長は爲めに慇懃の書面を寄せ、愛蘭ダブリンの大主教大監督、トランスヴァール大統領、オックスフォード大學評議員會も亦爲めに叮重なる見舞の詞を贈れり。而もこれ尋常一樣の挨拶にあらず、何れも虞翁が一生の閱歷を語り、不朽の感化を示すものとして、無限の興趣をその中に藏するなり。虞翁の病床は啻に英國民の憂愁を集めたるのみならず、又誠に全世界の注意を集めたりき。たゞ天命自から滿つる所あり。一八九八年五月十九日午前五時、わがウィリアム・エワート・グラッドストーンは、老夫人の温き手を握りつゝ多くの愛

兒愛孫に圍まれて平和の中に永遠の眠りに入りぬ。明くれば五月二十日、上下兩院は此老偉人を追悼すべく開かれ、保守自由兩黨の領袖は、何れも沈痛眞摯の雄辯を揮つて虞翁の一生を讃美し、遺骸を送るに國葬式を以てするの議は直ちに成立しぬ。二十五日、柩はハワーデンより倫敦に移され、ウェストミンスター寺院に安置せられしが、二十六、七日の兩日、公衆の來り弔ふもの約二十五萬人、蕭然列をなして連綿夜に入るも猶絶えざりきと云ふ。越えて二十八日午前十時、式は寺院內に行はれ、虞翁の遺命に依つて葬儀極めて單純なりしも、英國當代の貴顯名流悉く棺側に集まり、前半列は簡樸清楚の間に崇高莊美の感謂ふべからざる者ありしに加へて、後半列は凡ゆる平民階級の代表者を以て滿たされ、宛ら帝王の葬式の如く、又村老の葬禮の如く、自ら老偉人の德風を示して餘ありきと云ふ。

六　個人としてのグラッドストーン

吾人は既にグラッドストーンが生涯の閱歷、事蹟を語り終へたり。而して其間自から彼が才能、氣質、品性、感化に就ても、讀者の胸中に印象の明かなる者あらんと信

ず。されど今茲に綜合してグラッドストーンの人物如何を見るも、多少の趣味なきにあらざらん。本來グラッドストーンの性格たる、清純潔白、決して道義上の汚點を染むる者にはあらざりしも、亦決して簡單なるものにはあらず。觀察の仕方に依つて、人をして誤解曲解せしむる多くの動機を有したりき。而も棺を蓋ふに及ばずして彼は既に定評を得、彼の酷烈なる反對者と雖、その道義的品性を拒む者は、殆ど一人もなしと斷じて誣言にあらずなりぬ。性格の人としてのグラッドストーンは最早研究の題目にはあらずして、歎美と敬愛の標的なり。請ふ今少しく分析的に彼が性格の特徴を此處に指摘せんか。

グラッドストーンのオックスフォード大學を出づるや、初め國教會の聖職に就かんと欲したりしことは、既に之を陳べ置きたり。彼は一轉して政界の人となりしも、性格の根本は飽くまで宗教的なり。これ單に彼が好んで神學を研究し、之が爲めに論爭し著述したりしの故を以てのみ謂ふにあらず、又彼が其私生涯に於て敬虔なる篤信の人たりしが爲めのみにもあらずして、グラッドストーンは實に元來權謀術策の異名とせらるゝ政治の社會に、高貴なる宗教的生命を與へたる人なれ

ばなり。即ち政治は彼に依つて全く宗教と結び付けられ、清淨にして崇美なる道德的事業となりたればなり。彼は純然たる政治的社會的問題に關しても、多くの新方針新光明を英國民に與へたりしかど、宗教的精神に觸るゝ問題に關しては、特に熱誠を傾くるが如く、その雄辯も一段の光彩を加へたり。離婚法案、愛蘭國教會廢止案、東方問題、愛蘭自治案の如き、皆此精神の煥發なり。彼は日常の生活を以て上帝に對する職分を盡すべく定められたる者と信じぬ。此故に政治的經綸は彼に於て宗教的事業なりき。晩年に於ける彼が政敵たりし保守黨首領サリスベリー侯が、上院の追悼演說に曰く、グラッドストーンは後人に貽すに偉大なる基督教的政治家の記憶を以てしたり。彼の性格と心術と志望は全世界を啓導するに足るものなりと。これグラッドストーンに對する最も高明なる認識なり。獨り英國人のみならず、全世界の人皆等しく之を首肯せざる能はざるならん。一言にして言へば、彼は基督の愛を政治に現はさんとしたる人なり。權力を愛すと言へば、人は直ちに名譽心强く、利慾の念深き野望的政治家を聯想するならんも、グラッドストーンが權力を求むるの熱情は、斯くの如く卑陋なる者にはあらず、全く其宗教

的精神の源泉より湧き出でたりと謂ふを適當とすべし。彼は青年時代よりして、高貴の目的と偉大なる才能を自覺し、世と國の爲めに盡さんと欲するの向上心に滿ちたりき。此志望を成就せんと欲せば、進んで權勢の地位に上り嚮導者の任務を帶びざるべからず。玆に於てか我グラッドストーンに於ては權力に對する大望心（ビジョン）即ちこれ宗教（レリジョン）の一部なりき。彼は決して單なる地位や俸給に愛着する者にあらず、唯天の命吾にあるを信ずるが故に、其なさんと欲する所をなさむとして飽くまで權力の地を求めたるなり。彼の政府にあるや其志望を實現するに餘力を貽さざりき。而して其野に下るや、同志を鼓舞し輿論を作興して、其地歩を造るに餘力を遺さざりき。斯くの如き權力の愛、これグラッドストーンが品性の一大特徴にして且つ確に成功の鍵鑰なりき。

グラッドストーンは其政敵ビーコンスフィールド卿の長逝を悼み、議會に演說を試むるや、特に其政治的勇氣を推賞して措かざりしが、彼自身も亦此氣魄に於て寸毫もビ侯に劣らざりき。彼が一旦斯くと決意して、政爭場裡に現はるゝや、如何なる危險も障礙も亦彼を阻むに足らざりき。彼は未だ曾つて恐怖なる者を知らず、

恐怖なる者ありとせば、そは唯上帝に對してのみなりき。これ彼の閲歷に徵して明白なる所なり。從つて彼は往々にして剛膽に過ぐるかの如く、傍人をして吃驚せしむる事あり。此性質は彼が平常の態度や言論に於ては殆ど見ることなかりしも、大問題に對する判斷の時として迅雷の落つるが如く急激なる、又自說を維持するに頑强熱烈にして成敗を度外に置くの概ある如き、グラッドストーン傳中屢見る所の特質なり。此氣魄に伴つて、彼は自己の志す所必ず成るの確信を有し、傍觀者には必敗と思はるゝ際にも、彼は自若として樂天家たるを得たりき。

グラッドストーンが最も世人の誤解を受けたるは、其一見變り易き性質を示したるに依る。彼の政治意見の如きは、絶えざる變化なりきと謂ふも、强ち誣言にあらざるなり。唯其變化は或る種の政治家に見るが如き卑陋の動機に出でし者にはあらで、全く見識の進歩と時勢の要求とに依れり。彼は六十年の公生涯に於て未だ一度も、俗論、情實、若くは野心の爲めに、其政見を動かしたる事なし。その之を動かすに至りしは全く良心の命令に從へるのみ。見識の開け時勢の促すがまゝに彼の政見は絶えず進化し、最早前日の主張を維持し難きに及んで、始めて彼は俗

論も情實も將た自己の利害をも顧みず、斷乎として新政見の鼓吹者たりしなり。此故に彼の政見は全く不斷の進化なりき。而も反對者の多數、及び同志者たりし人々の或る者すら、此事實を正解し得ざりしは、全くグラッドストーンの罪にあらざりき。本來を言へば、彼は變化し易き性質の人と謂ふよりも、寧ろ保守趣味の人にして、スコットを追慕し、トーマス・アックェナスを崇拜し、エドモンド・バークに感歎し、國教會と王室に對しては飽くまで敬虔誠忠なりし如き、又幾度か熱血を傾倒したりし諸種の法案を絶えず拒みたる上院に對してすら、敬重の念を減ぜざりし如き、又或は一般人より見れば殆ど革命的とまで思惟せらるゝ改革案すら、彼自身は前代の精神を復興するものと確信したる如き、何れも之を證明して餘あり。愛蘭國教の廢止、及び二百萬人に及ぶ選擧權擴張の如きも、當初彼は心中甚だ快しとせざりしなり。而も一旦その止むなきを見定むるや、猛然確信を以て之に當り、又逡巡する所なかりき。彼の頭腦は本來受動的にして、且つ保守的なりしと言ふを適當とす。故に其一度進歩の光明に向つて心靈の活動を始むるや、其歩調は甚だ遲緩なりしも、而も確實にして堅固なりき。一言にして之を掩はゞ、グラッドス

トーンは保守趣味の進歩主義者たりしなり。

グラッドストーンが成功の一大秘訣は、確に精力を一事に集中する獨得の能力に歸せざるを得ず。彼自身も亦明かに之を認め、予にして當代の人々に多少優れる所ありとせば、そは唯精力を集中し得るの一點にあらんと謂へり。後の自由黨領袖ローズヴェリー卿も亦この一特性を擧げて及ぶべからざる老偉人の天才なりと歎じぬ。蓋しグラッドストーンは心中に期望し感激する所ありて、何事かを成さんと欲するや、忽ち全力を之に集中し、初一念を貫通せずんば止まず。離婚法案に反對せる時の如き、ブルガリア事件の時の如き、其他總ての大問題起る毎に、此能力は立ろに發揮せられ、宛ら旋風の林を捲くが如く、觸るゝ所の一切を摧き去らずんば到底滿足せざるに似たり。而も多方面なる彼は、一事の既に治まるや、又忽ち之を忘却したるかの如く、平然としてホーマーを讀み、ダンテを讀み、書齋の中に埋れて、世と又相關せざる人の如くなりき。

政治以外に何等の趣味を解せざる政治家の多きが中に、グラッドストーンの多趣味なるは亦珍とすべし。彼は天然、美術、文學、音樂の總てに興味を有したる人にし

て、其美を味ふの能力を有したりき。彼は明かに教養の人なり。形式の美と實質の美と、兩つながら之を喜ばしめ、精神的の美と、物質的の美と、亦兩つながら充分に理解するを得たり。彼のホーマー、ダンテ、テニソンを愛讀したるは讀者の既に知る所なるが、全體の美を味識して、獨得の見解を下せる其諸論文に至つては、專門の士も容易に企て及ばずとする所なり。美を慕ふの心は、無上の慰安を彼に與へたりしが、同時に彼の氣品を高め、其生活を現實以上の世界に導きぬ。

グラッドストーンは二つの矛盾せる氣質を有して、而も能く之を調和し得たる人なり。彼は一方面より見れば、極めて情緒の濃かなる、感覺の鋭き、且つ至つて空想的詩的の氣質を有すると共に、他の一面に於ては、精緻なる事務的才能を有し、何事にも秩序を重んずる風あり。生活の狀態頗る整頓せり。彼は又一面極めて强烈なる性情の人にして其怒るや當るべからざるも、自ら能く之を制する意力を具し、平常は全く親切柔和なる善人として愛敬せられ、其崇美なる性格は國會の演壇に於けるよりも、寧ろ家庭の生活に於て認めらるると稱せらる。以て老偉人の私生涯の如何に清福なりしかを想望するに足らん。序に老偉人の體格に就て一語

を添へ置かんか、一度寫眞を見たる人は、又グラッドストーンの風貌を忘るゝの日なかるべし。彼の體性容貌は軈てこれ人格美の好箇代表なりき。彼の身長は六フィートに及びしことあるも、晩年は少しく低くなり、特に巨大なる頭顱と廣濶なる兩肩とは、全身の格好をして稍〻頭部の重味過ぐるやを感せしめたりと。彼の容貌は造物者の一大傑作なりき。その應の如く高くして尖れる鼻と云ひ、深く大なる其口と云ひ、瑪瑙の珠の如く、輝く其兩眼と云ひ、全體の輪廓と云ひ、威嚴と智慧と柔和との不思議なる調和と見られたり。初めて議會に入りし頃は顏色青白にして宛ら病める人の如かりしが、年を經るに從ひ强味を增して又昔日の觀なかりき。肉聲の朗かにして透き通るが如く美なりしは曩にも之を說きぬ。エディンバラ大集會の時の如きは二萬人の聽衆を街頭に集めしが、遠く離れたる人々も何の苦もなく其演說を聽き取れりと云ふ。彼自身も人に語つて、四百人に語ると、四千人に語ると、予に取つては何の異る所なしと言ひぬ。彼が雄辯の力は、半ば體格の賜とも謂ふべし。玆に小故ながら一事の注意すべきは、彼の寫眞を見るに必ず左は手袋を箝め居ることなり。議院の內にある時も亦然り。演壇に於ても亦然り。初

めてグラッドストーンを國會に見し人は、皆この手袋を疑問としたり。其理由は別儀にあらず、中年の頃小銃を取扱ひ、過つて一指を失ひし爲めなりと云ふ。若し不幸にして當時右手を傷けたりせば、グラッドストーンの雄辯の力を大に殺ぎたるやも知れず、手袋の神秘は即ち是なり。彼は又極めて健脚家にして、徒歩の快捷常人に超えたり。彼は斯くの如き體格及び健康を以て、ヴィクトリア女皇時代に於ける政治家中最も長壽の人なりき。コブデンは彼よりも一年遲れて公生涯に入り、三十年も早く長逝したり。ブライトの議院に入りたるは、彼が討論家として既に盛名を博し得たる後なりしが、彼に先だつ十年にして既に他界の人となりぬ。彼が半生の政敵たりしディスレリーも十八年前に易簀し、彼が先輩にして信友なりしジョン・ラッセルも二十年前永眠したり。斯くて彼は十九世紀の英國政界に於ける最後の一大名星として、功勳素より赫灼たりしも、固く女皇の恩命を辭して終に一生爵位を帶ばず、ハワーデン城の一平民グランド・オールド・マン（Grand Old Man）として、永遠の光を青史に遺しぬ。

因に記す。グラッドストーンの生涯及び事蹟を記述したる書籍甚だ多く、生前既

に數種の傳記現はれたり。稿者の眼に觸れたる所にては、就中ジョージ・バーネット・スミスの著、及びジョージ・ラッセルが女皇時代の宰相傳叢書の一部として書きし著を最も面白く感じたり。殊にラッセルは虞翁が最後に至るまでの親友にして、其記述は優にオーソリチーを有す。虞翁沒後の書中ジャスチン・マッカシーの評傳、及びジェームス・ブライスの評傳、共に老偉人に親炙したる人々の著述なれば、特に個人的色彩の妙趣に富む。フランク・ゴンソーラス、及びウィリアム・ステットの評傳亦讀者多しと云ふ。但し虞翁傳の最美最大の著述はと謂はゞ、無論ジョン・モーレーが多年の苦心に成れる一九〇三年公刊の名著に若く者あるべからず。而も其後に於て猶虞翁傳の新著絶えざるを見れば、以て如何に老偉人の生涯が感化の源泉たるかを知るに足るべし。

第二章　アスクィス

一　赫々たる閲歴

英國は世界に於ける立憲政治の母國なり。政黨の訓練に於て、將た政府の經綸に於て、其秩序の整然たる他國の之に比肩すべきものあらず。されば何れの時代に於ても、政界は常に濟々たる多士を有し、ヂスレリー死すとも幾多の小ヂスレリーあり、グラッドストーン逝くとも、第二第三のグラッドストーンなきを憂へざるなり。現に今日の政界には、統一黨の領袖にランスダウン卿、チャンバレーン、バルフォーア等あり。自由黨の領袖にはクローマー卿、ジョン・モーレー卿、アスクィス、ロイド・ジョージ、ウィンストン・チャーチル、エドワード・グレー等の諸名士あり。中にも自由黨は年壯氣鋭の花役者として、現首相アスクィスを初めとし、大藏大臣ロイド・ジョージ、內務大臣ウィンストン・チャーチルの如きは、英國憲法史上の一大難問たる上院改革を斷行せんとし、統一黨の强硬なる反抗に對して、飽くまで苦戰健鬪しつゝあり。嘗つて內閣成立の當時、或る者は「アスクィスは未だ第二流の政治家に過ぎず、況やロイド・ジョージ、ウインストン・チャーチルの如き若輩をや」と評し、アスクィス內閣は一般に冷眼を以て見られたりき。されどアスクィス內閣成りてより既に五春秋、彼等は最早第二流の政治家にあらず、獨り英國に於ける第一流の人物なるのみならず、世界に於ても亦蓋世の政治家として推贊するに恥ぢざるなり。

アスクィスはピュリタンの系統にして、自由を愛し、殊に國教廢止及び愛蘭自治問題の如きは其青年時代よりの二大信條たり。彼は英國人としては矮軀の方にして、顏に鬚なく色青白く、見るからに風采揚らざる紳士なり。されど事を處斷するに當りては、慧敏にして些の躊躇なく、又大敵を前に受くるも落付きて、徐に大計を立つるの沈勇あり。彼は天性事務を取ること早く、學校時代に於ても書を讀み文章を作るに多くの時間を要せざるを以て、普通の勉强學生の如く、朝は未明より床を出でゝ机に向ふが如きこと稀なりしと云ふ。アスクィスは又容易に他人の摸倣し得べからざる非凡の辯才を有す。夙に倫敦市立學校及びオックスフォードにありしの日より得意の辯舌を弄し、後に辯護士となり又議員となるに及んで愈卓越したる演說家の能力を發揮せり。されば、グラッドストーンは、早くも此逸材を議會

より、拔擢し之に內務大臣の顯職を授けて世人を駭かしぬ。初め世人は餘りに彼の榮進の早きに驚き、其政治的手腕に疑を挿みたりと雖、尋で議會に愛蘭自治法案の現るゝや、八十餘日に亙る朝野兩黨の論戰に於て、彼は常に政府軍の雄將として演壇に上り、忽ちにして其實力を示したりき。

一八九五年グラッドストーンの冠を挂けて政界を退くや、其後を受けて自由黨內閣の首相となりしは上院議員ローズベリー伯なり。伯は名門の出にして、才識俱に秀で、頗る社交に長ずるを以て、上下の囑望する所なりしと雖、惜しい哉其經歷に於て下院に席を有したる事なきが故に、首相として內閣を組織するは重荷に過ぎたるの觀あり。又サー・ウィリアム・ハーコートは、自由黨に於ける經歷赫々見るべきものあり、首相の印綬を帶びて大政を料理するの技能は十分に備はりたるを以て、或は彼を以てグラッドストーンの後繼者に擬する者ありしと雖、其敏腕家たるだけに政敵も亦多かりしに依り、自由黨は之を推して下院總理となすに決したり。爾來自由黨は姑らくローズベリー伯及びハーコートの兩黨首を頂きたりしが、この兩者は多くの點に於て意見の合致を缺きしを以て、かの愛蘭自治法

案に多數の名士を失ひし自由黨は、之が爲めに益、其結合を薄弱ならしめ、殆ど衰運の絕頂に達したりき。既にしてローズベリー伯は內閣の仆るゝと共に首領を辭し、ハーコートも亦一八九八年を以て院內總理を辭したりしかば、其後任として自由黨は大會を開きてキャメル・バンナーマンを推擧せり。院內總理はこれ軈て未來の自由黨內閣首相の豫選なり。蓋し此時、首領としての手腕より云へば、アスクィスは最も適材なりしと雖、バンナーマンはアスクィスに比して年長者なりしと、又資質、溫厚にして人と調和するの性に富みしを以て、分裂以後人心緩和に努めたる自由黨は才氣煥發のアスクィスよりも、寧ろ溫厚にして圭角なきバンナーマンを以て適當となしたればなり。

其後バンナーマンが、バルフォーアの內閣を敗りて、自ら內閣を組織したるは一九〇六年なり。グラッドストーン逝き、ハーコート去り、ローズベリー退きたる後の自由黨は、殆ど四分五裂の狀勢はりしが、バンナーマンは靜穩にして周密なる用意を以て之を維持し、自由黨を中堅として愛蘭黨及び勞働黨の人材を集めたる內閣を組織せしかば、下院に於ては前例なきほどの絕對多數を占むる事とはなれ

り。アスクィスは此内閣の下に大藏大臣として首相を補佐したりしが、一九〇八年バンナーマンの病歿するに及び、彼は其後を受けて内閣統御の印綬を帶びたり。思ふにアスクィスの首相となりしは、少くとも自由黨に於ては何人も豫想せる所たりしなり。

アスクィスはバンナーマンに比して、其性情に於て好個の對照なり。バンナーマンは温厚にして思慮深きも、而も如才なくして諧謔的趣味あり、之に反してアスクィスは敏捷にして拔目なく、動もすれば精悍倨傲の氣風の表るゝ事あり。前者の温柔、篤實、多感等の性情は、後者に於て見るべくもあらず、アスクィスは飽くまで冷靜、峻嚴、深刻の人にして、温乎たる情味と包容的襟度とに乏しきは、彼の最大缺點と云はざるべからず。嘗て英國の或る批評家は、アスクィスを以て冷酷鐵の如く、酷薄にして陰忍無慈悲なる野心家となせり。こは餘りに酷評に似たりと雖、一面に於て彼は斯くの如き性格を有せるが如し。彼の辯護士たりし時、バーネル疑獄事件に於て法廷にタイムスの支配人を尋問し、遂に其眞相を自白せしめたるの手腕は、大に世人の注目する所となりしと雖、同時に彼の辛辣なる性格の一端を示せ

り。又其内務大臣たりし時、監禁中の暴徒に對して無情なる取扱をなさしめ、或は同盟罷工の使嗾者を極刑に處して顧みざりしが如き事あり。又一九一〇年十一月、アスクィスは婦人參政權運動者の爲めに途上に要擊せられ、その乘れる自動車の窓を破壞せられたる珍事ありしが、婦人參政權に關する彼とバンナーマンとの意見は、能く兩人の性格を赤裸々にしたるかの感あり。即ちバンナーマンは曰く「婦人も亦國家の公事をなすの能力あり、故に余は婦人選擧權問題に對して同情を表するも、今は尙その時機にあらざるを以て、世人の之に耳を傾くるまで待たざるべからず」と、然るにアスクィスは婦人參政權を否認して曰く「婦人が參政權を有すとの事は、歷史上に於ても亦現在の事實に於ても何等の根據を有するものにあらず、但し彼等は市民として租稅を納め法律に服從するの義務あるは言を俟たず」と。以て此二人者の性格の異れるを知るべし。

要するにアスクィスは理性の人、冷靜の人なり。グラッドストーン若くはバンナーマンの如き温情なきを以て、衆人をして悅服せしめ親昵せしむるの磁石力を有せず。されば個人としてのアスクィスは英國の各階級の間に聲望を得ること難し。又

彼は學校時代にても議員時代にても、常に同輩及び友人を拔きて功名を收めんとせしが故に、時に其嫉視を受けて思はざる非難を被むりしことも尠からざりき。然れども其明晰なる頭腦と峻敏なる決斷力とは稀に見るの天才にして、今や彼は英國に於ける敏腕なる議會操縱家として、將た精勵なる爲政者として認められ、何事か後世に名を殘すの回天的事業をなさずんば止まざらんとす。彼も亦二十世紀初頭に於ける世界的偉人たるを失はざるなり。

二　織物商の次男

ハーバート・ヘンリー・アスクィス(Hebert Henry Asquith)は一八五二年九日十日を以つて、英國ヨークシア州モーレーの織物商の家に生る。當時英國に於ける政治界の狀勢を見るに、一八四一年以後、萎微振はざりし自由黨は、一八四七年議會の解散によりて初めて勢力を恢復し、一八七四年の選擧に至るまで、政府黨の地位に立ちて民主々義を實行し、政治上無事平穩の時代なりき。寧馨兒アスクィスは實に斯くの如き時代に於て邊陬の都會モーレーに呱々の聲を擧ぐ。モーレーは十五

六世紀の頃までは、僅に六十內外の人口を有する小寒村に過ぎざりしが、その後此地にて織物商業に從事する者多く、次第に繁榮して戶口の數を增加するに至れり。

アスクィスの父はディクソン・アスクィス(Dixon Asquith)といひ、モーレー、リーヅ、及びバッタースフィールドの間に往復して織物商を營めり。ディクソンは世才に長けたる端麗の好男子にて、社會の氣受もよく、時には地方の政治運動にも加はりし程の人物なり。元來アスクィス家は永くヨークシア州に住み、その祖先の一人は一六六四年チャールス二世の時、反亂を企てし徒黨の頭目なりしと云ふ。ディクソンの父、即ちアスクィスの祖父たるジョセフ・アスクィス(Joseph Asquith)も地方にては重きをなしたる知名の士にて、モーレーの爲めに盡したる所多し。ディクソンは一八四五年バッタースフィールドの名家たるウィリアム・ウィランスの女、エミリー嬢と婚す。これ即ちアスクィスの慈母なり。ウィリアム・ウィランスはヨークシア州西區長官の職にありし人にして、其令嬢エミリーは、容姿こそ左まで美麗ならざりしかど、心だて優しき賢婦人なりき。新郎新婦は樂しき家庭を經營し、その間に五人の子女を設けたり。長

男は外祖父の名に因みてウィリアム・ウィランスと曰ひ、長じて後クリフトン大學の教授となりし人、次男は即ち未來の宰相たるべきハーバート・ヘンリー、次は女子にてエヴァと曰ひ、長兄の教鞭を執れるクリフトン大學の一教授に嫁す。この外に尙二人ありしも、一人は五歳の時に夭折し、一人は生後數ヶ月にて死亡せり。ディクソン夫妻は、共に淸き基督教信者なりしかば、子女等は疾くより教會に送られ居たりき。かのクリミヤ戰爭は、アスクィスが四歳の時終局を告げ、英國各地に戰爭終結の祝賀會ありしが、モーレーにては日曜學校生徒總出にて旗行列を行ひ、アスクィス兄弟も之に加はりて、意氣揚々と街路を練り歩きたる事あり。

ディクソンは特に子女の養育に注意を拂ひ、之が爲めにエリスといへる保姆を雇入れたり。然るに彼はアスクィスの八歳となりし時重病に罹り、尙壯齡の働盛りなりしに拘らず、遂に若き妻と三人の愛兒とを殘して不歸の客とはなれり。新しき未亡人は嫁して未だ十餘年に過ぎざるに早くも良人に死別れ、孤兒を擁して只管紅涙に袖を濕しぬ。されど彼女は世にも珍しき女丈夫なれば、これより子女の敎育に潛心し、その成長を待つを以て唯一の希望となせり。是に於て彼女は二人

の男兒をリーヅ附近の寄宿舍附小學校に入學せしめしが、此學校の校長は極めて嚴酷なる規則を以て生徒を遇し、殆ど小兒の健康をも顧慮せざる程なりしかば、母は彼等の體質を損はれん事を恐れ、二年の後遂に退學せしめたり。尤もアスクィス兄弟は、嚴格なる規則に對しても左まで不平の色なく、切々として眞面目に勉强し居たりき。それより未亡人は子女を伴ひてバッタースフィールドの實家にありしが、當時倫敦にありしジョン・ウィランス(未亡人の實兄)は、その妻との間に子女を有せざりしを以て、甥なるアスクィス兄弟を引取りて倫敦に歸りたり。ジョン・ウィランス夫人も亦喜んで之を迎へ、實子の如く之を愛撫し居りしに、偶ウィランスは夫人の父がリーヅにて「リーヅ新聞」を經營し居るを補助することとなり、幾許もなくして倫敦の地を去れり。されば アスクィス兄弟はそれより博士ホイッチンガム(Dr. Whittingham)なる人の許に托せられ、此處にて暫らく博士の薫陶を受けたり。其後又轉じてピムリコーのバーレット夫人の家に預けられ、最後にハイブリーのマンディー夫人の家に移りしが、アスクィスが將來大人物たるべき資質は、早くも此ハイブリーにありし頃より顯はれ居たりき。

三　全校のキャプテン

アスクィス兄弟の倫敦に來るや、直ちに倫敦市立學校の生徒となる。これ一八六四年の事にして、學校の課程は中學校程度のものなりき。兄弟とも孜々として勉强し、共に成績優秀なりしが、別して弟アスクィスは拔群の成績を示せり。此學校の校長はモルティマー博士(Dr. Mortimer)にして老成の敎育家として好評ありしも、アスクィスの入學後二年にして更迭し、次で品性高き青年敎育家アボット博士(Dr. Abbot)其後を襲へり。アスクィスがこの校にありて能く天禀の才能を琢磨するに遺憾なからしめしものは、又實にアボット博士に負ふ所多し。アスクィスは入學の際、嘗つて素養ありし故を以て第二年生に編入せられたり。彼は極めて運動嫌ひにして唯學課の豫習と復習にのみ專心し、運動としては僅に市街の散步に出づる位に過ぎざりき。彼は此頃より辯舌の才に富み、其巧妙なる修辭と大人びたる結論は、常に聽者をして舌を卷かしめたり。又彼は政治に關する時事を研究するを好みて、日課として倫敦タイムスを讀み、歷史にては殊に英國憲法史を耽讀し、又傍ら文

學の嗜好もありて、常にヂッケンスの小說を手にしたり。彼が倫敦タイムスを日課とし、又英國憲法史を好んで讀みしは、當時の朋友間に最も有名なるものなりき。アスクィスはこの前後に於てアロン牧師の管理したるユニオン會堂に出席せり。アロン師は信仰學識に於て、將た又人格に於て、英國の敎會に尊崇されし人にして、此會堂に集まる青年に多大の感化を與へたり。アスクィスの居住したるハイブリーにはハイブリー青年會なるものありしが、彼は常に此會に出席して、己れよりも年長なる人々と交友し、重要なる人物として目せられき。倫敦市立學校に於ける彼の成績は、二年生の時には神學と羅甸語とにて賞を得、其翌年には各課目推しなべて優等の廉にて、又四年生にては最優等の廉にて受賞し、その翌年には年額二十磅の奬學金(卒業の時まで繼續せらるべき)と第一席の優等證とを得たるが、更に一八六九年に於ける六年生の際には、數種の賞品を授與さるゝと共に、全校のキャプテンに任命され、紀念祝賀會の式場にて同校創立者サー・ジョン・カーペンターの祝辭を希臘語に譯して朗讀したり。尙最後の一八七〇年に於ては、コンクェスト博士の金賞牌、その他數種の賞品を得、又再び全校のキャプテンを命ぜられ、同

年の紀念式には英語を以て設立者の祝辭を朗讀し、斯くて彼は學生としての無上の榮譽を博したり。されどアスクィスは尙この榮譽を以て甘んずる能はず、市立學校卒業後は進んで大學に入學せんとするの希望は、寤寐の間も忘るべからざる所なりき。依つて彼はオックスフォード大學の奬學金を得んとし、その願書を校長アボット博士の許に提出せしが、果然願書を提出すると同時に、奬學金給與の通知は校長より來れり。彼は斯くして無上の幸福を一身に集め、剩へ卒業後の大學奬學金を得んことを望んで亦直ちに之を得たり。アスクィスの此校にあるや、一年は一年より成績を良くし、遂に全校のキャプテンに任命さるゝに至りし徑路は、宛ら彼が世に出でゝ、辯護士より身を起して遂に宰相となるまでの閲歷に彷彿たり。抑、アスクィスの今日ある、決して偶然にあらずと云ふべし。

四　オックスフォードの登龍門

アスクィスがオックスフォードの奬勵金を得たるは、彼の名譽たりしよりも寧ろ大學に入るに於て、此上なき有力なる後援となりぬ奬學金とはオックスフォード大學バ

リオル學院の學費として年額七十五磅づゝを給與さるべきものなり。アスクィスがオックスフォード大學に入學せんとの希望も初めよりしてバリオル學院を志したるものなれば、彼に取りては最も好都合なりき。然れども七十五磅の學費にては大學生活を支ふるに十分ならざりしが、別にグローサー會社よりの奬學金年額五十磅づゝを受けしかば、之を以て彼は不自由なく修學する事を得たり。是より三十八年の後、彼が英國首相の印綬を帶ぶるに至りし時、グローサー會社に向つて厚く感謝の意を表したるは固より其所なりと云ふべし。

當時バリオル學院の院長は有名なるベンジャミン・ジョーウェット博士(Benjumin Jowett)なり。博士のバリオル學院の爲めに貢獻し、一代の崇仰を集めたる所以のものは、その敎授としてにあらずして、人材の訓育者としてなりき。バリオル學院は、博士ジョーウェットありしによりて、現時英國の社會に名をなせる幾多の名士群がり出でたりと云ふも過言にあらず、ジョーウェットが常に口にし、且つ努力したる所は、如何にして英國の社會に有用なる人材を多く給供すべきかにありしなり。英國の或る批評家は云へり、ジョーウェットの養成せる幾多の人材中、ヘンリー・アスクィスは

最もその精製品たるものなりと。アスクィスが倫敦市立學校を卒ふるまで、感化を受けたるの人、啻に二三にして止まらず。彼の人格は既に養成せられ、器局は今や形造られたり。然れども彼の人格をして一層鞏固たらしめ、器局をして一層偉大ならしめし者は、實に博士ベンジャミン・ジョーウェットその人なりとす。ジョーウェットは自由主義なれども、而も篤實にして嚴格なる人なり。彼は常にグラッドストーンを賞揚したりしが、なほも十分信任すべき人物とはなさゞりき。彼はアスクィスの初めてバリオルに來りて面接するや、直ちに其凡庸の徒にあらざるを知り、其後に至りて彼の性行を見るにつけ、將來必らず爲すあるの青年となし、アスクィスの爲めには特別の注意を拂ひたり。

アスクィスが初めてオックスフォードの大學生活に入りしは一八七〇年の秋なり。此處にも亦兄ウィリアム・ウィランスと同時に來りたるが、當時オックスフォードにては此兄弟を指してアスクィス及び小アスクィスと綽名せり。蓋しウィリアム・ウィランスは、實際は兄なれども體格の小さきが爲めに小アスクィスと呼ばれしなり。ウィリアムは少しく内氣なる方にて、多く交友を求めずして只管勉强せしかば、其成績は常に

中位以上に居り、優等の賞を受けたる事も一再ならざりき。

ヘンリー・アスクィスは、オックスフォードに入りて後も、相變らず運動を嫌ひ、只管學課の勉强に熱中し、雄辯會には殆ど毎會缺かさずに出席し居たり。彼の顏色は稍〻青味を帶びたれど、美しくして活氣あり、殆ど病氣に罹りしことなく、彼が酒の代りに好んで炭酸水を飲み、又入浴の度數多かりしことは、學友間の談柄として尙今日に傳へらる。その頃アスクィスと同窓なりし學友は、彼が在學時代の事を記して曰く、「アスクィスは自由思想を有したる青年にて、彼の兄と共に獨立敎會員として能くジョージ街會堂に通ひたり。彼は非凡の天才を有する者にはあらざりしも、一定の時間を定めて孜々として勉强し、常に優等の成績を占めたり。運動には頗る冷淡にて唯市中を散步するかボートを漕ぐ位にて、嘗つてフートボールやクリッケットなどの競技に加はりし事なし。又形而上の學問は頗る不得意なりしも、世俗的の常識に富みしかば、學問の狹くして深きより寧ろ廣からんことを奬勵せる院長ジョーウェット博士は、大にアスクィスを愛し居たり」と。彼は倫敦市立學校に於ける時と同じく、オックスフォードにても亦數回の試驗にて賞與を受けしが、中にも一

八七四年のクレーヴン奬學金(一ヶ年につき八十磅づゝ三年間)は最も顯著なるものとす。殊に彼がオックスフォード在學中の特筆大書すべきことは一八七四年フェロー(Fellow)に選ばれたる事なり。この時は選拔の試驗ありて、フェローの後補者となりし數人の優秀なる學生ありしが、院長は夙にアスクィスの人となりを喜びしを以て、その榮譽をば彼に與へたるなり。

オックスフォードに於けるアスクィスの同窓にして、後に知名の士となれる者甚だ多し。例へばミルナー卿、エルジン卿、大學植民の始唱者たるアーノルド・トインビー、有名なる下院議員ハーバート・パウル、僧正ゴール、その他、サー・トーマス・ラレー、サー・アレキサンダー・アクランド等あり。又バリオル學院の教授には、聲名嘖々たりし學者多く、且つローバート・ブラウニングの如きも名譽教授の一人たりき。

尙彼が在學中、最も異彩を放ちたるは、討論會の雄としてなり。アスクィスは大學に入りて間もなく、聯合討論會に於て先づ貴族院に於ける僧侶の議席を奪却すべしとの意見を吐露し、其後屢、國教廢止、愛蘭問題等に就て懸河の辯を弄したり。聽て彼は聯合討論の會長に推されしが、後に會長の椅子をトーマス・ラレーに讓り、

己れは事實上の主幹として卒業の際まで會の爲めに斡旋せり。卒業に先ち一八七五年五月三十一日、聯合討論會に於てなせる國教廢止に關する演說は、その悠揚迫らざる態度、論理の明晰、修辭の巧妙、實に堂々たる老政治家の如くにして、滿堂の聽衆を醉はしめたりと云ふ。これアスクィスがオックスフォードに於ける掉尾の飛躍たりしなり。

五　辯護士界の花役者

成績優等を以てオックスフォードの登龍門を出でたるアスクィスは、是より多年修養し來れる所を實社會に試みんとす。抑、幼少の頃よりして、彼が只管熱望し夢想しつゝありしは、政治家となりて國政を料理せんとするにありしが、多くの先輩の實例に鑑みて、先づ政治家たるの階段として辯護士となるの得策なるを思ひ、一八七六年六月より、リンコルンス・イン(Lincoln's Inn)所屬の辯護士となる。蓋し彼の如く鋭敏なる決斷力と爽快なる辯舌を有する者の辯護士となるは、最も其處を得たるものなりと云ふべし。

この年アスクィスは、マンチェスターの素封家メルランド博士(Dr. F. Melland)の令嬢と結婚す。メルランド博士は建築學及び植物學に精通せる人なるが、主としてマンチェスターに住みしも、當時は學用を以て屢〻倫敦に出でたり。その令嬢メルランドは性質至つて淵達にて、愛嬌溢るゝが如く、若き夫を助けて忠實に家事に執掌したりき。アスクィスは妻を迎へて後、ハムプスチェードに居を定め、此處より日々法廷に通ひたりしが、初めの間は知己も少なく又經驗もなき事とて、殆ど世人の顧みる所とならざりしが如し。斯かる間に於て、獨り彼の人となりを觀破し、辯護士として彼の前途の有望なる事を豫言したる者は法律家ジョージ・レウィスなり。又チャンバーレーンは、後にアスクィスとは政治上の意見を異にするに至りしも、この頃は親しき友人として交り、有爲の青年辯護士として、之をライト(後に有名なる法官となりたる人)の法律事務所に推薦の勞を執りたり。ライトの事務所は多くの重要事件を引受け、殊に收入饒き鐵道に關する訴訟を取扱ひつゝありしかば、アスクィスは之が爲めに有形無形の利益を得たること多し。

然れども彼が辯護士生活に入りて、世人に其存在を認められたるは、一八八三年

に於てサー・ヘンリー・ゼームスの提案に係る選擧違反處罰令の制定せられし時にあり。選擧法改正は、一八八〇年より同五年に至るグラッドストーン內閣に於て最も重きを置きたる者なれば、該法令の意義を一般に知らしむるに就ては、尠からず苦心したる所なり。されば自由黨本部にては之が爲めに其註解の著書を發行せんとし、サー・ヘンリーの紹介によりて、之が編著を、アスクィスに囑托する事となりぬ。アスクィスは此種の法制に關しては特に深く研究し、且つ諸種の雜誌にも寄書しつゝありて文章にも巧なりしかば、總ての點に於て便宜を有し、間もなく脫稿して選擧指針(An Election Guide)の名を以て一書肆より發行したり。これ彼に取りては、處女作にして、又今日より之を見れば眇たる一小冊子に過ぎずと雖、彼が當年の持說と論點の凡ならざりしを認むることを得べし。

是より數年の後、即ち一八八七年、トラファルガル街頭の勞働者大會に關する事件あり。而してカンニングハム・グラハム、ジョン・バルンスの二人は、この事件の被告として拘引せられしが、アスクィスはカンニングハム・グラハムの辯護の爲めに法廷に立ち、滔々と其饒舌を揮つて陳辯する所ありき。されど判決の結果は、不幸にし

てグラハムを無罪とするを得ざりしと雖、先輩の指導なくして獨力この大任に當り、能く被告辯護の事務を果したる手腕に至つては、永く斯界に盛名を傳へらるゝ所なり。

斯くの如くにして、彼は漸く世人の信望を集めたりしが、次で一八八九年かの有名なるパーネル對倫敦タイムス事件の起るに及び、更に一躍して法曹界に盛名を博するに至れり。この事件の公判は同年二月に開かれ、パーネル側の主任辯護士はサー・チャールス・ラッセルにして、アスクィスはチャールスの補佐となりて出づ。初めラッセルはタイムス側の辯護士ソームスと對決をなし、次にはタイムスの支配人マクドナルドと對決をなす事となれり。マクドナルドはタイムスにパーネルの犯罪に關する手紙を買入るゝに當り、指圖をなしたる人なれば、この事件に於ては最も大切なる證人なり。故にマクドナルドとの對決は、事件の勝敗にも係るを以て、判事も傍聽人もラッセル自らその衝に當るべきを信じたるが、ソームスとの對決を終りて正午の休憩ありし後、將に再び開廷せられんとするや、ラッセルはアスクィスに向つて次の對決に當らんことを請へり。アスクィスは寧ろ之を意外とし

て、マクドナルドは肝腎なる證人なれば、主任辯護士自ら審問するの必要あるべしとて辭したるも、ラッセルは余は最早疲勞したり、君を煩はせば大丈夫なりとて、遂にアスクィスに讓りたり。ラッセルが「君を煩はせば大丈夫なり」と云ひしは、蓋し彼は豫てよりアスクィスの能力を十分信認し居たるに因る。斯くてアスクィスはマクドナルドと對決せしが、彼は巧に敵の弱點を見拔きて、鋭く質問の矢を放ちしかば、傲慢にして而も昂奮し易きマクドナルドは、語調紊れて答辯に苦しみ、遂にピコットなる破廉恥漢の詐僞にかゝり、僞造されたる材料を輕信し居たること暴露するに至れり。茲に於て該事件は全くパーネルの勝に歸したるが、こは偏にアスクィスが非凡の辛辣なる手腕を振ひたるの結果たらずんばあらず。されば彼はこの事件に依りて俄に名聲を博し、これより倫敦に於ける辯護士界の驍將を以て目せらるゝに至れり。

是より先、一八八六年を以て下院議員となり、一八九二年には內務大臣となり、其後又大藏大臣となりしが、議員時代に於ても、又內務大臣を辭してより大藏大臣となるまでの間に於ても、彼は依然として常に辯護士の職に從事したり。これ素

より其生活を支ふるの必要に基きしものなりと雖、大臣となりて後までも辯護士を營みし人は、其例頗る稀有なりとす。既にアスクィスは法曹界の雄鎮となりぬ。然れども若し彼にして只管法律事務にのみ專心したりしならば、なほ一層の成功を贏ち得たるを疑はず。初め彼の法曹界の人となるや、素より辯護士としての成功を以て終極の目的としたるにあらずして、實は將來政治家たるの階梯となさんとしたるなり。故にアスクィスに取りては政治は第一にして法律事務は第二なり、政治の爲めには如何なる重大の法律事務ありとも拋ちて顧みることなし。彼は元來倫敦の中央政界を遠ざかることを嫌ひたるが故に、地方に於ける訴訟事件を引受くることを好まざりき。而も倫敦にて重要なる法律事務ありても、地方に政治運動の如きものあれば、直ちに事務を棄てゝ之に赴くを常としたり。かのチェンバーレーンが關稅問題にて地方を遊說したる時の如きは、アスクィスは全く事務を廢してチェンバーレーンの後を追ひ、至る所之に跟隨して自由貿易を主張し熱心に反對演說を試みたり。又その大藏大臣となるの以前、埃及に於ける訴訟にて、十二萬圓の報酬を提供せる事件を依賴せられしが、彼は倫敦の政治界を

離るゝを欲せずして之を拒絕したる事あり。是等の例を以て見るも、彼が平常如何に政治に熱心なりしかを察するを得べし。英國の政界は一八八〇年の總選擧に於て自由黨の大勝に歸し、ヂスレリー內閣仆れてグラッドストーンの內閣となりしかば、この年、自由黨勝利の紀念としてエイティー倶樂部(Eighty Club)なるもの設立せられしが、アスクィスは逸早く其一員となり、茲にても屢〻政談演說をなして、政黨者間にも漸く知己を得たり。

六　議員としての活動振

アスクィスの下院議員としての首途は一八八五年にして、恰も英國の政界に彗星的人物を以て目されしパーネルが、所謂兩端政略を以て自由保守の二大政黨の首領を巧に弄したる時にあり。當時のソールスベリー內閣は議會に其與黨の多數を占めずして成り、頗る薄弱なる基礎に立ちしを以て、暫く自由黨と提携して次の總選擧を以て其運命を決せざるべからざりき。是を以て改選は一八八五年十一月より十二月に至るの間に於て擧行せられたり。是より先アスクィスは、屢〻

議員候補者とならんことを勸められたりしも、なほ自重して容易に立つことながりしが、今回も亦イースト・ファイアよりの招聘來り、遂に意を決して選擧場裡に立てり。選擧競爭にて彼の對手たりしものは、嘗つて自由黨にありて相當の地位を持ちしも、今はグラッドストーンの說と合はずして統一黨に席を置けるボイド・キニアなり。アスクィスが議員候補者としての旗幟は、年來の主張たる愛蘭自治政策と急進主義とにして、激しき競爭の結果、遂に最高點を占め、即ちアスクィスは二千八百六十三票、キニアは二千四百八十九票を得、三百七十四票の差を以て勝利となれり。

アスクィスの賞贊者たる批評家は、嘗つて彼の議院生活を評して曰く、「議員の言論が一般の傾聽する所となるは容易の事にあらず、ヂスレリーは議院にて言論を聞かるゝまでには十年を要したり、されどカーゾンと、アスクィスは例外にて、其議院に入りたる當初より聞かれ、アスクィスの演說は敵も味方も稱揚し、敵黨の領袖サリスベリー、バルフォーア等の人々さへも感歎したり」と。アスクィスの議院に於ける最初の演說は、統一黨の愛蘭に對する態度を攻擊したる者にして、統一黨をして顏色なからしめ、大に自黨議員の喝采を博したり、又彼は一八八七年、ノッチンハムの自由黨選擧區に於て、グラッドストーンの抱持せる主義及び愛蘭自治に關する自由黨の決議案に就て說明したるが、政綱說明者としても亦上乘の出來榮なりしと云へり。然れども彼が此時代に於て世人の感興を呼びたりしは、政客としてよりも辯護士としてなりとす。即ちかの有名なるトラファルガル事件にてグラハムを辯護し、又パーネル疑獄事件にて雷名を轟かしたるは此前後の事に屬せり。彼は其後議會にて演說をなすこと屢、なりしが、自由主義と愛蘭問題とは、夙に學校時代より提唱し居りし所なれば、是等の題目は彼の十八番なりき。就中、愛蘭問題はグラッドストーンの全力を傾けたるものにして、當時の最大問題たりしが、演壇に於けるアスクィスの演說は、愛蘭に關する事情頗る周密至らざるなかりしと云へり。又彼は議員歲費增加の熱心なる主張者にして、「議員の歲費は合理にして適當なる程度に於て定めたる職務上の俸給たる事を要す。斯くの如くすれば一方に於て資產なき議員も安んじて其職務に忠實なる事を得、他方に於ては不合理なる年金及び老朽者救助制を撤去するを得べし」との意見を有したり。

一八九二年、保守黨內閣は下院に於て多數を失ひたるを以て、愛蘭改良案の採決を俟たずして直ちに議會を解散し、同年七月總選擧を行ひたるが、アスクィスは今回もイースト・ファイア選擧區より再選せられたり。彼が選擧區にて言明せる政見は、遺憾なく其自由主義の面目を發揮し、社會政策に就ては「現今の社會改良問題は、既に言論の時代は過ぎ去りて實行の時代なり。而して社會の群集的行動は、消極的には均齊を保つ事に努め、積極的には上より引揚ぐる事を要す。これ即ち時勢の要求する所なり」と云ひ、又愛蘭自治問題に就ては「或る一派の人々は、中央集權と地方自治權とは互に兩立せず、到底其調和を謀ること困難なりとなすと雖、こは事實に迂遠にして机上の議論をのみ事とする腐儒の杞憂に過ぎず。斯かる心配は健全なる信條と實際的知識とに依りて一掃するを得べし」と云へり。以て彼の思想の一斑を覗ふ事を得べし。

總選擧後の議會は、一八九二年八月を以て召集せられ、議會の劈頭に於て上奏案の討議せらるゝに當り、アスクィスは機敏にも上奏案修正の動議者となれり。蓋し自由黨は今回の改選に依りて既に下院に多數を占むるに至りしを以て、上奏案

の修正は即ち政府交迭の免るべからざるを意味せるなり。されば上奏案修正の動議を提出するは、固より一黨の先輩のなすべき事なるに、未だ議會に於ける經歷深からざるアスクィスが、早くも起ちて上奏案に批評を加へたるは、聊か僭越の嫌なきにしもあらず。然れども此青年政治家に次いで起立したる大藏大臣は、頗る警戒すべき大敵に對するが如き態度を取り、兩者の推問答は宛ら兩黨首領の爭の如き光景を呈せり。この動議投票の結果は、三百十名に對し三百五十名の多數を以て自由黨の勝利に歸したれば、保守黨のサリスベリー內閣仆れて直ちにグラッドストーン內閣となりぬ。アスクィスの此時に於ける態度は、その議會に於ける地位を一層顯著ならしめしものにして、彼が一躍して大臣の椅子を贏ち得たるも、亦斯かる拔駈の功名ありしに依ると云ふべし。

爾後、彼の議會に於ける雄辯は愈重きをなすに至り、ウィリアム・ハーコート及びジョン・モーレーの二人と相並びて自由黨に於ける三大雄辯家と稱せられ、而も其年齡最も若く、政治的生活に入るの日亦最も淺かりき。後年、バンナーマン內閣の議會に於て、能く統一黨の驍將チャムバレーンの矢面に立つものは、アスクィスを措い

て他にあらざりしなり。

是より先、彼は愛妻メルラ・ンドを失ひたるが、其後權門の出にて、流行界の花と謳はれしサー・チャールス・テナントの女マーゴット嬢(Margot)に會し、遂に婚約成りて偕老同穴を契るに至り、將來幸福なる家庭を作るの基とはなりたり。新夫人はアスクィスの生立とは異りて、驕奢榮華の社會に人となり、頗る風流華美を愛したるも、志操高くして才學兼備の淑女なり。グラッドストーンは豫てより新夫人と親密なりしを以て、ドロシー・ヴルー嬢などゝ共に結婚式に列したりき。

七　異數の拔躍―臺閣に列す

アスクィスは能く己れを知るの人なり。沈思して起ち、徐々にして名をなさんとするは、彼が成功の秘策なりき。かの久しく無名の辯護士を以て甘んじ、又幾度か議員候補者たらん事を奬められ、幾度か之を辭退したるが如き、其性格を表して餘あり。然れども機を觀るに敏にして決斷力に富める彼は、好機一度到れば之を捉ふること速なるが故に、その經歷の跟を見れば立身の駿速なること多く其例を

見す。一八九二年の議會に於て、上奏案修正の動議を出し、新進の議員が一回の演說に依りて俄に名聲を博したるが如きは、彼の機才の然らしむる所と云はざるべからず。

一八九二年、第四回の、グラッドストーン內閣成るに及び、臺閣の顏振はバンナーマンの陸軍大臣、ハーコートの大藏大臣、ローズベリー卿の外務大臣、ジョン・モーレーの愛蘭大臣、アスクィスの內務大臣等なりしが、アスクィスの內務大臣となりしは何人も意外とせざるはなかりき。首相の新內閣を組織するに當りて新人材を登用するなるべしとは、固より世人の豫期したる所なりと雖、アスクィスを內務大臣とするが如き大膽なる拔擢は、全く一驚を喫せざるを得ざりしなり。蓋し英國にては、年少政治家の臺閣に列するは、先づ其無分別と稚氣とを次官にて拔去るを例とせり。さればアスクィスが一躍大臣の職を占めしは固より衆目を峙てしむるに足ると雖、彼は既に無分別も稚氣も法廷にて拔かれ居るなり。されば、ジョン・モーレーの如きは夙に彼の才能を洞觀し、グ氏が初め內閣組織に當りてアスクィスを檢事總長たらしめんとするの意嚮なりしを、モーレーは强ひて之を慫慂して、內務

大臣たらしめしなりと傳へらる。これ恐らくは眞相を穿てるものなるべし。

グラッドストーンは一八九三年二月を以て一種の愛蘭自治法案を議會に提出せり。この問題の議會に現はるゝや、之が討議に八十二日を費したるが、反對黨にてはチャンバレーン主として論戰の衝に當り、政府黨にてはアスクィス之に應戰し、同法案は二百六十一名に對し三百一名の多數を以て見事に政府黨の勝利に歸したり。されば此場合に於けるアスクィスの活動は大に世人の注目する所となり、彼の内務大臣としての能力は此時に於て承認せられたりき。

又内務大臣としてのアスクィスは其鋒鋩の辛辣なると自己の信ずる所に向つて非讓步的なる態度とは、此時代に於て最も能く表れたり。而してトラファルガル問題は其一なり。嘗つてトラファルガル街は保守黨政府にて大集會の會場となすを禁じありしが、アスクィスは曩にカンニングハム・グラハムの爲めに辯護人となりし關係あるを以て、倫敦の自由黨派は再び之を集合場となすことを請願したりしも、傲岸なる彼は遂に之を承認せざりき。彼は曰く、一八八七年の暴動事件の如きは公衆の利便を害すること多し、故に水曜、日曜、及び銀行祭日に於て警察上の

注意を與へたる場合の外は、斷じて斯かる請願を許すべからずと。又愛蘭人の爆裂彈を使用せる者の處分問題は其二なり。愛蘭黨の領袖レッドモンド等は、此等の暴徒を政治上の志士と認め、其放免を内務大臣に哀願したりしも、アスクィスは情實の爲めに法を枉ぐべからずとし、嚴乎として之を拒絶せり。次に又フェザーストンの炭坑に於ける同盟罷工事件の如きは、喧々たる世論を喚起したり。フェザーストンはヨークシャイヤー州に於ける一小村の炭坑なるが、一八九三年、坑主と坑夫との間に感情の齟齬を生じ遂に同盟して、業を止め、機械を破壞し、且つ建物を燒棄せんと企てたり。玆に於て地方官は内務大臣に電申して、軍隊の力を假るにあらざれば到底鎭壓する能はずとなし、アスクィスは遂に陸軍大臣に交渉して軍隊の派遣をなせり。然るに暴徒は軍隊に反抗して容易に沈靜に歸するの模樣なかりしかば、其巨魁と覺しき者二名を射殺せしに、全國の勞働者憤起して政府に軍隊の派遣を詰り、内務省に迫りて說明を求むるに至れり。されどアスクィスは平然として之に對し、委員を任命して事件の眞相を調査せしめしが、其結果は地方官及び軍隊に於て一の缺點なかりしこと報告せられ、流石に物議を釀したる事件

も平和の間に落着する事を得たり。

フェザーストンの事件は、一部の社會よりはアスクィスの失政として非難せらる。殊に彼の友人すら、アスクィスの態度の餘に强硬に過ぐるを忠告したるものこへあり。然れども又一方に於ては、從來の内務省が下層人民の爲めに冷淡なりしに反し、彼は社會改良家を以て自ら任じ、或は工場法案を改正して勞働者を保護し、或は監獄を釐革して囚人の爲めに苦役を減ぜり。尙此外アスクィスの内務大臣としての事業に特筆すべきものは、一八九三年の議會に於て、ウェールスに於ける寺院の特權廢止に關する法案を提出したる事とす。或る批評家は曰く「アスクィスが議員として同會にありし時の態度と、大臣として内閣に列して以來の態度とは大に異れり。即ちそは斬新創見の思想加はれること是なり」と。彼は内務大臣の職にあること六箇月にして早くも下僚の心服する所となり、又首相グラッドストーンの信任を受け、閣僚中、持にトードマウス卿の如きは、グラッドストーンの退隱後、其後任として適當なるはアスクィスなりと信じたり。

グラッドストーンは、一八六八年以來前後四回の内閣を統率し、自由主義の爲め、將

た愛蘭自治問題の爲めに健鬪したりしが、一八九四年三月、政界の事情否なるを知り、貴族院改造論を告別演說として冠を挂けたり。然るに自由黨にては、其後任として首相の候補者たるべきもの、上院にローズベリー卿、リッポン卿、キンバーレー卿、下院にサー・ウィリアム・ハルクール、ジョン・モーレー、及びアスクィスの諸名士ありしが、ローズベリー卿の呼び聲最も高く、女皇は卿に首相を命じ給へり。思ふにアスクィスの選に漏れたるは、其手腕に於ては既に首相たるに十分なりしと雖、政治家としての經歷に於て尙年數淺かりしを以てなり。斯くてアスクィスはローズベリー卿の首相となりて後も、常つてグラッドストーンの下にありし時と同じく、誠實と勉勵とを以て之を輔佐したりき。

八　反對黨の驍將

一八九五年、ローズベリー内閣が陸軍に關する一小事件の爲めに仆れたるは、宛ら長堤の蟻垤に依りて崩解したるの觀あり。自由黨内閣の斯かる小事件より動搖すべしとは何人も豫想せざりしが、陸軍大臣キャメル・バンナーマンは現時の如

き事情の下に於ては勤續し難しと申出で、遂に六月二十六日を以て首相ローズベリー卿、內務大臣アスクィス以下、總辭職を發表するに至れり。蓋し事實上に於て內閣は一小事件の爲めに仆れたるにあらず。既に內外の事情は到底持續に困難なる者ありしに因る。內閣更迭に依りて野に下りしアスクィスは、再び辯護士となりて法律事務を執れり。彼が反對黨議員として政治界に活動するの傍ら、尙辯護士として訴訟に關係せるは、固より非常の煩勞たりしや、論なし。然れども精力絕倫なりし彼は能く其繁忙に堪へて、政治界と法曹界とに雄飛する事を得たり。

前首相ローズベリー卿は、爾後一八九六年まで自由黨總理たりしが、ウィリアム・ハーコート之に次いで總理となり、一八九九年、ハーコートも亦辭するに及び、キャメル・バンナーマンその後を襲へり。而してアスクィスは、バンナーマンを援けて左黨を指揮するの最有力者なりき。然れども唯南阿事件に關しては、アスクィスとバンナーマンとの間に扞格を來したり。南阿事件は保守黨のサリスベリー內閣が英國の强大なる腕力に依りて喜望峰の植民地を略取せんとするに起因せるものにして、若し之を人道の上より論ぜんか、多大の非難なきを保せず。されば率直に

して多感なるバンナーマンは、自由黨を提げて非戰論を主張せんとせしも、帝國主義に左袒するアスクィス、ローズベリー卿等の一派は之と反對の態度を取れり。而して初めアスクィスは總理に注意して、愼重の態度に出で、自由黨の非戰派開戰派何れにも傾かざらん事を勸めしも、由來直情徑行の老政治家バンナーマンは遂に之に從ふこと能はざりき。斯くて總理は非戰論者の大會に招待せられ、南阿に對する保守黨政府の非道なる政策を論難攻擊せり。是に於てか自由黨中の開戰派はローズベリーを會長として同志會を組織し、アスクィスを始めエドワード・グレー、ハルデーン、其他多くの名士之に加はりしを以て、自由黨は開戰、非開戰兩派對立の奇觀を呈するに至れり。然れども幸にして自由黨破綻の動機とはならざりき。

一九〇〇年、議會の任期滿ちたるを以てサリスベリー內閣の下に總選擧行はる。アスクィスは南阿事件に關してバンナーマンと意見を異にしたりと雖、私交に於ては毫も以前と異る所なく、殊に彼は兩者の分立が自由黨の爲めに最も不利なるを知れるが故に、總選擧となるや、直ちに相提携して選擧場裡に奔走せり。選擧

の結果は依然として政府黨多數を占め、自由黨は不過の地位にありしも、アスクィスはバンナーマンに對して好誼的行動を執れるに依り、一時兩派對立の姿なりし自由黨は、之が爲めに統一を保つ事を得たり。

南阿戰爭後、長袖政府の評ありしサリスベリー內閣は、勢微々として振はず、首相サリスベリー侯は一九〇二年、老衰の故を以て職を辭し、侯の甥に當るバルフォーア其後を襲ふ。新首相バルフォーアは同年敎育法案を議會に提出せしが、アスクィス此案に對して自由黨の急先鋒となりて反對し、盛に攻擊を加へたり。殊にアスクィスが反對黨議員として異彩を放ちたるは、關稅問題に對する奮鬪なりとす。關稅政策の始唱者チャンバレーンが、かの有名なるバーミンガムに大演說をなしたるは一九〇三年五月なり。彼は同月再び下院に於て之に關する演說をなしたるが、首相バルフォーア以下政府黨に於ても此發案に對し、主義に於ては贊成なるも、斯かる重大問題は一朝一夕に決すべからずとて不同意を表せり。自由黨にては各領袖悉く之に反對し、總理バンナーマンは下院に於て痛切なる反對演說をなし、越えて六月、アスクィスも亦議場に於て關稅政策の暴戾を喝破し、且つ政府の穀稅

に對する無定見、不統一を責め、何故に個々異りたる意見を有する閣員が依然として椅子を偷めりやとて、强烈なる攻擊を加へたり。是よりアスクィスはチャンバレーンの演說する處には、必ず之を追跡して駁論をなし、其精緻なる推論、崎嶇犀利なる攻擊は、能く老獪の政治家チャンバレーンの說を粉碎して餘ありき。

九　大藏大臣―首相となる

サリスベリー侯の時より萎微振はざりし保守黨內閣は、バルフォーアの首相となりて後も依然として勢力挽回の餘地なく、加ふるに南阿戰爭の後を受けて財政缺乏を告げ、經濟政策問題を初頁として種々の難問題紛出したりしかば、補缺選擧の行はるゝ毎に、保守黨の敗北を見、若し近く總選擧の行はれたらんには、最早內閣陷落の止むべからざるの機運とはなりぬ。斯くの如くして一九〇六年十二月に至りしが、バルフォーア首相は遂に他の閣僚と共に骸骨を闕下に請ふに至れり。是に於て代つて內閣を組織したる者は、自由黨總理キャメル・バンナーマンなるが、彼は先づ第一に入閣の事をアスクィスに交涉せり。アスクィスは日頃親交あるバ

ンナーマンの交渉を受けて直ちに之を諾し、自由黨内閣は茲に成立す。其主なる閣員はアスクィスの大藏大臣、エドワード・グレーの外務大臣、ジョン・モーレーの印度大臣、エルヂン侯の植民大臣、ハーバート・グラッドストーンの内務大臣等なり。

大藏大臣としてのアスクィスの治績は、華々しき事業に於て顯れずと雖、實質的の効果を擧げたる事尠からず。若し夫れ注目すべき法案としては、單に養老年金其他二三の新法案を提出したるものあるに過ぎず。然れども一方に於て軍備の充實を計り、又他方に於て社會政策を意味したる財政計畫の立案は、既に此時代に於て成りたるなり。然るに首相バンナーマンは一九〇八年二月、軍備縮小に關する計畫を立て、自由急進派を率ゐて之を實行せんとせり。これアスクィスの固より與せざる所にして、英國は如何なる事あるも海上權の覇權を支持するに努めざるべからずと論じ、輿論の同情する所となりたり。同年三月、バンナーマンは病痾に罹りて閑地に療養し、大藏大臣アスクィス仍て首相代理となる。又同月アスクィスは、下院に於て統一黨の領袖バルフォアの海軍問題に關する質問に對し、有名なる海軍擴張計畫の演説をなし、彼が年來の抱負を吐露して軍備の前途を憂ふる

者に滿足を與へたり。

然るに首相バンナーマンは病益〻重く、復た起つ能はざるに至りしを以て、四月六日、遂に其職を辭したり。當時皇帝エドワード七世陛下は國交の圓滑を謀らんが爲め、大陸諸國を訪問され、恰も佛蘭西ビリアッツに滯在中なりしが、此地より首相代理アスクィスを召され、同月八日、謁を賜ひて首相任命の勅を下し、アスクィスは皇帝の手に接吻して印綬を受くるの式をなせり。而して首相アスクィスの下に改造されたる内閣は、グルー卿の植民大臣、ロイド・ジョージの大藏大臣、マッケンナーの海軍大臣、ランシマンの文部大臣、ウィンストン・チャーチルの商務院長（後に内務大臣）等にして、大藏大臣たるロイド・ジョージは實に首相の股肱たるなり。自由黨にてアスクィスの先輩はブライス及びジョン・モーレーの二人なりと雖、ブライスは既に社交界の人となりて政治界と疎く、モーレーはバンナーマン内閣にて印度大臣たりしが、今回は叙爵せられて現任のまゝ上院議員に列す。殊にジョン・モーレーは前にアスクィスの内務大臣となりし時、グラッドストーンに慫慂したる人、新首相が此時を機として奏薦の勞を執りしは寧ろ當然と云ふべし。

諸新聞はアスクィスの政治的閲歴を賞讃し、反對黨新聞まで彼の能力を承認せり。而して新内閣の方針は大體に於て從來のバンナーマン内閣の方針を踏襲すと雖、軍備問題に於ては斷然アスクィスの所信を實行し、其財政法案の爲めに自由黨の宿題たりし上院改革を提唱するに至り、バンナーマンの消極的なりしに比して著しく積極主義となれり。アスクィスが首相の職に就ける劈頭に於て、先づ實行を企てたるものは海軍擴張と養老年金制度となり。然れども世人はこの計畫を以て保護政策を導くものとし、自由黨年來の主張たる自由貿易制度と相扞格するに至るなきやを憂へたり。蓋し海軍擴張と養老年金制度とは、甚しく財政の膨脹を來すを以て、結局之が財源を間接稅に仰がざるべからず、間接稅を徵收せんとせば、勢ひ保護政策に依賴するに至るべしとなしたればなり。然れども一九〇九年四月、下院に提出せられたる豫算案は、自由貿易主義を拋ちて保護政策に依賴するが如きものにあらざりき。該豫算案は主として大藏大臣ロイド・ジョージの編成せるものにして、財源をば何れも富有階級社會の負擔となるべき增稅若くは新稅に求め、中等社會以下の徒に厚くして富豪を苦むるの傾を有せり。是に於て豫算案は保守黨の多數を占むる上院の强硬なる反對を受け、遂に上院改革問題の動機となり、政界に大波瀾を起すの基とはなれり。されば、アスクィス内閣の財政政策及び上院改革問題は、其内容を詳にするの要あるを以て、以下項を改めて細叙する所あらんとす。

一〇　社會主義的財政々策

首相としてアスクィスの執れる政策は社會主義的なり。而も人道の感情論に制せられて、國權の擴張を忽にするが如き迂遠なる方針を執らざりき。之が爲め彼は勞働黨に結び、社會的財政策及び經濟策を行ふに當り、尙海軍の擴張を忽にするを欲せざるにあり。アスクィスの自由黨内閣が現今の統一黨に對し依然として其重きをなせるは、其中に勞働黨の加盟せるもの多きが爲めなり。アスクィスの政策は一に勞働黨即ち社會黨と自由黨との同盟を計り、之によりて其目的を貫徹せん事を期せるなり。從つて彼の唱ふる所は、經濟上に自由貿易主義の保存となり、社會上に養老年金法の制定となれり。一九〇八年五月一日、自由黨員の主唱に依

り、首相アスクィスの爲めリフォーム倶樂部に歡迎の宴を張る。アスクィスは會長の歡迎の辭に次で謝意を述べ、一言政治問題に論及せり。自由黨は現に著しき困難の狀態にあり。最も最近の補缺選擧に於て二三の議員を失ひたるが爲めにあらずして、我黨の事業が絶えず激烈なる反抗を招きしに依る。我黨は宜しく積極の政策を立てゝ猛進せざるべからず、自由貿易主義を標榜して保護稅主義と爭はざるべからず。吾人は先にバルフォーア內閣の時之が爲めに奮鬪せり。今又之が爲めに運命を睹せんとす。更に我自由黨內閣は向後一週間を期し、勞働社會の老幼保護問題を提出せざるべからず」と。

アスクィスは斯くの如くして一意積極主義を標榜して、其志す所に猛進し、主として養老年金制度の完成に努力するに至れり。斯くて一九〇八年五月八日の下院にて、首相アスクィスは同內閣の豫算案を發表し、且つ養老年金制度に就き其成案を代議院に問へり。曰く、「一九〇七年の會計にて四百七十二萬六千磅の剩餘收入超過を得たり。蓋し同年度に於ける英國の商業は近年來の最好況を示し、所得稅の實收高は豫算に超ゆること百八十萬磅に及び、且つ節約せし金高も多額に上

りしが爲めなり。且つ同年度に於ける公債は一千八百萬磅減退せり。若し以上の殘餘金を以て是等の公債を償却せば、少くも本年度に於て千五百萬磅の還債をなすを得べく、一九〇九年の終末に至らんか、英國の公債は最近二十年間に於ける最少限に達すべく、ボア戰爭當時の國債狀態に復すべし。斯くの如く論ずれば、一九〇九年度の豫算に於て、收入は一億五千七百七十七萬磅に上るべく、支出は僅に一億五千二百八十六萬七千磅なれば、四百九十萬三千磅の剩餘を見るに至るべし。吾人は之に依りて養老年金制度と砂糖消費稅の引下げを斷行せんと欲す。而して其支出に充つべきものは三百四十萬磅に當るべし。剩餘金の殘餘は以て海上保險印紙稅輕減に充つべきのみ」云々。首相の公にせる豫算案は、院の內外に大に歡迎せられ、自由派の新聞紙は口を極めて、その英國憲政史上一新時期を劃するものなるを讃美せり。斯くの如くしてアスクィスの企畫せる養老年金制度は多數を以て議會の協贊を得たり。アスクィスの聲明する所は、社會的なるにあり、民主的なるにあり、而も一般社會主義者の唱ふるが如く、偏狹なる空想に支配せられて、國威の擴張を輕視するものにあらざるなり。彼は國權の隆昌を計らん爲

め、飽くまで海上權の獲得を安全ならしめんとするなり。一九〇八年三月、アスクィスの未だ首相代理たりし時、統一黨の首領バルフォーアの英國海軍計畫に關する質問に對し、彼は明快なる答辯を試み、爾後數年間に於ける海軍計畫を表明せり。曰く「こは我國に於ける最も重要なる問題なり、之に答ふるに先ち明言せざるべからざることあり。他なし、海上に於ける我國の優勢を維持するは內閣一致の意見にて、之が爲め二國標準主義即ち孰れの二國の聯合海軍に對しても優勢を維持する事は我國是として甚だ重要なるものなり。バルフォーア氏の質問は二國標準に關係なし。何となれば此標準は「ドレッド・ノート」型並に「インヴィンシブル」型巨艦に依りてのみ維持せらるゝにあらず。僅に之に劣れる「ロード・ネルソン」「アガメムノン」の如きも大に我海軍を强くするものなればなり。故に質問の係る所は一九一一年の終期に於ける兩國ドレッドノート型巨艦の比較に止まるものなり。一九一一年の終に至り、我國がドレッドノート型巨艦を十二隻以上有せざるべしと云ふは、英國が一九一〇年に於て新艦を造らず、又假令造るも一九一一年の終までに竣工せずと推定するものなり。余は敢て將來の計畫を豫言する者にあらざるも、若し獨逸にして其計畫通りに實行を客まざらむか、吾人は嘗に新巨艦の建造に着手するのみならず、其竣工の期をして一九一一年の十二月以前にあらしむべきを期す。獨逸が果して計畫通り實行し得るや否は疑問なり。從つて一年間は我海軍の擴張を中止すべきも、獨逸の實行如何に見、英國は必ず期に後れずして其優勢を維持するに努むべし。成るべく新式を選ぶの點より云ふも、遲れて造艦に着手するは邦家の利益を涉むる所以なり」と。其言ふ所切に肯綮に當り、聽くもの自由派となく統一派となく、皆喝采を以て之を迎へぬ。茲に於てか所謂二强國標準の國防論は、隱然英國政界の大方針たるに至れり。一九〇八年四月、アスクィスバンナーマンに代り宰相の印綬を帶ぶるに至りても、彼は決して此持說を拋たざりき。軍備の完整に依りて、國家の安全を計るを政府の第一要義となせり。されば一九〇八年八月の交、英獨兩皇帝の交歡行はれ、人は皆軍備制限の行はるべきを豫期したるに拘らず、アスクィスの二强國標準主義は依然として動搖せず、否却つて其れ以上に振張の策を講せり。同年十一月、首相アスクィスは下院に於て述べて曰く、「政府の抱ける二國標準の定義は(英國に次ぐ二箇の最强海軍國の軍艦を

合併したるよりも、尙一割の優勢を占むるにあり」と。こは自由黨及び反對派より大なる同情を以て迎へられたり。其後一九〇九年二月十八日の下院にて、自由黨の代議士バイルスは首相アスクィスに對し、海軍問題の答辯を求めぬ。アスクィスは之に答へて、「本官等は、未だ曾つて獨逸より何等の提議に接したる事なし。嘗つて本官等が明言せし獨逸は獨逸の必要を標準として海軍計畫を建て、毫も英國の計畫により影響せらるゝ事なしとの主義を今に於て改めざるべし。又獨逸は英國も亦自國の利益を保つ爲め、必要と認むる範圍內に於て、其海軍を擴張するを怪まざるべし。故に英獨間に何等妥協の存することなし」と。超えて四月に至り、アスクィスはそのグラスゴーに於ける演說中述べて曰く「若し獨逸にして其言明する所に反し、今後數ヶ月間に製艦計畫を實施するに於ては、英國は即時十隻のドレッドノート型戰艦の建造に從事すべし」と。首相アスクィスの自由帝權主義は茲に至りて益〻顯著なりと謂ふべし。

アスクィスは斯くの如くして愈〻海軍擴張の實施を計らんとす。是より先、獨逸皇帝ウィルヘルム二世は、「獨逸の將來は海上にあり」と宣して、盛に海上雄飛の策を講じ、

一九〇〇年には、突如十五箇年に亙る大海軍擴張案を發表し、一九〇六年並に一九〇八年には、更に其擴張案を發展せしめんとするに至れり。これ英獨兩者の間に激しき海軍の競爭を起せる所以にして、アスクィス內閣が鋭意其擴張に努むる所以なり。斯くて英國は從來の計畫の外に一九〇九年より十二年までに戰鬪艦二十四隻、裝甲巡洋艦六隻、小巡洋艦十二隻、驅逐艦九十六隻を築造するの計畫を立てたり。加之、アスクィスは「凡そ一國の海軍は其國の安全を主眼として建造せらるべきものなり。英國が今後更に幾隻のドレッドノート型戰艦を造るべきやは一に獨逸の程度により決せざるべからず」と斷言せり。この海軍擴張案に對しては、自由黨並に統一黨、何れも贊同の意を表せり。否却つて統一黨の錚々たるものは、自由黨にも增して海軍の擴張を計らんとせしなり。

斯くの如くして一九〇九年より一九一〇年に至るの豫算に於ては、以上記せる如き新艦建造費等より生ぜる海軍費の增加のみにても五百五十萬三千二百磅に上り、又養老年金の支出に於ては前年の豫算に超過すること約八百萬磅となり、其內の費目に於ける豫算の超過は約三百萬磅に及び、總計約千六百萬磅餘の

歳計不足を見るに至れり。この巨額の不足を生せるは、自由派は勿論統一黨も寛容せんとする所なり。何となれば海軍費の增加は統一派の人士と雖、承認する所なればなり。而も如何にして此缺陷を補ふべきやに至りては、遂に兩黨の乖離となり、上下兩院の軋轢を見ざる能はざるに至れり。

アスクィス內閣の大藏大臣ロイド・ジョージは、其主義に於て社會主義を奉じ、且つ經濟政策に於て保護稅政策に反するものなり。彼は以上の歳計の不足を補充するの大計畫を立て、一九〇九年四月二十九日、之を下院に提出すると共に、四時間に渉るの大演說を試みたり。名はロイド・ジョージ案と稱すと雖、其實に於てはアスクィス內閣の大方針たるなり。此案にては、所得稅、相續稅、酒精稅、酒販賣稅、煙草稅、印紙稅等の增率を行ひ、特に新地稅を設け、土地の偶然所得に對する課稅を實施するに至り、剩へ自働車稅並に其燃料稅等の新稅をも起すに至れり。要するに是等の增稅新稅は何れも富有階級社會の怨中より國費を仰がんとするものにして、在野統一黨並に保守的なる國民の一部が、之を目して社會主義の臭味を帶ぶと云へるもの偶然にあらざるなり。蓋つて保守統一黨の政論に見んか、彼等は豫算の

缺陷を補ふの方法として關稅制度を擴張して財源增加の道を講せんとするなり。而もアスクィス內閣の方針は、自由貿易政策を變更せざるにあり。斯くて豫算缺損補償の問題は、一轉して自由貿易主義と關稅改革主義との軋轢を見んとするに至れり。

アスクィス內閣は今やロイド・ジョージ案を以て社會の改良を促し、自由貿易主義の隆昌を計り、案と共に其存亡を賭せんとす。反對在野黨は之に抗して關稅改革を以て其標榜たらしめんとす。自由黨に富める下院と保守黨に富める上院は、最後の決を一擧に爭はんとす。議院場裡に於ける兩黨の奮戰は踵を接して臻らんとするなり。

ロイド・ジョージ案、即ちアスクィス內閣の豫算案の一度議會に現るゝや、保守黨は激しき攻擊を試み、下院は暑休をも廢して討議を重ね、第三讀會に入るに先ち、四百五十餘回の討議を重ねたり。此年九月、英國第二の大市府たるグラスゴーに於ける實業家は、不偏不儻、殆ど中立の地位を保てる政治家の論議を聞かんとし、ローズベリー卿の演說を請へり。卿は九月十日、市民の請に應じて實業家の大會に臨

み、痛烈なる政論を試みて曰く、「余は在朝在野の二大黨の何れにも屬せずと雖、今や余は國家に對する義務として沈默を守る能はず。余の意見を玆に陳べんとするは、一面舊友たる自由黨に離別を宣するに同じ。されど余と自由黨との關係は既往に於て絶えたり。新に之を絶緣するにあらざるなり。今や保守黨の諸士の下院に於て其少數なるに係らず、奮鬪勇戰、毫も多數黨に讓るなきは、余が感歎の聲を惜まざる所なり。若し夫れ新豫算案にして上下兩院を通過し、以て完全なる法律たるに至らんか、これ我大英國の將來を擧げて之を濁流に投ずるものなり。豈に寒心すべきの至ならずや。同案をして法律たらしめざるは、國民及び國家の利益なり。今日の如き豫算案を見るに至りたるは、資本缺乏の爲めに業を失へるもの增加したるが爲め、下層社會の民增加したるが爲めなり。アスクィス內閣は自由主義の美名の下に危險なる社會主義を行はんとするものなり。アスクィス內閣のなさんとする所は、第一、財產に對する打擊なり、第二、自由思想の攻擊なり、第三、資本に對する破壞なり。アスクィスの現內閣は滔々として社會主義の歷程に至らんとするなり。余は保守黨の唱ふる關稅保護政策を以て一種の罪惡なりと思惟す

るも、現內閣の社會主義に至りては、偏に萬物の滅亡、家族制度の破壞、信仰の廢滅、王政の顚覆、帝國の敗亡を誘致せんことを恐るゝなり」と。卿の演說は現內閣の豫算案を攻擊するに於て、殆ど餘力を止めざりき。而も卿は保守統一黨と相結ぶこと能はざるなり。卿の如き不偏不黨の勇將よりして斯くの如きの論難を蒙むる、首相アスクィスたるもの一言の之に答ふる所なくんばあらず。實にこれ黨の威信を繫ぐに於て緊要なるを見るなり。斯くてアスクィスは、十月十七日、バーミンガム市のシングレー・ホールに催されたる示威大會に臨み、陰にローズベリー卿の言に酬いて曰く、「現內閣の提出したる新豫算案は已に一般に承認されたる經費の不足を補充するに過ぎず。新地稅の如き瘝々として世論の焦點たる所なるも、從來免稅の恩惠に浴せるものに賦課すべきものゝみ。固より至當のことたるを失はざるべし。財政に關して下院は實に人民の代表者なれば、豫算に對しては決定權を有す。上院が豫算を拒否するあらんか、これ我英國の革命なり。吾等は飽くまで反抗すべし。新豫算案を以て社會主義者の見解に依るものなりとなすも、そは大なる誤なり。新豫算は經濟學者の普通の見地より我自由黨の根本主義に基け

る所あるなり。ローズベリー卿の論難は抑、何を以て目標となすや。卿の目的は竟に關稅改革にあるが如し」と。アスクィスの活動に對して、反對派の聲焰は益、激昂し來れり。保守黨領袖バルフォーアはバーミンガムの歡迎會に臨みて、アスクィス內閣は舊制度の財政を改むる名の下に、恐るべき社會主義を行はんとするなり。吾人は關稅の改革に依りて多望なる未來に至るを期せざるべからずと演說し、多大の感興を聽客に與へたり。

斯くて議院に於ける論爭は日を追うて益、旺に、下院の多數は現政府に味方するを以て、直ちに政府案を通過せしめんとするも、上院は之を迎へて直ちに否決せんとするの態度を示したり。皇帝エドワード七世は下院の豫算問題が英國憲法上の大爭亂たるに至るを憂へ、十月五日、首相アスクィス並にローズベリーを召し、事局の開展を圓滿ならしめんと計るに至りぬ。下院に於ける豫算案の第三讀會は、一九〇九年十一月二日より四日に亙り、三回の討論を經て終結せり。其初日に於て、保守黨の領袖チャムバレーン、四日にはバルフォーアの演說ありしが、討論終結の末、投票を行ひ、チャムバレーンの提議に係る豫算案否決の動議は、百四十九對三百七十九を以て、脆くも政府黨の蹂躙する所となりき。

想ふに豫算案が初めて下院に提出せられたるは四月二十九日にして、その最終の議を終へたるは十一月四日なれば、其間正に半歲の日子を費せり。時に休暇を廢し、徹宵討議を重ね、愼重國政を誤るなきを期せり。此間政府黨が殊更に議を遷延せしめたるは、下院の聲を以て上院を威嚇せんと欲せしなり。豫算案は愈、上院に回附せられ、十一月八日、第一讀會を開けり。當日政府黨の領袖たるクルー卿は豫算案第一讀會を開き、可否を議場に諮ひたるに、異議なく之を通過せり。第二讀會は十一月二十二日を以て開かれ、政府黨側にては、クルー卿を初め、モーレー、ウォルヴァハ、ハムブトン、カーリングトン等の諸卿席を列ね、在野黨のハルスバリ、カーゾン、カウバルの三卿威儀を正し、ロバーツ元帥、ローズベリー即ち又上席に在り。第二讀會の始まるや、クルー卿立ち豫算案第二讀會通過の動議を提出せり。この簡單なる動議を提出せるは、一に上院は豫算案に對し容喙の權なきことを諷せるものなり。是に於て在野黨の領袖たるランスダウン卿は痛快なる一言を以てクルー卿の提議を駁せり。クルー卿は上院がこの重大事件に無關係なりと考へた

るが如し。而も此議案たる未曾有の問題なり。上院は此豫算案が國民の裁斷に附せらるゝまで、之に同意を與ふるの正當ならざるを主張す。該案が法律たらん事を國民が明かに希望するまでは、該案に對し同意を表するの責任を有せず。上院には豫算を變更修正するの權能なしとするも、尙豫算案の全部を否決するの權能を失はざるなり」と。玆に於てアスクィス內閣の藏相ロイド・ジョージは、之に對し熱心なる駁擊を加へたり。案は遂に十一月三十日を以て第三讀會に移されしが、自由黨派のヨーク大僧正は温健なる議論を以て政府の案を辯護し、次でカーゾン卿は急霰の如き拍手に迎へられて壇に上り、盛に豫算を攻擊し、下院專制の弊害を痛論し、關稅改革の急務を唱道し、更にクローマー卿が豫算案否決の結果、憲法上の爭鬪を起し、爲めに英國民が國防問題を忘るゝ恐あるを以て、豫算案に反對するを欲せずとの意見を懷くを誤謬なりとなし、又曩にローズベリー卿が豫算案反對の意見を發表し、國民に大なる刺激を與へながら、兎角に其終末の奮はざるを難じ、最後に上院の權能を限定するは、一箇の革命を意味するものなるにより、飽くまで之に反對し、將來の總選擧に於て大に勇戰して事實上の勝利を得ざるべからずと聲明せり。最後にクルー卿立ちてアスクィス內閣の爲めに有力なる辯護を試み、上院が求めて下院と衝突せんことを計るは、大なる誤謬なりと云へり。討論は玆に終結となり、ランスダウン卿の動議、即ち上院は豫算案が國民の裁斷を得るまで之に同意することゝ正當にあらずとの案には三百五十の贊成あり、反對者は僅々七十五のみにして、結局二百七十五の差を以て在野保守黨の勝利となれり。固よりこれ慧敏なるアスクィスの豫て覺悟せざる所にはあらざりき。玆に於て彼は一九〇九年十二月二日の下院に臨み、甚しく上院の態度の頑强なるを責め、議會の解散は已に十二月一日を以て皇上の御裁可を得たる旨を宣言し、下院は上院の議決に對する抗議を表明せる決議案を百三十四對三百四十九の多數を以て可決せり。この時下院に於ける政府黨の喝采暫しは鳴りも止まざりき。

一一　上院改革問題

アスクィス內閣の豫算案、はその社會主義的臭味を有すとの理由を以て、一九〇九

年十一月三十日、遂に上院の否決する所となれり。上院が下院の通過したる豫算案を否決するは、實に英國の議會史上始めての事にして、局外中立の地位にありて嘗つて豫算案に反對したるローズベリー卿も上院の否決を非とし、又統一黨側に於てさへ、斯かる前例なき事をなすには反對する者ありたり。然るにランスダウン及びクローマーの二卿が斷然此豫算案を排擊し、ランスダウン卿の動議即ち「上院は豫算案が國民の裁斷を得るまで之に同意する事正當にあらず」との案は、上院に於の大多數を以て可決され、豫算案は事實上に於て否決する所となりき。これアスクィス内閣に取りては、生死に關する一大打擊なり。されどアスクィスは一難を加ふる毎に愈〻勇氣を增し、反對黨をして其主張する所に屈服せしめずんば止まざらんとす。茲に於てか彼は猛然として立ち、嘗つて上院に對して隱に示威的の言をなしたるが如く、グラッドストーン以來の宿題たる上院の權限縮小を斷行せんと決心せり。斯くて彼はアルバートホールに開かれたる自由黨大會に臨み、政府黨を代表して上院の改革を唱へ、自由黨の爲めに萬丈の氣焰を吐けり。其要旨に曰く、「王の經費を要求し、下院之を許認し、上院之に同意を與ふるは、古

來我英國憲法の不文律なり、下院の一旦可決したる豫算案に對して、上院は之を廢止變更すること能はず。而して最近五十年間即ちグラッドストーン内閣以來、この不文の法則は愈〻顯著となれり。斯くも理義の明白なるに拘らず、敢て此法則を破棄せんとする上院は暴も亦甚だし。若し我自由黨にして將來の總選擧に勝利を博せば、上院を改造して出來得るだけ其權限を縮小し、從來の財政計畫を遂行するは勿論、愛蘭自治法案をも提出せざるべからず」と。蓋し自由黨は年來愛蘭國民黨と提携したる關係あるに依り、信義を重んじて愛蘭自治法案の爲めに盡粹するの責任あるなり。統一黨の領袖バルフォーアは其後アスクィスの宣言に對して痛論して曰く、「政府黨の上院に對する攻擊は、かの希臘と同樣の一院制度を施行せんとする自由黨政府多年の陰謀が、今や其極點に達し來れるなり。彼等は貴族のみならず、人民とも離れて我意を張らんとす。我國に於ける諸問題の解決は、統一黨が政權を握り、關稅の改革を實行したる後にあるべきなり」と。

斯くの如くにして、議會解散後の朝野兩黨は、直ちに總選擧に對する活動に着手したり。而して政府黨にありては、上院の豫算案否決は明かに英國憲法を無視す

る者となし、上院を改造し其權限を縮小するの急務なるを叫び、且つ統一黨の保護貿易主義は食料品を騰貴せしめ、國民生活を壓迫するものなりとせり。又統一黨にありては一方に於て上院の豫算案否決は萬止むを得ざるに出でたるを辯護し、政府黨の上院改革を主張するは二院制を變じて一院制となすものなりと難じ、又英國の海外貿易が獨逸、米國其他保護貿易國に依りて蹂躙されつゝあるは、これ自由貿易主義を執れるの結果なりとし、關稅改革の必要なることを主張せり。要するに兩黨の爭點は、第一は上院改革問題にして第二は關稅問題なり。されば總選擧の結果にして若し統一黨の勝利に歸せんか、自由黨內閣は直ちに總辭職をなし、統一黨は之に代りて政權を握り、關稅改革をなして保護貿易主義の實行に努むべし。又政府黨即ち自由黨が依然として下院に多數を得んか、上院は遂に下院に對し讓步するの止むなきに至るべく、若し飽くまで下院に讓步せざらんか、首相は或は王に請ひて上院に多數の新貴族を作り、以て其素志を貫徹するか、或は潔く內閣を辭して統一黨に明渡すに至るべし。然りと雖、下院にして舊の如く多數を占むるに於ては、統一黨は縱令內閣を組織すとも何等施すの術なかるべきなり。故に總選擧の結果如何は頗る重大なる結果を生ずるに至るべきを以て、朝野兩黨は互に鎬を削りて選擧場裡に奮戰せり。アスクィスも亦自ら各選擧區を巡りて大活動をなしたるが、彼の胸中には既に歷々たる勝算あるが如くなりき。

兩黨の最も激烈なる競爭は殆ど九旬に涉り、一九一〇年二月を以て終結し、統一黨は前回の選擧の結果よりも稍〻好く二百七十三名、自由黨は統一黨より一名多く即ち二百七十四名、其他に勞働黨四十一名、愛蘭黨は八十二名にして、勞働黨と愛蘭黨との向背は、朝野兩黨の運命を左右するを得べし。されど此二小黨は從來の關係に依り自由黨と結べるを以て、政府黨の聯合軍は合計四百餘名にして、優に統一黨を凌駕する事を得たり。

首相アスクィスは愛蘭黨及び勞働黨の操縱に尠からず苦心せり。愛蘭黨の領袖レッドモンドは、此機に乘じて自治法案を決行すべしとなし、先づ第一の手段として上院改革を政府黨に迫り、又勞働黨は上院の財政案否決權を奪ふのみならず、有害にして無用の長物たる上院は寧ろ全廢すべしと唱へ、領袖ジョン・バーンスは此

問題を提げて首相に肉薄せり。大藏大臣ロイド・ジョージはこの時愛蘭黨の一領袖オブライエンと衝突したりしが、調停する者ありて緩和するを得たり。アスクィスは是より愈上院改革問題を提げて議會に臨むに決し、又愛蘭黨の要求の一部をも承認したりき。新に開かれたる議會に於て、下院の重なる議事は三月二十九日より開始せられしが、アスクィスは一場の演說をなして「本院は上下兩院間の關係及び議會の任期問題を討議せんが爲めに直ちに委員會に移るべし」との動議を提出し、更に上院問題に言及して曰く「上院が下院の可決したる議案に對し、修正又は否決するの權力は、法律を以て制限すべしとの決議を宣言せしより、未だ三箇年を出でず、然れども此否決權制限の理義は明確となり盒、其必要を示すに至れり。而して昨年十一月上院が下院を通過したる豫算案を否決せるは、實に我英國議會史上に初めての事にして、その結果國民の裁斷に訴へんが爲め總選擧の擧行となれり。固より總選擧の主要問題は世襲的上院の改革にありしが、國民は我黨の方針に對して滿足の意を表し、選擧の結果は大多數を得たり」と。而して政府が下院に提出せる上院改革決議案は左の三項より成れり。

一、上院が豫算案を修正し若くは否決するを法律に依つて制限するは便利なり。されど上院に對し斯くの如き法律を設くる事は現に上院の享有せる權利及び特權を減少し若くは制限するものにあらず。

若し下院議長の意見に依つて此決議案の目的が下に掲ぐる事項の一部又は全體に關聯する規定を有する時は、此議案は豫算と見做さるべし。即ち課稅、課稅廢止、課稅免除及び其變更、若しくは課稅に關する制裁、國債基金の整理及び議會に依つて行ふ貨幣の規定、其供給、公金の用途支配及び制裁、起債若くは其保證、償還及び此等に關聯せる問題是なり。

二、財政案以外の議案に關する上院の權能を法律に依つて制限するは便利なり。而して連續せる三回の議會毎に下院を通過せし議案にして、議會閉會前少くとも一箇月以前に上院に廻送せられたるものは、縱令上院が三回共に之を否決するとも王の裁可を得る時は法律となるべし。但し初め議案を下院に提出したる時より、三回下院が之を通過せしむるまでには二箇年を經過する事を要す。

三、上院議員の任期を五箇年に制限する事は便利なり。

是より先、上院に於て中立の地位にあるローズベリー卿は、三月十四日を以て上院改革に關する温健なる意見を吐露せり。この日の上院は近來稀に見る盛況を呈し、皇太子殿下は早くより賁臨せられ、貴夫人席の如きは太子妃を始めとして殆ど空席なきまでに埋められたり。ローズベリー卿は、曾く皇太子殿下の次席に着きしが、漸くにして反對黨の喝采に迎へられつゝ席を離れて壇上に立てり。卿は先づ國家の安全及び國會の權衡上よりして强固にして有力なる第二院を必要とし、之が爲めには現在の上院を改革するに依つて最も好く其目的を達し得べしと論じ、更に歩を進めて「今日の上院は、第一に有力なる團體としては餘りに多數に過ぐ。第二に上院の代表する所は餘りに一部の階級に偏したり。第三に現在我憲法の基礎たる世襲の原則は既に國民多數の非難高まれり。故に上院の改革は焦眉の急務なるを以て、縱令如何なる困難ありと雖、之を排除して斷行せざるべからず。今や吾等は上院を改良して一層善良にして、一層民主的なるものたらしむるを得べく、又政府黨の提案の如く、全く權力を剝奪し縮少して單に其形

骸のみを存せしむる事を得べし。然れども政府の提案の如きは、事實上に於て我英國をして一院制の下に立たしめ、憲法の根柢を轉覆し、人民の制度に對する信仰を破壞せんとするものにして、吾等は此戰慄すべき改革に向つて絶對に反對せざるべからず。されば上院は漸く不評判となりつゝある特權と衰微しつゝある權力とを固守せず。適當に平穩に之を維持するの方法を講ずべきなり。最早上院の世襲的特權を拋棄すべき機は愈熟せり。上院議員を選擧に依りて選出する例は既に他國に於ても行はれ居る所なり。かの佛蘭西革命は貴族の特權を拋棄する事の餘りに晩かりしを吾等に敎ふるにあらずや、古來何れの國家に於ても、大災難の歷史には必ず「晩かりき」の語が特筆さるゝを見る。吾等が今日に於て何をなすべきかは既に瞭々として明白なるの事實なり」と。卿の誠を籠めたる演說は、世襲の議席を固守せる全院の議員を警醒し、多大の感激を與へたりき。

前年度の豫算案は再び下院に提出せられ、下院は前議會に於けると同じく、四月二十七日を以て統一黨の二百三十一、對政府黨の三百二十四、即ち九十三票の差にて容易に通過したり。而して即日上院に廻送せられしが、該豫算案は前議會に

於て國民の裁斷を待つの目的にて一たび否決せられしものなれば、既に總選擧を經て政府の方針が國民の承認する所となりし今日、又一言の之に挿むべき餘地なくして其翌日一瀉千里の勢にて同院を通過し、政府は王の裁可を仰ぎて直ちに之を公布したり。蓋し嘗つて朝野兩黨の間に未曾有の葛藤を生せしめたる同案が、今や總選擧の結果に鑑みて、何等の澁滯もなく兩院を通過するに至りたるは、流石に立憲政治の母國たるに恥ぢずと云ふべし。

然れども朝野兩黨が、その紛爭の眼目となしたるものは、以上の事實を以て一段落を告げたるにあらず豫てアスクィス内閣は、上院問題に關して四月十二日閣議を開き、閣僚の間に激烈なる議論ありき。次でアスクィスは下院に臨みて其抱負を述べ、若し上院が飽くまで上院否決の制限を拒む時は、王に謁して該案を法律たらしむるに必要なる方法を採らん事を請ひ、若し聽かれざれば辭表を捧呈するか、若くは議會が輿論、政府の所見を是とせば、法律たるべきの保障を得て、議會解散を奏請すべしと言明せり。政府黨は此方針に對し喝采を以て迎へたりと雖、中立の態度を持する者にありては、政府は愛蘭黨の利用する所となり、深淵の崖頭

に向つて進みつゝある者なりと嗤ひ、又上院の改革が餘りに突飛なるを憂ふる者なきにあらず。今將に國を擧げて本問題の論爭に入らんとするに至り、五月六日偶、先帝エドワード七世陛下崩御の大喪に會せり。是に於て一箇月間政務を廢止し、六月六日アスクィス首相參内して新帝ジョージ五世陛下に對し備に政務を奏聞せり。先帝エドワード七世陛下も崩御の前に於ては深く政界の狀勢に憂慮せられしが、新帝も亦登極の初に當り大に悒念せられ、且つ輿論も暫く政爭休止を望みしを以て、ジョージ五世陛下は朝野兩黨の間に周旋せられ、上院問題に關して協議會を開くことゝなれり。この協議會たるや、我國の首相が政友會總裁と密に私邸に會合し、隱約の間に妥協を遂ぐるとは大に異るものありと雖、政府黨の領袖と在野黨の領袖とが協議會を開き、以て或る條件を以て妥協を試みんとするが如きは、英國の議會史上久しく見ざる所の現象なりとす。第一回の會合は六月十七日下院首相室に開かれ、政府黨側よりは首相アスクィス、大藏大臣ロイド・ジョージ、愛蘭事務大臣バーレル、上院々内總理クリュー卿の四人、在野黨よりは上院々内總理ランスダウン卿、下院々内總理バルフォーア、前大藏大臣小チャンバレーン、前海

軍大臣カウダー卿の四人出席し、又其後數回の會合ありて種々意見の交換をなしたるも纏りたる所なく、八月上旬に至り議會と共に休會となれり。十一月に及んで再開し、又數次の會合をなしたるも、遂に圓滿なる結果を得る能はず、十一月八日アスクィス即ち參内して協議不成立の旨を上奏し、越えて同月十日、不成立となりし事を公表せり。會談の内容に至つては、堅く秘密に附せられたるを以て詳かに知るべからずと雖、政府黨の提案が困難なる要求を含みたるは推察するに難からず。或は政府黨にては、上院改革問題に於て豫算案否決權を奪ふに止め、一般法律案の否決權制限に及ばず、又之と共にアスクィスは愛蘭黨の爲めに自治法案の實行を主張したりしが、在野黨にては上院問題にては右の提案に讓歩すべきも、自治法案に就てはレフェレンダム(國民投票とて全國々民の總投票に依り可否を決すること)に依りて決定すべしと主張せりとも云へり。結局に於て兩黨の上院權限問題に關する協議會は、遂に妥協不成立に終りたるを以て、アスクィス内閣は再び總選擧を行ひて國民の解答を求めんとし、一九一〇年十一月二十八日を以て斷然議會を解散するに至れり。

蓋しアスクィス内閣が、斯くも早天の霹靂の如く、急遽議會を解散したる所以のものは、統一黨内に關稅改革、及び聯邦自治問題に就て内紛ありしに因る。統一黨は年來海外貿易發展を期し、關稅改革を主張しつゝありと雖、黨内には關稅改革を排して自由貿易論を唱ふる者あり。又昨年に至り、關稅改革に連關して聯邦自治制論を唱へ、之と同時に愛蘭黨の甘心を得んとする者あり、是に於て、統一黨内の自由貿易論者セシル卿の如きは、急先鋒となりて之に反對し、カーゾン卿、ロング其他の諸名士も反對し、從來の關稅改革に就ての内紛の外、聯邦自治に關しても多くの不平連を出だせり。されば政府黨は、此機に乘じて總選擧を行ふの利なるを思ひ、俄に王の許可を得て議會を解散したるなり。反對黨にては、今回の解散を以て「自由黨政府が信用失墜し意氣沮喪したる結果の輕擧妄動にして、國民をして正當の審議を竭さしめず、一院制度の贊成を强奪せんとする不正手段なり」との非難を發する者もありき。

斯くて十二月三日以後、全國に亙りて總選擧は開始され、政府黨側にありては上院改革を標榜して統一黨の關稅改革を攻擊し、統一黨側にありては關稅改革を

標榜すると共に、政府黨が上院改革を主張するの背後には、愛蘭自治法案と社會主義法案とあるを攻擊せり。思ふに今回の政爭は、政府黨にありては愛蘭問題を主眼とせりと雖、選擧民の反感を恐れて陽はに標榜し得ざるものゝ如し。然れどもアスクィスは飽くまで必勝を期して奮鬪し、選擧の結果は自由黨保守黨雙方ともに前回の場合と異らず、而して自由黨は愛蘭黨及び勞働黨と結べるを以て、下院に於ては依然として多數を占むるを得べし。然れども統一黨の多數を占むる所の上院は尙同じく依然たり。アスクィス內閣の運命に就ては、悲觀樂觀各〻人に依りて異り、英國政界の將來は得て豫斷すべからず。さるにても峻敏英邁なる首相アスクィスは上院改革、愛蘭自治の二大問題に對して奈何なる策に出でんとはする、吾人は刮目して其なす所を見んとす。

其二　帝國主義者

第三章　セシル・ローズ

附クリューゲル

十九世紀の末葉に至りて世は國民主義の時代より一轉して帝國主義の時代に移りぬ。實にや國民主義の何たるを知らずして、十九世紀の歷史を明かにする事能はざるが如く、吾人は帝國主義を沒却して十九世紀の終末より二十世紀に掛けての政治外交史を了解する事能はざるべし。帝國主義は實に現代史の中心思想なり。偉大なる帝國主義者は即ち現代史の舞臺を飾る立役者たるべきなり。而して我セシル・ローズに至つては當に其雄中の雄なるもの、吾人が數多き政治的大人格中に彼が名を錄し、玆に暫らく其廣大なる偉業を傳へんと欲するもの豈に其所以なしとせんや。

セシル・ローズそも何人ぞ、棺を蓋うて其名未だ定まらざるなり。甲は即ち曰く、彼や眞に大帝國の建設者なりと。而して乙は曰ふ、彼はこれ人道の蹂躪者と。吾人甲

の云ふ所必ずしも溢美の言にあらざるを知る。乙の言亦無法なる罵倒、根據なき讒謗のみにあらざるべし。生きては愛憎好惡の對象たり、死しては毀譽褒貶の中心たり、彼セシル・ローズ亦一代の偉人なる哉、彼一度南亞の地に逝きて以來、彼が殘したる大なる空隙は未だ何人の手によりても滿たさるゝ能はざるなり。而してローズが宏業の跡を語る南亞政爭史に於て徹頭徹尾ローズが敵役を勤めたるものを杜國大統領クリューゲル(S.J. Paul Krugel)となす、二人は初めより民族を異にし、理想を異にし、政策を異にして相爭ひ相競ひぬ。彼クリューゲル遂に敗れたりと雖、其聲名また沒すべからず。吾人は此處にローズ傳を述べんとするに當り、ローズが腹心ジェームソン・ラッドの徒に注目せざるべからざると等しく、好敵手クリューゲルが腐心の跡にも充分の觀察を下さゞるべからざるなり。

一　ローズの家系並に幼時

セシル・ジョン・ローズ(Ceeil Jhon Rhodes)は一八五三年七月五日英蘭のハートフォードシャイアに生れたり。父は牧師なりしと雖、ローズは常に其農家出身なるを稱しぬ。蓋

し彼が父祖は既に十八世紀の初葉よりして農家及牧畜家として知られたればなり。同世紀の中半に當り、彼が曾祖父サムエル・ローズ多大の資產を得てドールストン地方の大地主となり、祖父ウィリアム・ローズの代には更にエセックスに多くの地を加へ、相繼で彼が父フランシス・ウィリアム・ローズに至れり。而して父は其身を教界に投じてストートフォードの寺領を管しつゝありき。彼に十一の子女あり、我セシル・ジョンは實に其第五男に當れり。八歲の時よりストートフォード寺領の小學校に學ぶ。父の宿意は此兒をして職に就かしめんとするに存せし者の如かりき。資性温良にして在學の間深く師友の鍾愛する所たりしと雖、時として剛腹不屈、頑として人に下るを欲せざる事あり。彼が師の詰責の不當を憤つて机上の書を其面上に投ぜんとしたる逸話は即ち彼が性質の一方面を語るものなり。此校に於て彼が最も得意として知られたるは、宗教、佛蘭西語、及古代文學なりしが如し。而して又好んで地理と歷史を學びぬ。彼算數の學は寧ろ其嗜好の學に非ず、從つて又其長ずる所にもあらざりしと云ふ。

身體の虛弱なるにも拘らず、堅忍不拔書に親んで倦む事を知らざりしが、體力勉

學に堪へず、十六歳の時一度學を廢して家に歸れり。

斯くて家庭の人となりて僅に父の薫陶を受くる事暫時、幾何もなくして彼はオックスフォードの學舍に入りぬ。而して其學ばんと欲したりしは政治經濟の學にあらずして父と等しく身を教界に投ぜんが爲めの準備を爲さんが爲めなりき。今にして思ふ、天帝此兒に與ふるに頑健强壯の質を以てしたらんには、大英國或は宗教界に一明星を得たりしや知るべからずとするも、彼南亞の天地を風靡せし一偉才、時代思潮の權化たる一大帝國主義者は永へに世に顯はるゝ事なくして了るべかりしを。

尪弱の身、過度の勉學は遂に彼をして肺を病ましめぬ。即ち彼は去つて南亞ナタールにある家兄ハーヴァードの後を追ひ、彼地に於て身體の回復を謀ることゝなれり、これ一八七〇年六月二十一日の事なり。誰か知らむや、後年此病弱兒の手、能く南亞の天下を左右するに至らんとは。「大業は病弱者によつて成さる」とは誰が云ひ初めけん、吾人は彼にとりて苦痛たるべき肺患の慶すべきか將悲むべきかを知らざるなり。實にや驚天動地の偉業は病弱者の手によつて成されたり。吾人

は更に彼が腹心ラッドの境遇の全く之と相等しきを見て、益〻思ひの半ばに過ぐるを覺ゆるなり。

ローズ天涯の孤客として大洋の波に泛ぶこと十週日、九月一日を以て南亞ナタール植民地ターバンの港に達しぬ、これローズの足南亞の地を踏むの始めにして彼は家兄ハーヴァード耕地に赴きて綿作の業に從ふ事となれり。

然るに恰も此時有名なるキムバレーの金剛石鑛區發見せられ、人の狂奔して利に趨るもの漸く多し。ハーヴァード亦金剛石狂奔者の一人なり。乃ちナタールの耕地を捨てゝキムバレーに入る。セシルは暫らく兄の故地を守りて單身綿作を繼續したりしが、幾何もなくして兄の後を追ひ、キムバレーに無盡の遺利を探らんと欲せり。

彼等が最初の經營は當時の法律に制限されて規模頗る大ならず、利潤亦決して多しと云ふべからざりしも、月に從ひ年と共に其業益〻進み、彼等が富も亦漸く增大せり、而してセシルは尙フットボールに餘念もなかるべき少年の身なりしなり。富にも勝りてセシルが喜びとなりしは南亞乾燥の氣候よく彼が宿痾を癒する

を得たりし事是にして、當年の病弱兒が前途漸くにして光明赫々たらんとす。

二　南亞の形勢

ローツが南亞の天地に於ける驚天動地の大業を語るに先ち、簡單に南亞當時の形勢に就き述べ置くは必ずしも蛇足にあらざるべし。

一四八六年葡人バルトロメウ・ディアスは亞非利加南端の岬を發見したりしと雖、爾後約二百星霜の間は、此處は唯印度に赴くに就き好望の岬として航海者に知られたるに止まり、敢て上陸して殖民開拓を試むるものあらざりき。ケープ植民地々方の經營は實にオランダ人の手に始まれり。これ十七世紀の中半にして一六五二年ヴァン・ルーベーク移民を引率してケープタウンの地に上陸したるを其權輿とす。斯くて移民の數漸く增加し、南亞數箇所に新なる植民地を開きぬ。而して彼等は悉く之農民なり。農業牧畜に好適の地方にありて熱心に其業に從へり。彼等は獨立不羈の地方にあるが故に、本國人よりも不拔の自尊心を養ひ得たりき。此れ等蘭人の子孫が世に云ふボア人なり。ボアとは農民の義にして彼れ等自ら

は稱してアフリカンデルと云ひぬ。

然るに一七九五年英蘭攻守同盟を結ぶや英國は和蘭植民地保護の爲めケープ地方に守備兵を出しぬ。これ一は英國自身の印度經營に爲めにせんとするなり、而して一八〇七年ナポレオン一世の手によりて此同盟の破棄せらるゝに及び、英國は直ちに容赦なく此地方を占領し終れり。平和回復の後に至りては更に正式に英國の植民地として編入せられぬ。將來アングロサクソンが南亞の覇主たるの源泉實に又玆に始まる。

ボア人と英人との間には氷炭相容れざるの反對あり。彼等は已に民族を異にするが上に更に職業を同ふせざるなり。ボア人が其名の如く主として農民たるに反し、英人の植民は重に官吏、軍人及び商人によつて成る。されば英國のアフリカ經營漸く盛んなるに及んでボア人の心決して平かならず。敢爲の徒は擧つてケープの故地を去り新たに彼れ等が安息の國を求めぬ。此等のボア人は一方北に進んで內地に入り、一方東海岸に走つてナタールの地方に行けり。然るに英人は更に彼れ等の後を追及して次第に範圍を擴張するの政策をとりぬ。哀むべし、ボ

アは暫時も其居に安んずる事能はず、尙深く蠻地に分け入るの止むなきに至れり。斯くして彼等は辛くも其落附べき地を所謂ベチュアナランドの地方に見出しぬ。即ち農業牧畜の好適地なり。而して始め北行してオランエ河を越えたる一群はファール河、オランエ河中間の地に占居し、ナタールに向ひたる一群はナタールより內部に入りてファール河北方の地に達し蠻民と雜居して次第にリンポヽ河の岸にまで擴がれり。斯くて兩者共に國をなす。前者は即ちオランエ自由國、後者はトランスヴァール共和國にして十九世紀の中葉孰れも憲法の制定を了り、英國も亦其獨立を承認するに至りき。以上は南亞に於けるボア人建國の大要なり。

爾來半世紀を通じて起れる英國對ボア人政爭の歷史は吾人の興味を喚起せしむるもの頗る多し。然れども玆にローヅが活動を畫かんとする序幕として之を詳述せんは限りある頁の許す所にあらざるなり。故に吾人はその大部を割愛し、單に大勢の變遷と特筆すべき事項と並びにローヅが當の敵役クリューゲルが小傳を照介して再び本文に入らんとす。

英國がケープ地方占領の時代は素より其後半世紀餘の間は南亞の白人と云はば主として彼ボア人即ち蘭人の子孫なりき。而して彼等が經濟たるや農業と牧畜に從事するに過ぎざれば彼等は隣境の蠻人が侵害に具ふるの外寧ろ平和なる生活狀況にありしなり。然るに一八七〇年の頃南亞の歷史は將に新なる時期を劃しぬ。晴澄なる南亞の蒼空これより暗雲深からんとす。蓋しファール、オランエ兩河の流域地圖らずも金剛石鑛に富める事世に現はれ、天下之を喧傳して遺利を拾はんが爲めに趨るもの年と共に多々益〻多し。而して同じ白人にありてもボア人は文化の度遙に他に劣り、激甚にして大規模なる鑛山業並に商業に於て優秀の地步を占むること能はず。是に於て乎歐人、特に英人の壓迫漸く增大し、ボア人の不平亦之と共に加はらんとす。而して此事たるや啻に經濟上の變動たりしに止まらず、英國の政策上にも亦著しき變化を與へたりき。

かの帝國主義祖述者たる首相ディスレリー並に其商務大臣カルナーボンの高手政策は突如として南亞の天地に現はれ、一八七七年トランスヴァールは一度其獨立を失して英國に併せられぬ。而して英國政府當局者の理想はケープ植民地を中心として南亞大聯邦を作り、英國統治の下に置かんと欲するにありき。

此英國政府の政策に對しボア人の不快は素より云ふまでもなし。遠く歐洲各國の間にも頗る反抗の聲あり。加ふるに英國内に於て尙攻擊の矢を放つもの少なしとせず。斯て一八八〇年五月ビーコンスフィールド内閣倒れて次にグラッドストーン内閣立つに及び外交の方針茲に一變し、其植民政策は寧ろ極めて消極的なるを好みたりき。されば、ケープ植民地總督サー・バートル・フレールは女皇無二の寵臣たりしにも拘らず、彼が保持せし帝國主義的理想は新内閣の態度と一致する事能はず、遂に職を退かざるを得ざるの已むなきに至れり。

一方ボア人の狀況如何を察するに、トランスヴァール合併の事は、實に彼等にとりて切齒扼腕に價せるもの、彼等はこれを以て不法なる壓制なり、暴力を以て人道を蹂躙するものなりとなし、再び不羈の舊態に回復せんとの希望は、ボアの有志者が朝夕の祈りなりしなり。一八七九年十二月十日、ボア人の有志大會は開かれ、而して南亞共和國再興の事は決せられぬ。こゝに於て彼等が大統領として其手に統治の大權を委任せるものを誰とかなす、ステファヌス・ヨハネス・パウルス・クリューゲル其人なり。クリューゲルと共に國運回復の大業を其肩に荷負ひたるもの二

人あり、一は元帥ジューベルト、一は名士プレトリウス、三人相合して三頭政治の形をなせり。

斯くてボア人は、各方面に蜂起せるズールー、バスト、ポンド等の蠻人と氣脈を通じ、盛に英人を妨害するに努めつゝありしが、翌一八八〇年の暮、師走の十四日に至り遂に公然英人に反旗を翻し、彼等の軍隊はプレトリアを占領して、こゝより英國の守備隊を追ひ要害を嚴にして籠城の決心をなしぬ。其後兩軍の衝突するに當つて、杜國歩兵の精鋭よく英軍の膽を寒からしめ、決死のボア人は大抵優勢を占めつゝありき、是に於てか英國政府は斷然意を決し、アフガニスタン戰爭の凱旋將軍ロバーツに授くるに、一萬三千の兵を以てし、一舉にしてプレトリアを屠らんと企てたりき。然るに事夫れに及ばずして、既に一八八一年三月六日兩軍間に休戰の條約成立し、引續き平和條約の議進む。即ち、トランスヴァール共和國は充分なる内政の獨立を得て、英女皇の總指揮の下に立ち、女皇の代官のプレトリアに駐在するを承認すべし」てふ條件の下に、平和は漸く回復せられぬ。これ即ち一八八一年の英杜條約なりとす。

然れども此平和條約は、畢竟一時を彌縫する姑息の手段たるや明かなり。何となれば英人とボア人との間には、根本的に反對せる政治的理想の存すればなり。加ふるに同地方經濟の急激なる發達は、移住白人の數を激增せしめ、ボア人の政府と外來白人とが利害の衝突は、益〻南亞の風雲を暗憺たらしめたりき。而してボア人の無能なる、徒に事を好んで四隣の蠻人を征服するに汲々たるのみ。更に內國開發の道に出づるを知らず。滯留外人より莫大なる租稅を徵して其財政に資しぬ。ボア人は實に終局南亞の覇者たるに不適當なりしは、既に此時より明かなりしなり。而して此時機に於て英人は常にその跳梁を擅にすべき地位にありき。而も其對外政策動搖して確定せず、國內の輿論未だ植民地問題に熱中するに至らず。爰に於てか南亞に於けるアングロサクソン覇業を樹立するの功は、彼地にありて富と地位を得、偉大なる潛勢力を利用して猛然己が大抱負に突進する我セシル・ローズの出でゝ、南亞の舞臺に活躍すべき日を待ちたるの觀ありしなりき。

三　クリューゲルの經歷

南亞の風雲大凡前述の如し、乃ち筆を同じて再びローズが大業の記述に歸らんと欲す。唯暫らく此機會を利用して、怪傑クリューゲルが南亞政爭の舞臺に出顯するに至りし經歷につき、數言を試みんとするは、一は更にローズが活動の遠景を精細にし、一はローズに附加してクリューゲルの小傳をも照介せんと欲する、當初の目的に協はしめんとするなり。

ステファヌス・ヨハネス・パウルス・クリューゲルは一八二五年十月十日、ケープ植民地コレスベルグに生る、實にローズに長ずること二十八歲なり。其家系もと獨逸人の血を傳ふ。一七一三年和蘭東印度商社に屬して、ケープに來りしヤコブ・クリューゲルなるもの、實に南亞に於けるクリューゲル家の祖なり、十九世紀の前半期即ち一八三五年より四〇年にかけて、ボア人の北方移轉ありし事は已に之れを云ひぬ、クリューゲル家も亦其群中にあり。これ我パウルス・クリューゲルが齡漸く弱冠を越えたる頃の事にして、父祖數世墳墓の地たるケープを去つて煙燼雨の間を過ぎ、オランエ河の北方に新しき故鄉を見出せるなり。

斯くの如く彼が生涯は、其少年時代より一の冒險譚にも比すべきものなりき、文

明と野蠻とが相隣する境界の地に人となり、移住、戰鬪、狩獵に餘日なかりし彼は、素より高尚なる敎育の恩惠に浴する能はず、辛うじて讀書習字の一般を學び得たるのみ。而してかの蠻地に於て靜夜人無き境涯に、彼れが心魂の慰安となり、奮勵となりたるものは、實に一卷のバイブル是なりき、就中舊約の物語は最も彼の愛好する所なりしが、これ彼をして恰も彼等の父祖即ち最初の植民者が懷きたりしが如き「我は天祐を受け、神命を帶びたる者なり」てふ確信を深く腦裡に刻せしむるに至りし所以なり。彼が二十五歲の時なりと傳ふ、一日彼は突然其姿をかくしぬ、而して彼は其時一人野にありき。止まる事數日漂然として家に歸りし彼は嚴乎として人に告げて曰く「我野にあるや神常に我傍らに御座し、我を勵まし給へり、斯くて我は特別の使命を天より受けたり」と。此確信は實に彼が生涯の活動を支配したりしもの、而して又彼の勢力感化をして、何となく深刻ならしめたる基なりしなり。當時トランスヴァールに於けるオランダ新敎會は三つの敎派に分れたりき。而して其最も嚴格にして淸敎徒的なりしものをドッペル派となす。グリュートゲルが屬したりしもの即ち是なり。此排他的宗敎思想が、後年更に一轉して極めて峻烈なる彼が、政治的排外主義をつくるに至りしこと亦決して怪しむに足らず。「迷信的狂想其理性の上に君臨す」と云ふ事は、實に彼が性格を了解せんとする秘訣の存する所、大否にして云へば彼が生涯の說明は即ち之に外ならざるなり、神命を信ずること斯くの如く篤く、人智を輕視すること斯くの如く盛なれば、自ら其志す所に對して全身全力を盡すの勇猛は生ずべし、旨目的狂熱斯くの如きに對照して、理論の價値は、恐らく一片の塵埃にだも如かざるなり。

彼十七歲にして軍隊に入り一下級士官たり。二十七歲の時には早くも蠻人征討軍の指令官として威名漸く人に知らるゝに至りぬ。トランスヴァール共和國は一八五二年獨立を完成せしより、大凡二十年、內亂陰謀相繼いで殆ど無政府の狀態にありき。而してクリューゲルは、かのプレトリウスの黨に屬して新政府設立を陰謀する一人となりぬ、彼が政治的生涯は大凡此時に始まる。一八五七年の頃彼はプレトリウスと謀つて遠交近攻の策を立て、バストーの土民を使嗾して叛亂を起さしめ、其擾亂に乘じて隣國オランエ自由國を奪取せん事を企つ。不幸にして遠征軍は却つて自國內の反抗を釀し、遂に其志を全うするに至るを得ざりしが、

クリューゲルが政治的地歩之と共に一層高まり、又かのプレトリウスとの親交をして、水魚管鮑も啻ならざらしむるの大なる基をなしぬ。斯くて一八六四年プレトリウスの大統領に選擧せらるゝや、クリューゲルは一躍して元帥の地位に上り、三軍を支配して其傍らに立つ事となれり。然るに一八七一年彼等が英國と結びたる境界條約は彼等が政敵に口實を與へ、又一般國民の輿望を失し、遂に政府の瓦解となりぬ。而して後の大統領ブルゲル在職中は彼等にとりて最も得意ならざりし時なりき、此時に當つてクリューゲルは實に現政府反對黨の黒幕として立ち、常にプレトリウス等と相結んで、ブルゲルの政府を顚覆せしめんと圖りつゝありしが、彼が熱誠の篤き衆望自から彼に歸し、ブルゲルに代る大統領として重きを加ふる事月に日に大なり。

飜つて他を顧みよ、恰もこれロトヅが始めてナタールの野に耕し、キムバレーの鑛區に金剛石を求めたるの時なり。而してローヅが刻苦勉勵漸くにして巨萬の財を積み、一歩進んでケープ政界の一角に立ちたると殆ど同時に、クリューゲルは其政治的地盤益〻固まり、遂に國望を負うて大統領の地位に上れり。而して更に又

ローヅが頭腦中に南亞の群小を合して一團となし、英女皇統治の下に置かしめんとする理想の漸く明かになり、鋭氣滿々たる彼が其一生を捧げて以て此大業を完うせんとなしつゝありしと同時に、彼クリューゲルの迷信的狂想は更に擴大し、南亞は蘭人の子即ちアフリカンデルの世界たらざるべからず、飽くまでも他の民族を排斥し、以て利益を盡くアフリカンデルの獨專する所たらしめざるべからずてふ空想に支配せらるゝ事益〻深く、恰も一八七七年英人の手一度杜國の獨立を蹂躙するや、鬱勃たる國民不平の權化として遂にボア人を率ゐ、奮然として平素の理想を貫かんと試みつゝありしなり。斯くの如くにして不倶戴天の仇敵たる兩怪傑は、遂に南亞の天地に相見ゆるに至れり。兩雄が今後如何に活動し、如何にして勝ち、如何にして敗れたるかは吾人更に章を改めて說かんとす。

四　ローヅの功業　其一

前二章に於てローヅが活動舞臺面の遠景近景を畫きたる吾人は、こゝに再び本文に立歸り、主人公ローヅが功業の一般につき筆を染めんとす。既に第一章の終

りに於て讀者の知れるが如く、病弱學に堪へざるの故を以て父母の膝下を辭し、漂然として南亞の天地に、兄ハーヴァードに身を寄せたりし少年ローズは、隅らずも荒漠たる蠻地に巨萬の遺利を拾ふの身となり、加ふるに年來の宿痾漸く癒えて再び活動に堪ふるの健康を得たりき。

是に於て彼は更に修學の境涯に入りて平素の知識欲を充たさんと欲するの意あり。兼て懇切なる父の招き急なるにより、遂に一八七三年再びオックスフォードに歸つてオリール大學の學舍に投じぬ。而かも本國の風土其身に適はず幾許ならずして、再び筆硯を投じて南亞の鑛區に歸れり。斯て南亞の温暖高燥なる空氣は更に又ローズが危篤の病を救ひたり。彼が修學の念復た自から欝勃たらざるを得ず。乃ち爾後數年春夏温暖の好期をオックスフォードの學窓に送り、冬期寒冷なるに及べば必ず遠く南亞の風土に親しむを常としたりき。斯くの如くにして遂に一八八一年に至り定規の試驗を經て學士の稱を得たり。而も此時に於て彼が採鑛の業は益〻發展し、已に南亞に於ける金滿家の錚々たるものたるのみならず、一歩進んではケープ議會の一角に立ち新進氣鋭の政治家として儕輩の注目を惹きつゝありしなり。

抑〻ローズが南亞に於けるアングロサクソン覇業の大野心を起すに至りしは、果して何時に始まる乎。これ素より明かに知るべからずと雖、茲に注目すべきは彼が最初健康回復後、故國の學窓に歸るに先つて試みたりし八箇月の旅行なりとす。即ち彼は一日十五哩乃至二十哩の行程を以て牛車に鞭ち、單身オランエ、フォール兩河以北の蠻地を探りぬ。これ當時に於ては未だ頗る不明の地方なりしなり。而して空しく放棄せられたる豐饒の美國を見、主なくして地下に埋伏せる無盡藏の鑛脈を知り得たる彼が心中、焉んぞよく勃々たる野心の發動を見ずして止まんや。此處を去る事二歳の後、彼が一友に寄せし書に曰く、「吾人は英吉利民族が空前の優等民族たるを知つて滿足の情に堪へず」と、ローズ時に齢二十有二なり。ローズ嘗つて將軍ゴルドンに語れる事あり、曰く、「如何なる大希望も資財の伴ふ事なくんば蓋し徒勞たるのみ」と。彼が南亞の山河に就きて畫きたるものは、決して空中の樓閣にあらざりき。彼は先づ巨萬の富を積むを以て第一の要件とした り。而して後政治的運動に從事せんとするなり。彼がオックスフォード在學中、南亞の

鑛區は法律の改正によりて大に擴大せられ、其事業は又隆々として日の出の勢となりぬ。彼は兄ハーヴァードが北方探檢に去りたるに依つて、一時其伴侶を失ひたりしと雖、幾許もなくしてかのラッド、ジェームソン等の親友を得たりき、此二人の如き實に長く彼が事業を助けたるものなり。

一八八〇年は實にローズが政界に入りし始めにして、翌一八八一年は彼がケープ議會の演壇に立ちて其處女演說を試みたる年なりとす。ローズが選出されし選擧區をバークレー・ウエストと云ふ、キムバレーに近き地方にして、彼が終生代表したる根據地なり。而して一八八一年は實に英軍マジュバ丘大敗の歲にして、トランスヴァールに於ては怪傑クリューゲル、大統領ブルゲルを蹴墮して自ら其位地に代り、將に戰勝の光榮に醉ひ、英國政策の軟弱に乘じ、鋭意平生の大幻想を現實ならしめんと務めつゝありし歲なり。ローズが初舞臺に試みたる演說は、バストーランド問題に關してなりき。即ちケープ政府の對バストー土人策其宜を失し、彼等が勇敢なる反亂に多大の軍費を投じて而も失敗に了りし事件に就き、根本的に施政方針の不當を鳴らし、宜しくバストーランドを擧げて本國政府の管轄に

委すべきを痛論したるものなり。其論理頗る明確、語氣温健實着、以て彼が決して世間に想像せらるゝが如き妄想的帝國主義者たらざるを證して餘りあり。

バストーの亂平定に及ぶや、ローズはケープ政府の一委員としてバストーランドの地に赴く、此行は彼が政治的事業に關して左程に重大なるものにあらざりしと雖、茲に彼が生涯に於て忘るべからざるもの一ありき。即ち有名なるゴルドン將軍と初對面の機を得たる事なり。抑、此二人が性行、主義の點より見れば決して同型の人物なりと云ふべからず、而も兩者の意氣不思議にも相投合するを得て、宛然十年の知友と等しき欵情を生じたりき。蓋し兩雄共に敢爲敢行の士にして、自主自信の念泰山の如く重く、鋼鐵の如く强きは、自から相互敬愛の情を誘起せしむるに至りしか。之に次いで起りしものをベチュアナランド問題とす、抑、此問題はローズが帝國主義的事業の最初にして、其結果の後に影響するもの實に大なり。而して此事たる殆ど一人が、苦心經營の末に成れりと云ふも敢て不可なきもの、蓋し彼が傳記に特筆大書して永く其功業を留むべきものなり。事件は蘭人の所謂ステツラランドの宗主權問題より起れり、これ一八八二年の事に

屬す、ステッラランドはベチュアナランドの一部にして、キムバレーの北にあり、ローズの眼より見れば、將に北方に伸びんとする英人の手の先づ染むべき所なり。此地一度ケープ領内に編入せられたりと雖、其宗主權は明かに承認さるゝに至らず。ケープ議會に於ても之を舊主に復すべしとの說高かりき。是に於てローズは委員の一人として現狀調査に赴く。思ひきや此地已に多數闌人の占むる所となり、密かに一假共和國の體裁を具へつゝあらんとは。而して事の方寸は實にかのクリューゲルが怪腕の致す所なりしなり。換言すれば南亞二雄の經略は圖らずも此地點に衝突したりしなりき。然れどもローズが敵は當時尙クリューゲル其人にあらずして却つてケープ政府並に議會に存したり。即ちローズが苦心よく曾長マレコローンを說服して其地の讓與を承諾せしめ、加ふるに住民の調印を經たるケープに合併を望むの請願書を携へて歸國せし彼に對し、ケープ政府は恬然として一顧を與へず。議會は又所謂アフリカンデル黨ありて英國膨脹を目的とする此讓與に批准するを欲せざりき。是に於てかローズは更に一大猛斷に出で、本國政府を說いて之を動かさんとす。植民大臣ダービー卿能く其議を容れ、本

國並にケープ政府が聯合統治としてかの地方の合併を許せり。ローズは大滿足を以てケープに歸る。而も南亞の政客明なく斷なく、又もや此議政府の拒む所となりき、ローズが不平失望何物か之に如かん。悄然たる彼は暫くキムバレーの野に去つて、專ら營利致富の業に從はんとす。哀れ大英帝國の覇業こゝに其發芽を見るに至らずして止みなんとするか。事復た意外に出づ、意外の刺激は意外の邊より出でゝ本國政府の方針頓に一變するに至れり。意外の刺激とは何ぞ。獨逸の西南アフリカ占領是なり。其策鐵血宰相が英斷より出づ。英政府恐愕措く所を知らず而も如何ともする事なし。實に英國に取りて言ふべからざるの屈辱なりとす。是に於てローズまた奮然として立てり、警告して曰く「ケープ後背の地今にして占領せずんば、ケープそのものゝ安危を如何」と。事已に急なり。ローズが議亦空しからず。乃ち總督ロビンソンをしてベチュアナランド全部占領を本國政府に申請せしむるに至る。恰もよし本國は總選擧の期に際せり。政府は多數を制せんが爲めに、かの獨逸によりて蒙れる屈辱を償ふに價する何物かを必要とせり。ベチュアナランド占領の議は、圖らずも此政策に利用されぬ。斯くて一八八四年英杜兩

國間に倫敦協約なるもの成れり。これトランスヴァールの外地侵略を沮止するものたるに外ならず。即ち杜國は英國に通知する事なくして、濫りに外邦を侵す事を禁ぜられたりき。而して之に繼ぎてベチュアナランド占領の宣言發せらる。ベチュアナランドの經營は、始め總督マッケンヂーによりて行はれしが、其對ボア人策宜しからず、忽ち其反亂を招けり。是に於てローズは新たに總督として騷擾沸騰鼎の沸くが如き渦中に投じ、豪膽果決着々として鎮撫の歩を進めぬ。然るに何事ぞトランスヴァールの元帥ジューベルト、鎮撫救援を名として却つて叛徒の煽動を行ひクリューゲルの横暴なる、遂に倫敦協約を蹂躙してベチュアナランド併有を宣言するに至る。英政府是に於てか斷ずる所あり。ヴォーレンが率ゆる四千の兵は一舉にして杜軍の鋭鋒を打破せんとす。哀むべしクリューゲルの政策もと虚喝に出づ。英國が此斷あるを見て倉皇平和を請ふに至れり。斯くて一八八五年、フォーチーン・ストリームの會あり、ローズ、クリューゲルの兩雄初めて相面接す。兩雄各胸間に絶大の雄圖を抱きて相見ゆるの光景、蓋し一幅の好畫題なりしならむ。

ベチュアナランド平定の後、將軍ウォーレンも亦止つて彼と共にあり。而も一は武斷政治を主張し、一は懐柔策を採り意見常に齟齬す。而して衆望の歸するローズに善からず、英人はローズを罵つて軟弱なりとす、アフリカンデルは彼を目して徒に領土を貪るものとなしぬ。ローズ此非難の間に立ち時機の未だ成すべからざるを觀望するや、寧ろ退いて巨大の富を作り、再び大帝國設立の時を待たんと決心し、乃ち總督の職を抛ちてキムバレーに歸る、時は一八八五年、ローズが事業こゝに一時期を劃す。吾人は引繼き彼が功業を語らんと欲するも、一度こゝに章を改むるの寧ろ便なるを信ずるなり。

五　ローズの功業　其二

一八八五年よりローズが名實ともにケープの政界より絶す。而も翻つて見ればこれローズが鋭意金剛石事業の經營に腐心し、進んでは英領南亞特許會社を創設し、長蛇の勢を以つて北方の大領土を英國々旗の下に收めんと圖りつゝありし時なりき。始めキムバレーを中心とせる各地の金剛石鑛區は、孰れも小規模にして群小併立の姿をなし居たるが、ローズの烱眼早くも大合同の必須なるを思へ

り。而して其計畫は實に一八七五年に起されぬ、斯くて其成立を見るに至りしは一八八八年の事なるが故に、其間十三年の長日月を經たり。十三年の年と月は其裏面に幾多の頓挫あり失敗ありしを語り、同時に又ローズが不撓不屈の氣象を示して餘りあるものに非ずや。

ローズが政界を退きたる當時、大鑛區漸く小鑛區を併呑し、規模資力共に雄大なる二坑競立の觀を呈しつゝありき。即ちローズ等が管するヂュベー坑、バルナト等が管するキムバレー坑之なり。而して兩者の主義理想自から相違あり、バルナトが望む所は唯富貴者にあり、二坑對立の勢を利用して價格の均勢を保ち得べしとなすものなり。ローズに至つては大に然らず、窮極の目的は富にあらずして帝國にあり。二坑を合同し、更に大規模の事業を發展せしめんと欲するものなり。かるが故に兩者が合同は輕く談笑の間に決する事能はず、激甚なる商戰は二者の間に行はれたり。即ち兩會社の間に猛烈なる株券買收の競爭起れり、而してローズが敏腕なる大富豪ロスチャイルド家の助力を得、戰況漸くにして好望、キムバレー坑の城壁將に壞潰し去らんとす。偶〻外敵の來襲は二者の和議合同を一決せし

めたり。他なし蘭人黨の領袖メリマンなるもの巨資を擁して漁夫の利を收め、茲に彼等が排外的理想を實現せんと欲しぬ。是に於てかローズ、バルナト及び外二人卓を圍み合同の議をなす。密談長時容易に決する能はず、午前に始りたる會議は翌朝の四時に至りて漸く解決せり、云ふまでもなくローズ派の勝利なり。バルナト喟然として曰く、「人各〻癖あり、子が帝國建立の癖、吾人唯其向ふ所に任せんのみ」と、蓋しローズが提議する所剩餘金を以て北方侵略の資に供せしめんとするを言へるなり。かくの如くにしてヂュベール聯合會社成り、多年の宿題漸く解けぬ。財務上の成効に次いでローズが平生の空想亦漸く實現に近からむとす。かのリンポ、河以北の地は當時マタベルランドと呼ばれ、ロベングェラの支配下に屬したりしが、外人の此地を窺ふもの一方葡萄牙あり、一方トランスヴァールあり、更に我ローズが垂涎措く能はず、默視するに忍びざりしものなり。而して杜國のクリューゲル盛に排英の說をなし、屢〻遠征隊を此地に送り、漸次占領の功を收めんとす。ローズ之を聞いて焉んぞ平かなるを得ん、乃ち總督ロビンソンに告ぐるに事の急を以てす。是に於てケープ政府はベチュアナランド副總督なるモファットを選ん

でマタベルランドに行かしむ。モフフット縱横の快辯あり、能くロベングェラを說得して協約を結ばしむ。約に曰く、マタベルランドにして他日外國の保護に依らんと欲する時は、必ず先づ英國に謀るを要すと。これ實にクリューゲルに對する一大痛棒にして、ローズが大企圖の第一着歩なりしと雖、彼が理想は此廣漠たる山河をして悉く赤色を以て彩り、女皇陛下永遠の治下たらしめんとするにあり。斯くの如くにしてかの有名なる英領南亞特許會社は創立せらるゝに至りぬ。而してロードッは此特許會社創立に先ち、豫めマタベル王に使者を送り鑛山採掘の專權を獲得したり。即ち一八八八年十月晦日の事にして、使者は彼が腹心ラッド、マギュール、トムソンの三人なり、マタベル王ロベングェラは之が報酬として毎月百磅の租稅と、小銃千挺、彈丸十萬發等を得たりき。

英領南亞特許會社は翌八九年十月、遂に其特許を政府より附與せられ、資本金百萬磅は立所にして成れり。特許とは即ち宣戰、媾和、文武官任免等政治外交に關する特權を指すものにして、其總監督は植民大臣の手に握らる。即ちマタベルランドは事實上全くローズが掌中に歸せしものに外ならず。ローズは此特權の下に

疆地の開拓を完成し、機會を覩て本國政府の直轄たらしめんと欲したるなり。特許狀はすべて三十五箇條より成り、其劈頭に會社の支配權の及ぼす境界を示せり。而も奇なる哉、この境界は唯東南の二面を示すに過ぎずして、北方及び西方に就きては何等言ふ所あらず。これ即ちローズが大抱負の存する所なり。彼が希望は單に區々たるマタベルランド、マショナランドに限らるべきものにあらず、更に北方ザムベジを越え、大湖の地方に達し、更に進んでは遠く埃及國境にまで及び、こゝに大陸を南北に縱斷して絕大の大帝國を實現せんと欲するにありしなり。特許會社既に成る。次に來るべきは實地の經營なり。實地の輕營は先づ探險隊の派遣を以て始められたり。ローズ私かに思へらく、マタベルの經營は先づ其一部にして比較的に温順なるマショナ地方より始むべしと。而して探險隊の進路はポルチュガルとの衝突を避け、海岸地方より入るを止めて、キムバレーより平押しに北進せり。斯くて一八九〇年三月キムバレーを發してマショナの地に入り、其首都ソルスベリーに達す。百難萬苦の間にありても幸にしてロベングェラと衝突することなく、又一方ボア人の探險企圖に妨害さるゝをも免れたりき。此時特許會社

の社長は言ふまでもなく、ローズ其人なりしが、其總支配人として敏腕を振ひたりしは後年侵入事件を以て有名なるジェームソンなりき。ジェームソンはエディンバラ出生にして、ローズと齢を同うし、もと倫敦大學出身の醫師なり。彼は亦ローズと等しく疾病の爲めに南亞の天地に放浪するの身となりしが、遂にローズの知遇を得て有力なる其片腕となりぬ。是に於てジェームソンは重任を帶びてロベングェラの廷に赴く。恰もよし蠻王リューマチスに艱めるに際し、ジェームソンの醫療頗る其効を奏し、爲めに多大の信頼を獲得せり。斯くてジェームソンは王に示すに彼特許狀を以てし、悉く其權利の確認を覓め、加ふるにマショナランド探險の許諾をも得たりき。これ探險隊の北行と相前後しての事にして、ジェームソンも亦ソルスベリーの地まで赴きぬ。新植民地の基礎すでになる。開拓起業に野心あるもの陸續として其跡を追ひぬ。斯くて新市街の發生せるもの已に數箇、白人の人口漸く加はる。ザムベジ以南舊マタベル、マショナの地、山河廣原十七萬五千哩、これ後に南ロデシアの名を以て、永く此英雄の光榮を傳ふるものなりとす。

飜つて他方を觀るにローズの肩上亦一大重責の加はれるを見る。即ちケープに

於けるスプリング内閣瓦解し、新内閣組織の興望は遂にローズが頭に落ちぬ。ローズ恰も新會社創立の際にあり。事務繁雑遽に其力の半を他に用ふるに忍びざりしと雖、總督の招聘固辭する事能はず、乃ち奮つて新内閣總理の椅子に就けり。これ一八九〇年の事にして、ローズが齢尚三十有七、强健の精力綽々として其大任に當れり。此時に於て特に注目すべきは、ローズ對アフリカンデル黨の關係なり。當時アフリカンデル黨の勢力は殆どケープの政界を支配し、其支配を受くる事なくては、到底政權を左右する事能はざりき。而してローズの理想もと英蘭兩民族の結合にあり。是に於てか其就職に先つて、豫め黨の首領と會談し、或る條件の下に其結托を全ふしたり。更に又翌九一年彼がマショナランド視察に赴きたる後、一箇の長書簡を黨に致して其主義政策を明かにせり。其趣旨は英領南亞植民地の植民は決して其人種の如何を論ぜずと雖、必ずや特許會社の支配下に服從するを要求したるものなり。

此年代に於けるローズが事蹟に尚一つ注目すべきものあり。即ローズ對本國政黨の關係なりとす。抑植民地自治なる主張は、ローズが年來の宿論にして、各植民